京都大学構内遺跡調査研究年報

1989～1991年度

京 都 大 学 埋 蔵 文 化 財 研 究 セ ン タ ー

序

埋蔵文化財研究センターでは，1977年に組織が設置されて以後，京都大学構内の吉田キャンパスのほか，理学部附属瀬戸臨海実験所構内などの附属施設を含めて計 45,000 m^2 を越える面積の発掘調査をおこなった。その間，縄文時代の集落の構造を知る良好な資料である住居跡や墓，古代の梵鐘鋳造跡，あるいは京と近江坂本を結ぶ街道として文献に記されている中世・近世の道路跡などが次々に発見されて，東山西麓の先史時代から近世に至る長い歴史の一端を具体的に復原することができるようになった。

この年報は，1989年から1991年の３年間に発掘および整理調査を終了した，医学部附属病院構内での３地点における調査成果を第Ⅰ部とし，過去の調査で蓄積した資料の分析および調査法に関する開発成果を第Ⅱ部の紀要としておさめている。

なお構内の発掘調査は，従来京都大学構内遺跡調査会を編成して埋蔵文化財研究センターの指導のもとに実施してきたが，1992年３月で遺跡調査会が解散し，同年４月から発掘調査を含めて成果の出版に至るまでの事業を埋蔵文化財研究センターがおこなうことになった。今後とも当センターの活動に御支援くださるようお願いしたい。

末筆ながら，長年遺跡調査会の活動に御協力いただいた委員各位，ならびにここで報告する調査のさいに協力してくださった施設部，医学部，理学部，医学部附属病院の関係各位にお礼申し上げる次第である。

1993年５月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

小　野　山　節

例　　言

1　本年報は，京都大学構内で1989年４月１日から1992年３月31日までに発掘，整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告，および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。

2　遺跡の位置は，図版１に示したように，国土座標にしたがって一辺 50 m の方形の地区割をおこなって表示した。

3　層位と遺構の位置については，国土座標第Ⅵ座標系（x＝－108,000　y＝－20,000）が（X＝2,000　Y＝2,000）となる京都大学構内座標によって表示した。

4　遺構の略号は，奈良国立文化財研究所の方式にしたがって，井戸：SE，土坑：SK のように表示し，各調査ごとに通し番号を１から付した。

5　遺物には，遺跡の調査名を示すローマ数字と，調査ごとの通し番号を１から付した。この遺物番号は，本文，実測図，写真を通して表示を統一した。

Ⅰ：京都大学教養部構内 AR21 区の立合調査

Ⅱ：京都大学病院構内 AH19 区の発掘調査

Ⅲ：京都大学病院構内 AE12・AE13 区の発掘調査

（例　Ⅰ1：京都大学教養部構内 AR21 区出土遺物１番）

6　原則として，遺物の実測図は縮尺 1/4，遺物の写真は約 1/2 に統一した。他の縮尺のものは，それぞれに縮尺を明記した。

7　第Ⅰ部の参考文献は，本文中に，〔著者名　発表年〕の形式で表わし，第Ⅰ部の末に一括した。ただし，本文中の発表年は西暦年号のうち下２桁で表示した。第Ⅱ部については，章末の注に一括して記載した。

8　遺構・遺物の実測と製図は，清水芳裕，五十川伸矢，浜崎一志，千葉豊，森下章司，伊藤淳史，石田由利子，植山京子，磯谷敦子，宮原恵美子がおこなった。遺物の撮影は伊藤淳史が担当した。

9　本文の執筆者名は各章の初めに記した。

10　編集は，清水芳裕が担当し，五十川伸矢，浜崎一志，千葉豊，森下章司，伊藤淳史，古賀秀策，石田由利子，磯谷敦子，中田敬子，宮原恵美子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度

目　　次

第Ⅰ部　1989～1991年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章　1989～1991年度京都大学構内遺跡調査の概要…… 1

1　調査の経過…… 1

2　調査の成果…… 1

3　北部構内BA28区の試掘調査 …… 2

4　教養部構内AR21区の立合調査 ……4

第2章　京都大学病院構内AH19区の発掘調査…… 7

1　調査の経過…… 7

2　層位と遺構…… 9

3　古代の遺跡……11

4　中世の遺跡……13

5　近世の遺跡……25

6　小　　結……29

第3章　京都大学病院構内AE12・AE13区の発掘調査……31

1　調査の経過……31

2　層　　位……31

3　遺　　構……32

4　遺　　物……37

5　小　　結……40

参　考　文　献……42

京都大学構内遺跡調査要項 ……44

第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 X

京都盆地の縄文時代遺跡……53

1　はじめに……53

2　京都盆地縄文時代遺跡の群別……53

3　遺跡群の時期的消長とその実態……55

4　遺跡を結びつける関係……66

5　展　　望……69

地理情報システムを用いた遺跡データベースの試験的研究……75

1　はじめに……75

2　図形情報データベース……76

3　文字情報データベース……77

4　地理情報システムについて……78

5　遺構データベースを用いた条坊地割の復原……83

図　　版……巻末

図　版　目　次

図版 1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

図版 2　京都大学病院構内 AH19 区

1　調査区北部全景（東から）

2　調査区南部全景（東から）

図版 3　京都大学病院構内 AH19 区

1　土坑 SK22（北から）

2　土坑 SK3 遺物出土状況（北から）

図版 4　京都大学病院構内 AH19 区

1　土坑 SK6 遺物出土状況（南から）

2　溝 SD5（東から）

図版 5　京都大学病院構内 AH19 区

1　井戸 SE1（北から）

2　井戸 SE2（東から）

図版 6　京都大学病院構内A H19 区

1　溝 SD20～SD23（西から）

2　溝 SD20 埋積状況（東から）

図版 7　京都大学病院構内 AH19 区

SK22 出土遺物，SK3 出土遺物

図版 8　京都大学病院構内 AH19 区

SK6 出土遺物

図版 9　京都大学病院構内 AH19 区

墨書土器，SK23 出土遺物

図版10　京都大学病院構内 AH19 区

SK43 出土遺物，SK20 出土遺物，SD5 出土遺物，SE2 出土遺物

図版11　京都大学病院構内 AH19 区

SD22 出土遺物

図版12　京都大学病院構内AH19区
SD22出土遺物，SD23出土遺物，SD24出土遺物
図版13　京都大学病院構内AE12・AE13区
1　AE12区西半の遺構（南から）
2　AE13区西半の遺構（北から）
図版14　京都大学病院構内AE12・AE13区
1　井戸SE25（東から）　2　井戸SE18（西から）
3　井戸SE11（南から）　4　井戸SE21（南から）
5　井戸SE22（南から）　6　井戸SE8（南から）
図版15　京都大学病院構内AE12・AE13区
SE2出土遺物，SE4出土遺物，SE15出土遺物，SE16出土遺物
図版16　京都大学病院構内AE12・AE13区
1　SE1出土遺物，SE5出土遺物
2　SE26出土遺物，SE24出土遺物，SE27出土遺物

挿　図　目　次

1989～1991年度構内遺跡調査の概要
図1　試掘調査の位置と周辺の調査区…… 3
図2　TP3～TP5東壁の層位…… 3
図3　立合調査の位置…… 5
図4　E地点・C地点・D地点・A地点・F～E間の層位…… 5
図5　SK2・SK1・黒灰色土出土遺物…… 6
病院構内AH19区の発掘調査
図6　病院東構内の遺構…… 8
図7　調査区の層位…… 9
図8　調査区検出の遺構……10
図9　SK22・SK44・SR1・SR2出土遺物……12
図10　土坑SK3遺物出土状況……13
図11　SK3出土遺物……14
図12　土坑SK6遺物出土状況……16
図13　SK6出土遺物(1)……18
図14　SK6出土遺物(2)……19
図15　墨書土器……20
図16　SK23・SK43・SK20・SK11出土遺物……21
図17　SD3・SD7・SD9・SD5・SE1・SE2出土遺物……23

図18　井戸SE1・SE2……24
図19　SD22出土遺物……26
図20　SD22・SD23出土遺物……27
図21　SD24出土遺物……28

病院構内AE12・AE13区の発掘調査

図22　調査区の層位……32
図23　近世の遺構……33
図24　井戸SE8・SE5……34
図25　井戸SE2・SE11……35
図26　井戸SE12・SE15・SE18・SE21……36
図27　SE2・SE1・SE5・SE4出土遺物……38
図28　SE15・SE17・SE16・SE26・SE24・SE27・SE22出土遺物……39

京都盆地の縄文時代遺跡

図29　京都盆地の縄文時代遺跡分布……54
図30　各府県・各地方の遺跡数時期別比率……56

地理情報システムを用いた遺跡データベースの試験的研究

図31　遺跡データベースの概念図……79
図32　遺構データベースの背景画像……80
図33　本部構内AW28区周辺の遺構……80
図34　発掘区の文字情報……80
図35　教養部構内AP22区の遺構の文字情報……81
図36　検索結果を点線で表示……81
図37　溝SD10と推定築地中心線……81
図38　街路に関する文献情報の表示……82
図39　検索結果を点線で表示……82
図40　白河の条坊地割復原図……82

表　目　次

表1　SK3・SK6出土土師器……15
表2　京都大学構内遺跡のおもな調査……48
表3　京都盆地時期別遺跡数の推移……57
表4　京都盆地土器型式別遺跡数の推移……57
表5　京都盆地縄文時代遺跡の消長……58
表6　主要な遺構のみつかった遺跡……63
表7　祭祀遺物出土遺跡……64
表8　遺跡別・時期別の土器の胎土……69

第Ⅰ部　1989～1991年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章　1989～1991年度京都大学構内遺跡調査の概要

第2章　京都大学病院構内AH19区の発掘調査

第3章　京都大学病院構内AE12・AE13区の発掘調査

第1章　1989～1991年度京都大学構内遺跡調査の概要

小野山節　清水芳裕　五十川伸矢

1　調査の経過

京都大学吉田キャンパスはそのほぼ全域が周知の遺跡となっているため，敷地内の建物新営やその他掘削工事のさいには，既知の遺跡との関係や過去の調査結果にもとづいて，予定地内の埋蔵文化財の調査を発掘，試掘，立合に分けて実施している。

1989～1991年度には以下の発掘調査2件，試掘調査1件，立合調査6件，資料整理2件を実施した。

発掘調査	医学部・遺伝子実験施設研究棟新営予定地（病院構内AE13区）	（第3章，図版1-198）
	分子生物科学実験研究棟新営予定地（病院構内AG14区）	（整理中，図版1-200）
試掘調査	理学部動・植物学科校舎新営（北部構内BA28区）	（第1章，図版1-201）
立合調査	理学部化学教室別館模様替工事（本部構内AY23区）	（図版1-199）
	病院地区基幹整備　教養部構内工事（教養部構内AR21区）	（第1章，図版1-202）
	病院地区ゲート廻り等整備工事（病院構内AE16区）	（図版1-203）
	胸部疾患研究所情報通信設備工事（病院構内AF12区）	（図版1-204）
	農学部農業研究所施設等通信設備取設工事（北部構内BG35区）	（図版1-205）
	農学部附属植物生殖質研究施設新営（京都府向日市）	（表2-206）
資料整理	附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地（病院構内AH19区）	（第2章，図版1-191）
	ウイルス研究所実験研究棟新営予定地（病院構内AE12区）	（第3章，図版1-192）

なお京都大学構内での埋蔵文化財の発掘調査は，1976年以後，京都大学構内遺跡調査会を主体に実施してきたが，1992年3月をもって調査会は解散することになった。その間埋蔵文化財研究センターの指導のもとに発掘調査を実施し，その成果の報告と出版に関する事業を当センターがおこなうという，一連の関係で調査がすすめられてきた。この解散にともなって，1992年4月以降は発掘・整理調査を含めて，埋蔵文化財研究センターが実施することになり，現在に至っている。

2　調査の成果

前節であげた1989～1991年度の調査から，吉田キャンパス内の遺跡についてあらたに得られた知見をまとめて略述する。なお，AH19区，AE12・AE13区の発掘調査について

は，第2章と第3章で，BA28区の試掘調査，AR21区の立合調査については，本章第3・4節で詳述する。

病院構内AH19区の調査では，先史時代から近世にわたっていくつかの新たな情報が得られた。まず，縄文中・後期の土器が白川系堆積物中に含まれており，聖護院遺跡の広がりがこの付近にまで及んでいることが明らかになった。また，奈良時代の住居跡と考えられる遺構があり，北西約100mの地点（図版1-154）でも，7世紀後半から8世紀初めの土師器や須恵器を出土する遺構が検出され，平安京造営以前のこの一帯の土地利用に関する資料を加えるものとなった。さらに，12世紀中葉ごろの時期の土師器を多量に含む土坑では，燈明皿として使用された痕跡を残すものが多く，また墨書をもつ土師器も含まれており，この調査区近辺に比定されている福勝院の祭祀に関係する遺構の可能性も高い。その他近世の多数の遺構が検出されており，この時期の聖護院村，吉田村の景観の復原に資するものとなった。

病院構内AE12・AE13区の調査では，中世の遺物が少量出土するものの，この時期の遺構は検出されていない。北東へ約50mの位置にあたる医療技術短期大学部の校舎新営予定地の調査（図版1-39）では，平安中期の護岸跡が検出されており，平安時代から中世の時代を通じて徐々に開発の手が加えられた一帯であったことがわかる。近世の遺構では，井戸，野壺，柵列など，畑作に関係する遺構とともに，この時期の遺物が多数出土することから，中世以後の開発が近世に至ってほぼ安定し，近世聖護院村の周辺にひろがる畑地として機能したことが明らかになった。

3　北部構内BA28区の試掘調査

本調査は理学部動・植物学科校舎新営の計画にともない，予定敷地内の試掘調査をおこなったものである（201地点）。北白川追分町遺跡の西南端にあたり，周辺では弥生中期の方形周溝墓と鎌倉初期の火葬塚（54地点），古代の建物跡や近世の瓦溜（109地点）などが検出されている。そのほか農学部と理学部本館の新営工事のさいの発掘および183地点の試掘調査などから，弥生時代以前の旧地形を復原すると，本調査区は東北方の微高地から南西へ急激に下がった低地，あるいは旧河川の谷部に想定される位置にあたる（図1）。

予定地内に2m×2mの試掘坑を計5ケ所設けて，層序と出土遺物の確認をおこなった。各試掘坑の間で若干の差はあるが，全体に次のような点が確認できた（図2）。表土下に，上から近世の遺物を含み耕作土と思われる灰褐色土，中世の遺物を少量出土する茶

褐色土となる。さらに，黄褐色砂礫あるいは一部の試掘坑では黄褐色粘質土とともに，全試掘坑で共通して厚い黄色砂がつづく。この黄色砂層は，従来の調査から弥生前期末～中期初頭に堆積した土石流にともなうものであることが明らかになっており，その上面は東北のTP2では地表下約1.5m，西南端のTP3で地表下約2mである。いずれの試掘坑でも黄色砂層の下面の確認はできなかったが，この上面の傾斜から全体の旧地形が東北から南西へ向かって緩やかにさがっていた状況がわかる。この砂層中から縄文土器が出土しており，縄文時代の包含層がさらに下層に存在することが予測できた。また慶応4（1868）年刊の『改正京町御絵図細見大成』には，この予定地付近に土州屋敷が描かれており，これに関する遺構にも留意しておく必要がある。

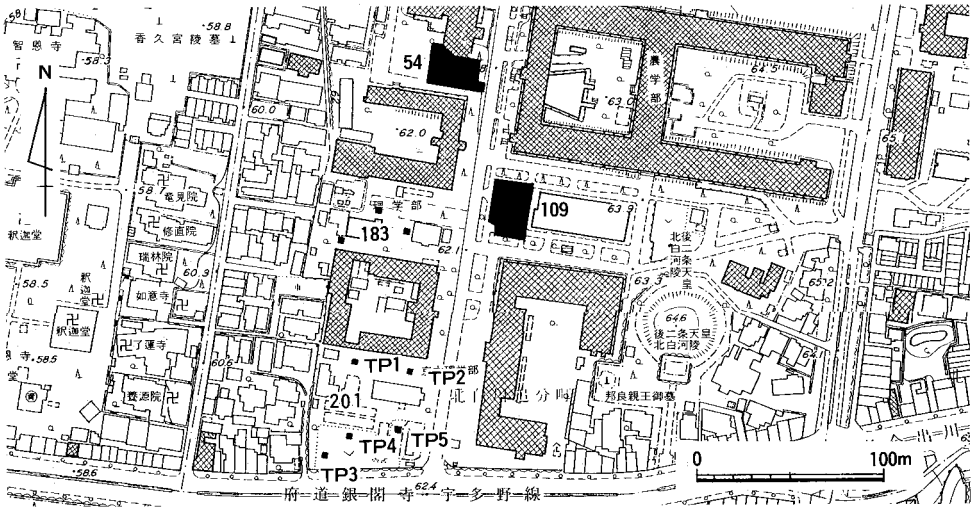


図1　試掘調査の位置と周辺の調査区　縮尺1/4000

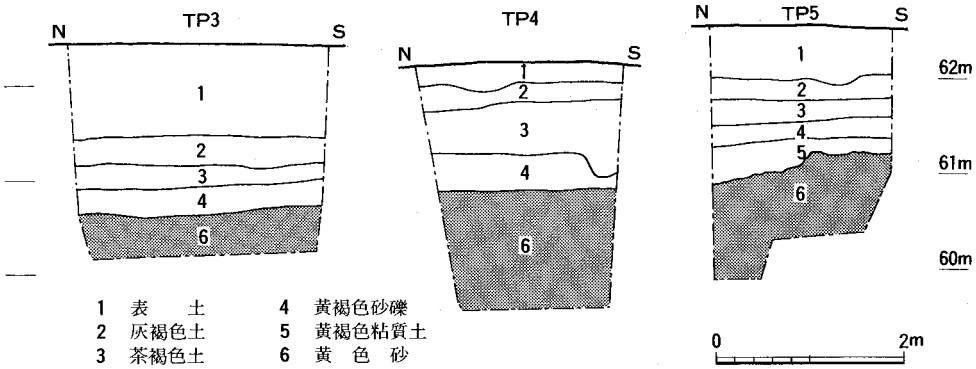


図2　TP3・TP4・TP5東壁の層位　縮尺1/80

4　教養部構内AR21区の立合調査

教養部構内西北域の吉田グランド西縁・北縁の電気管埋設にともなう立合調査で，以下のような遺構を検出した（図版1-202）。立合調査地の南に隣接する111地点では，1981年度の発掘調査によって，弥生時代の水路，古墳時代中期の方墳，奈良時代の建物，平安中期の梵鐘鋳造遺構，中世の邸宅跡と墓地，近世の道路と沿道に広がる畑地の溝など，多様な遺構が発見されており〔五十川・飛野84〕，これらの延長部分と考えられる道路遺構や包含層が，吉田グランド南縁の立合調査ですでに確認されていた。また，吉田グランドの西側の東大路通りや東側の教養部東北域とは，段差が明瞭にみとめられるが，その表土の下には中世の半ばごろの包含層がそれぞれほぼ水平に堆積していることから，グランドの平坦な地形も京都大学設置以降の造成によるものではなく，中世には形成されていたことが判明している（図3）。

今回，立合調査をおこなった地点の基本的な層位を図4に示す。表土下には，近世の耕作土とみられる灰黒色土（第2層），13世紀～14世紀の遺物を含む茶褐色土（第3層）がほぼ水平に堆積している。次に黒褐色土などを介して，弥生時代の前期末～中期初頭ごろに堆積した黄色砂（第7層）が全面に分布する。赤褐色粘質土（第8層）は111地点で検出したように弥生前期ごろに形成されたものと考えられる。黄灰色シルト（第9層）は教養部構内から医学部構内にかけて堆積しており，後述のように土取りの対象となった。その下には，茶褐色あるいは黄白色の砂（第10・11層）がみられる。

F地点では，黄色砂の上面で掘形が一辺約2.5mの隅丸方形の土坑を検出した。立合調査のため，底まで掘削していないが，壁はほぼ垂直であり，中世の井戸と推定できる。F地点とE地点の間では，SK2，SK1などの小規模な土器溜のほか，近世の土取りの跡（図3斜線部分）を検出した。採取されたのは黄灰色シルトとみられ，こうした土取り跡の遺構は，医学部構内において中世半ばから近世初頭のものが検出されており〔清水・吉野81，五十川86，浜崎90〕，また，病院構内の北辺で近世の半ばごろのものが発見されている〔五十川ほか89〕。とくに病院構内の154・155地点では，大規模に黄灰色シルトやさらに下層の黒褐色粘質土が採取されており，これらは，焼物の素地として利用された可能性が高い。中世の土取り跡は不整形を示すのに対して，近世のものでは方形の掘削単位が明瞭にみられ，田畑の畔をのこして大規模に採取しているところに特徴があり，近世には土が商品として組織的に採取されたことを物語っている〔五十川91〕。

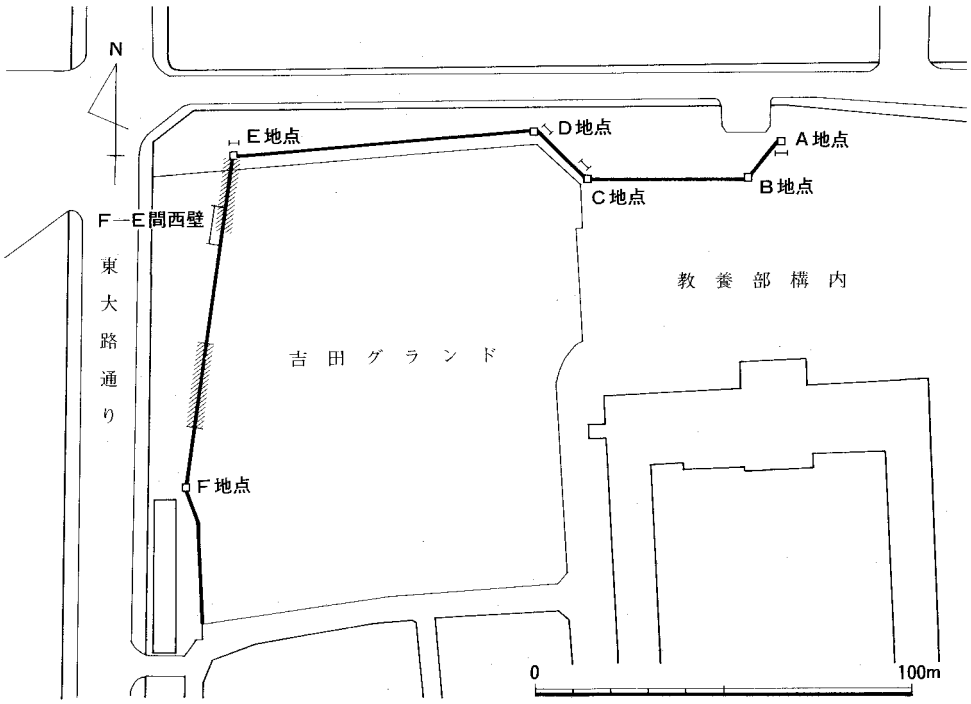
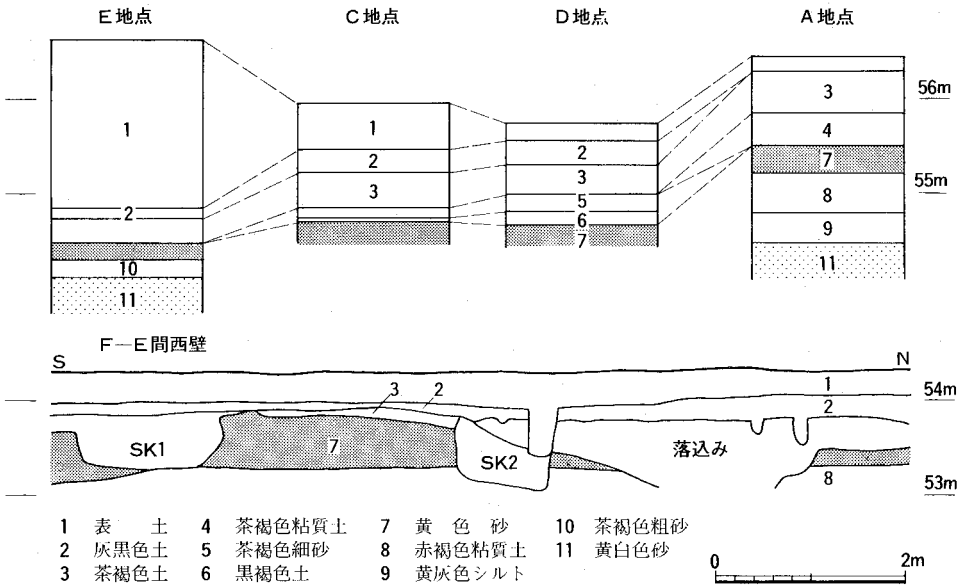


図3　立合調査の位置　縮尺 1/2000



1　表　土　　4　茶褐色粘質土　　7　黄　色　砂　　10　茶褐色粗砂
2　灰黒色土　　5　茶褐色細砂　　8　赤褐色粘質土　　11　黄白色砂
3　茶褐色土　　6　黒褐色土　　9　黄灰色シルト

図4　E地点・C地点・D地点・A地点・F～E間の層位　縮尺 1/80

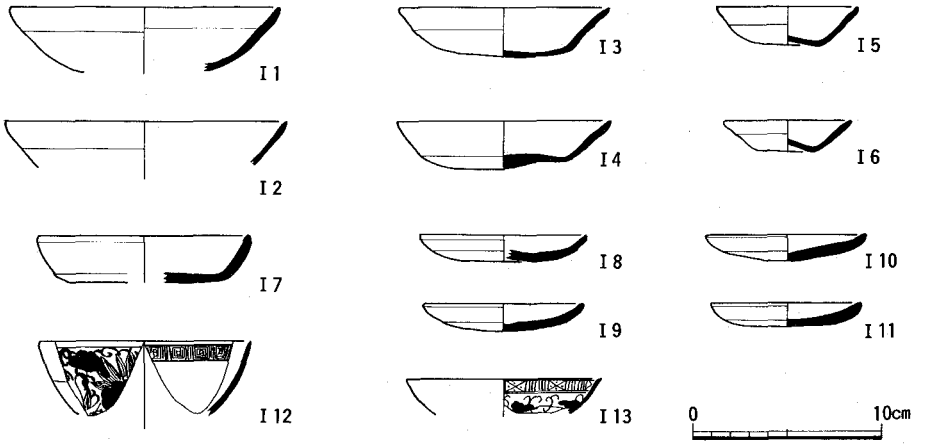


図5　SK2出土遺物（Ⅰ1～Ⅰ6土師器），SK1出土遺物（Ⅰ7～Ⅰ11土師器），黒灰色土出土遺物（Ⅰ12・Ⅰ13染付）

土坑SK1・SK2，黒灰色土の出土遺物を図5に示す。Ⅰ1～Ⅰ11は土師器。Ⅰ1・Ⅰ2は灰白色を呈する椀，それぞれE_2類，E_1類の口縁形態を示す。Ⅰ3・Ⅰ4は赤褐色を呈する皿，E_1類の口縁をもつ。Ⅰ5・Ⅰ6は灰白色の凹底小椀。Ⅰ7～Ⅰ11は赤褐色の皿，D_5類の口縁をもつ。これらは，ほぼ13世紀中葉ごろから14世紀前葉ごろの資料である。Ⅰ12・Ⅰ13は染付。近世の後半のものと推定され，黒灰色土は，近世後半の畑地にともなうものと推定される。

このように，吉田グランド一帯にも，中世前半の邸宅もしくは集落の遺跡が広がっている可能性が高い。また，近世には田畑となっているが，土の採取が大規模におこなわれていたことも判明した。

第２章　京都大学病院構内AH19区の発掘調査

浜崎一志　千葉豊　森下章司

１　調査の経過

本調査区は吉田山西南麓，京都大学医学部附属病院構内の東部にあたる（図版1-191）。ここに臨床研究棟および中央診療棟の新営が計画されたため，既存建物を除く予定地全域の発掘調査をおこなった。既存建物を残したままで調査を進めたため，発掘区が不整形になり，便宜上，発掘区を北部，東部，南部，西部として記述する（図６）。

本調査区一帯は，平安時代末に，法勝寺をはじめとする六勝寺の造営を機に展開した白河街区の北部に位置する。また，鳥羽法皇の皇后，高陽院泰子祈願の福勝院（12世紀中葉～13世紀後葉）の比定地に隣接する地にもあたる。このほか，浄土宗最初の律院であった照臨院（18世紀前葉～19世紀）が調査区周辺に比定されている。江戸中期から幕末にかけては，調査区の南の聖護院村に大田垣蓮月，富岡鉄斎，中島棕隠などが集まり住み，文人墨客の集う所としても有名であった。[(1)]

周辺の発掘調査では，1985年度に本調査区の北で実施した154・155地点の調査で古代の土坑，中世の井戸と溝，近世の大規模な土取り穴を検出している（図６）。また，1984年度におこなった南の141地点では近世の池や幕末の土坑を検出している。幕末の土坑からは大田垣蓮月の手による蓮月焼が多量に出土し，蓮月の住居が141地点のすぐ南にあったことを明らかにした〔浜崎・宮本87 pp. 52-55〕。これらの調査の結果から，本調査区でもこうした遺構の検出が予測されていた。

今回の調査では，まとまって出土した多数の縄文土器や，奈良時代の土器と焼土塊をともなう土坑を検出した。前者は付近に縄文集落の存在をうかがわせるものであり，後者は住居跡の可能性がある。中世では建物跡や，多量の土器が投棄された土坑が，また近世では大規模な溝群や，照臨院に関連すると考えられる多量の瓦や陶磁器が出土した。出土した各時代の遺物は整理箱187箱におよび，先史時代から近世にわたる，この地一帯の土地利用の変遷を復原するうえで大きな成果を上げることができた。

なお，縄文時代の遺物に関しては，『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』において，高野川系，白川系の流路があり，複雑な地形環境を形成していた病院構内一帯にも，自然堤防上や微高地上に縄文人の活動が及んでいたことを指摘しており〔千葉91〕，本稿では割愛した。

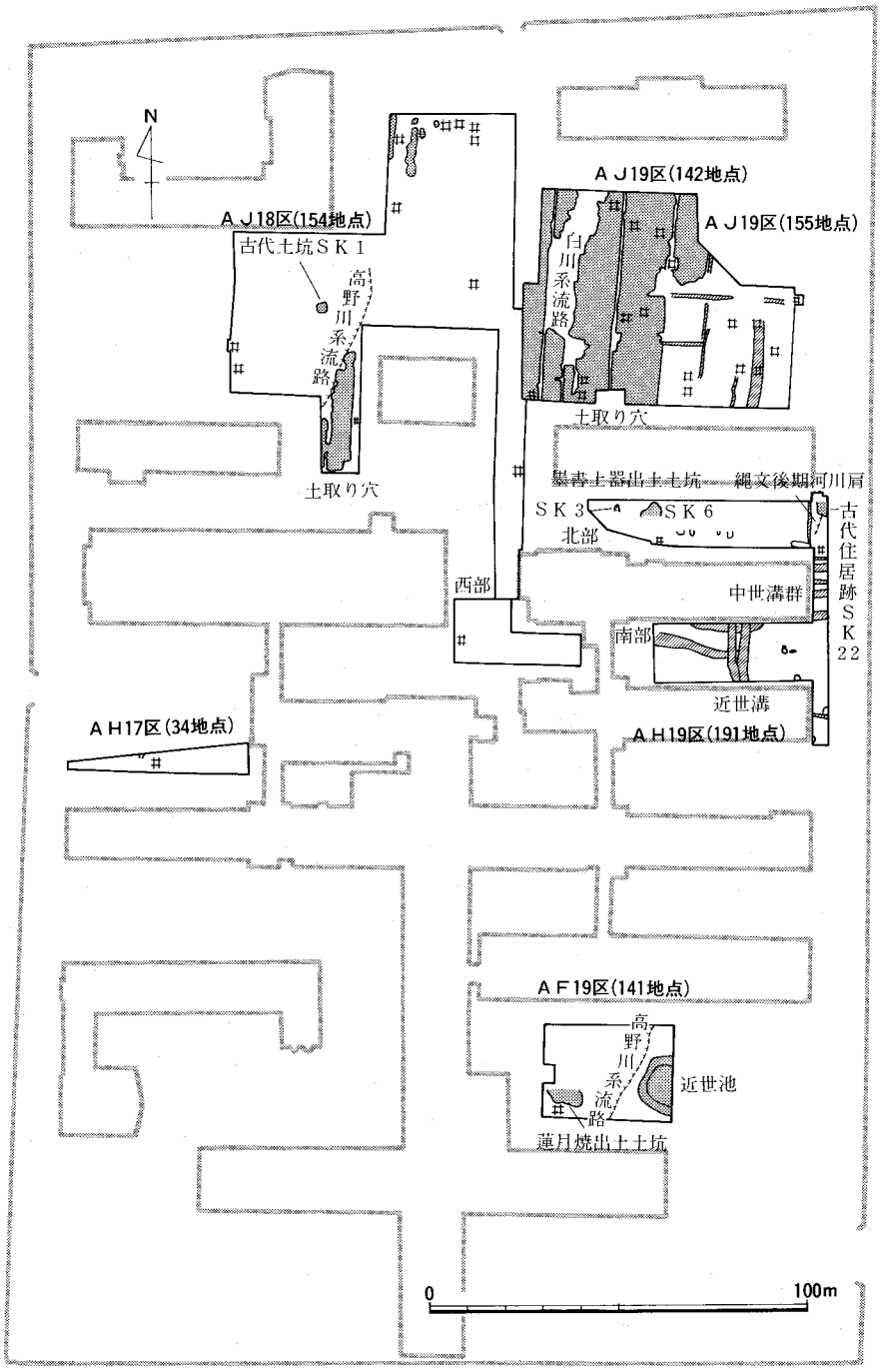


図6　病院東構内の遺構　縮尺 1/2000

2　層位と遺構

本調査区の現地表は，北東端で標高約 50.5 m，南西端で 49.0 m を示し，北東から南西にかけて緩やかに傾斜する。この一帯は，旧白川の形成した扇状地の扇端部にあたり，鴨川にもほど近い。基本的層序は，上から表土，茶褐色土，黒色土，暗灰色粘質土，白色砂礫，黄灰色シルトとなっている。本調査区一帯は近代に大規模な削平をうけており，近世の遺物包含層はなかった（図 7）。

茶褐色土は中世の遺物を多量に含む層である。調査区西部では攪乱によってほとんど遺存していなかったが，北部と南部では平均して 20～30 cm の厚さを残している。中世の遺構はいずれもこの茶褐色土を埋土としている。調査区の東部北端および南部においては

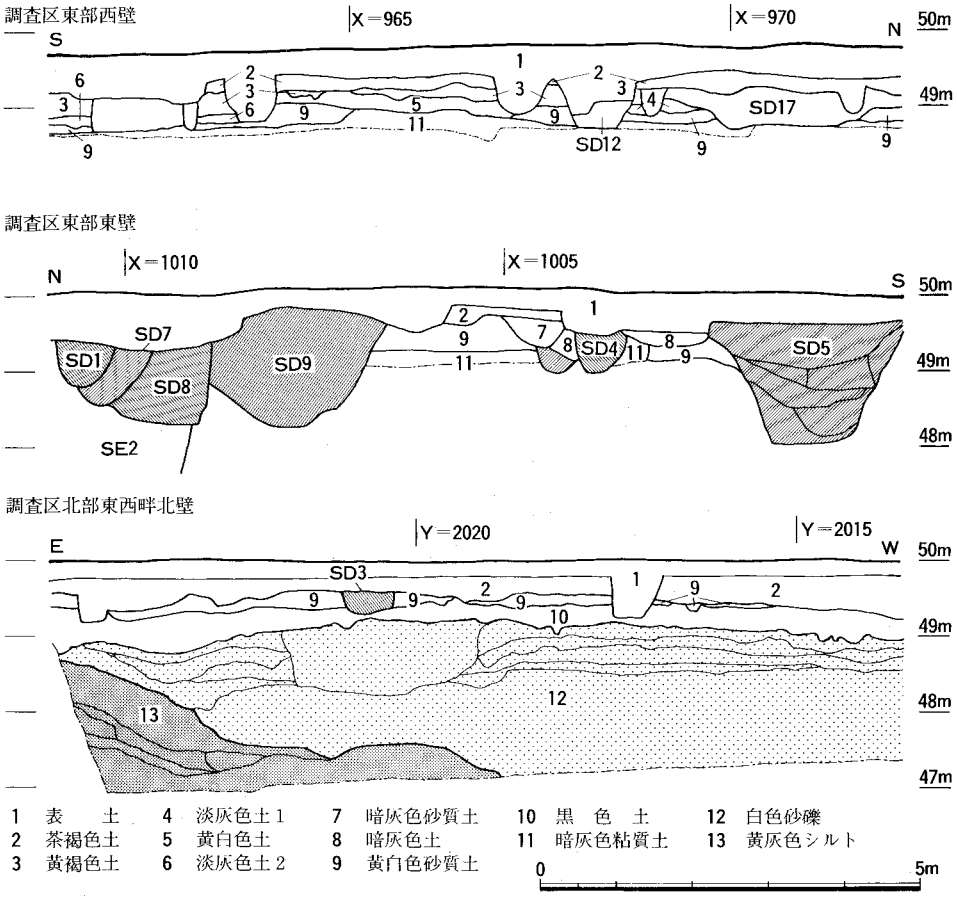


図 7　調査区の層位　縮尺 1/100

部分的に，古代の遺物を出土する砂質土層が茶褐色土の下に存在する。調査区南部ではこの砂質土を埋土とし，北東から南西方向へ向かう2本の流路を検出したが，いずれも古代の遺物を含む。その下の黒色土と暗灰色粘質土は共に無遺物層であり，前者はおもに調査区の北部から南部にかけて厚く堆積しており，後者は東部南端に堆積している。

黄灰色シルト，白色砂礫，赤褐色砂礫の厚い堆積は高野川系旧流路と白川系旧流路によって形成されたものであり，調査区北部でおこなった深掘りでは，流路の肩にあたる部分を検出した。白色砂礫中からは，ほとんど摩滅していない縄文土器片が整理箱に7箱出土している。

本調査では，古代の土坑，中世の柱穴，井戸，土坑，溝，近世の大溝，土坑を検出して

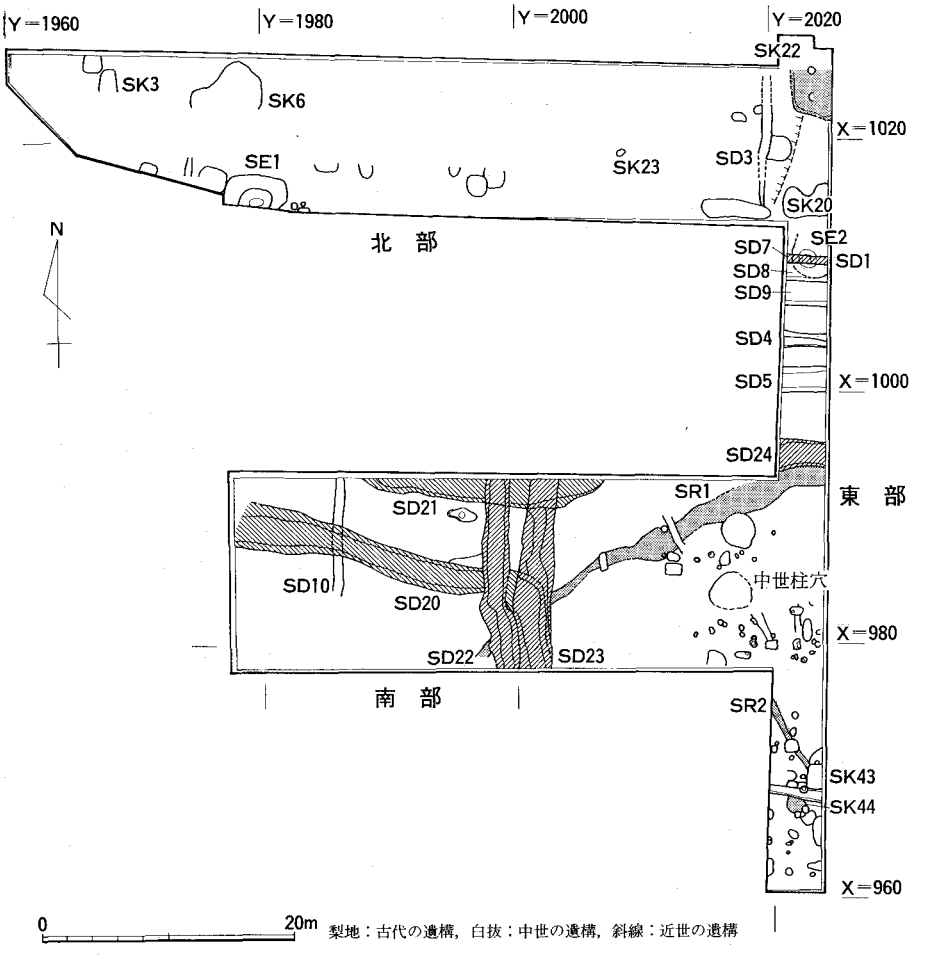


図8　調査区検出の遺構　縮尺 1/600

いる（図版2～6，図8）。調査区東部，X＝1000～1010付近で，東西にはしる7本の溝SD1，SD4，SD5，SD7～SD9，SD24を検出した。溝SD1・SD24が近世の遺物を含むほかは，14世紀の遺物を含む。この溝の集中する部分が近世の吉田村と聖護院村の字境界と一致することから，この付近に中世以来の土地境界あるいは道路があったものと考え，白河の条坊地割の復原を試み，この溝群のうちSD5とSD9が勘解由小路末の側溝にあたる可能性を指摘した〔浜崎91〕。この溝群を境に遺構の分布状況が変化する。井戸はこの溝群より南では検出しておらず，これらの井戸は154・155地点で検出した多数の井戸と一連のものである可能性が高い。土坑も溝群の北に多く，遺物の出土量も北が圧倒的に多い。また，154・155地点では近世の大規模な土取り跡を検出したが，こうした土取りは本調査区まではおよんでおらず，近世の遺構は調査区南部で溝群を検出したにとどまった。

3　古代の遺跡

古代の遺構は，暗褐色粘質土層あるいはその下の黄白色砂層を掘り込んで形成されている。遺構は調査区東半部に分布するが，その数は少ない。出土遺物は8世紀代のものと10世紀のものがみられるが，空白期間が多く，継続的な生活の跡は認められない（図版3，図8・9）。

土坑SK22　東部北端で検出した方形の土坑で，南北，東西の検出長は，ともに約3m，検出面からの深さは0.3mを測る（図版3-1）。輪郭は一部明確でないが，隅丸方形を呈することや，発掘区の東壁脇で検出した焼土塊，柱穴などから竪穴住居の可能性が強いものと考える。なお，同時期の方形の竪穴住居は約700m東北の本部構内75地点でも確認されている〔五十川81 pp. 29-31〕。

Ⅱ1・Ⅱ2は土師器杯。Ⅱ3は土師器甕。体部外面は刷毛目調整，内面と口縁部外面は撫でによって調整している。Ⅱ4は口縁が体部より開く器形で鍋に近い。口縁端部は上方につまみあげる。内面下部に当て具痕が残り，胴部下半は叩いた後で刷毛目調整を加えて仕上げたものとみられる。Ⅱ5・Ⅱ8は須恵器杯身。底部に篦切り痕が残る。Ⅱ6は杯蓋。つまみはきわめて偏平で，端部の屈曲もほとんどない。Ⅱ7は鉢。下半には削り痕を残す。精良な仕上げであり，器形からみても金属器を模倣したものであろう。以上のような出土遺物からSK22は8世紀末ごろに位置づけられるだろう。

土坑SK44　調査区南部で検出した土坑である。黒色土器や土師器甕を出土した。黒色土器はいずれも内面のみ炭素を吸着させたA類である。Ⅱ9は黒色土器の椀の底部。内

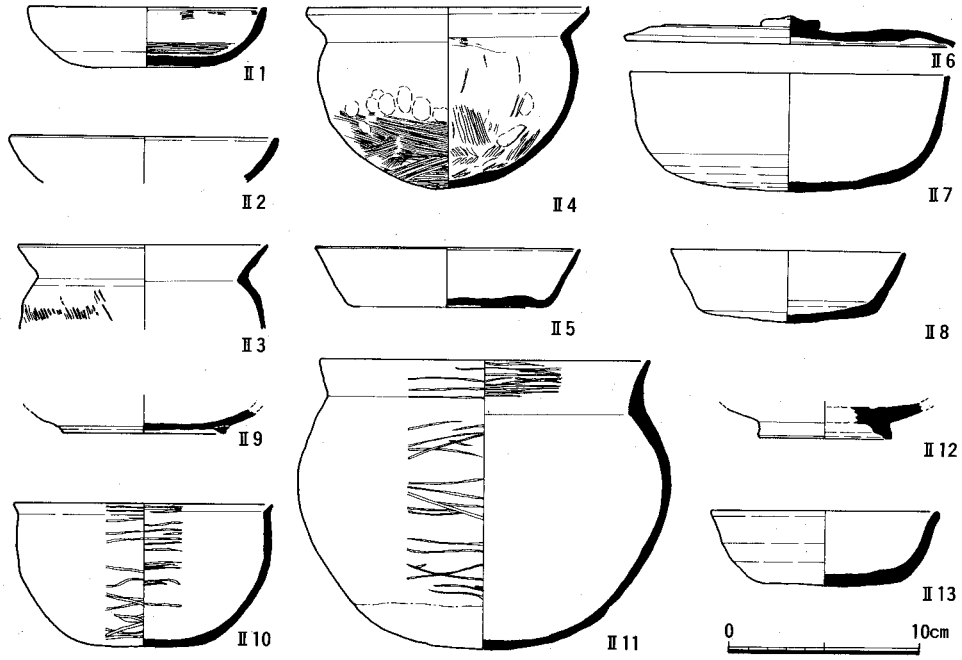


図9　SK22出土遺物（Ⅱ1～Ⅱ4土師器，Ⅱ5～Ⅱ8須恵器），SK44出土遺物（Ⅱ9～Ⅱ11黒色土器），SR1出土遺物（Ⅱ12緑釉陶器），SR2出土遺物（Ⅱ13須恵器）

面には篦磨きを密にし，外面は撫で調整を施す。Ⅱ10は黒色土器鉢。口縁部は短く外方に折り返し，底部は平底に近い器形である。内外面とも篦磨きを施す。Ⅱ11は黒色土器の甕。頸部の屈曲がゆるくなだらかな肩をもつ。内外面ともに篦磨きを施したようである。底部下半は，明確な境界を挟んで赤変し器面が荒れており，竈などの施設に置いて火にかけたことがうかがわれる。この他に，端部を内側に折り返す土師器甕や鍔が大きく張り出す大和型の土釜が出土している。10世紀ごろの資料であろう。

流路SR1　調査区南部で検出した自然流路である。幅は約1.5～2.2m，検出面からの深さは0.2～0.8mを測る不整形な流路である。北東から南西方向に流れる。Ⅱ12は流路内から出土した緑釉陶器。高台に段をもつ近江産の緑釉陶器椀と考えられる。釉は濃緑色で見込みに圏線がめぐる。見込みと底部にトチンの痕が残る。10世紀後半に位置づけられる。

流路SR2　調査区南部で検出した北西から南東に向かう自然流路である。暗灰色粘質土層を掘り込み，幅は約0.4m，深さは検出面から約0.1mを測る。Ⅱ13の須恵器杯身が出土した。

4　中世の遺跡

中世の遺構は時期によって位置が異なる。調査区北部に位置する12世紀の土坑をはじめとして，13世紀の遺構は北部から東部南半に，14世紀の遺構は南東部に多く，15世紀の遺構は南部，というようにほぼ時期を降るにしたがって，南部に分布の中心が移動する。ただし調査区南部西半ではほとんど遺構はみられない。近世以降に削平された可能性もあるが，本来少なかったものと思われ，遺構の中心は北部と東部にあったものとみてよい。以下，遺構の時期の順にほぼ従って，各遺構の特徴と出土遺物について記述する。

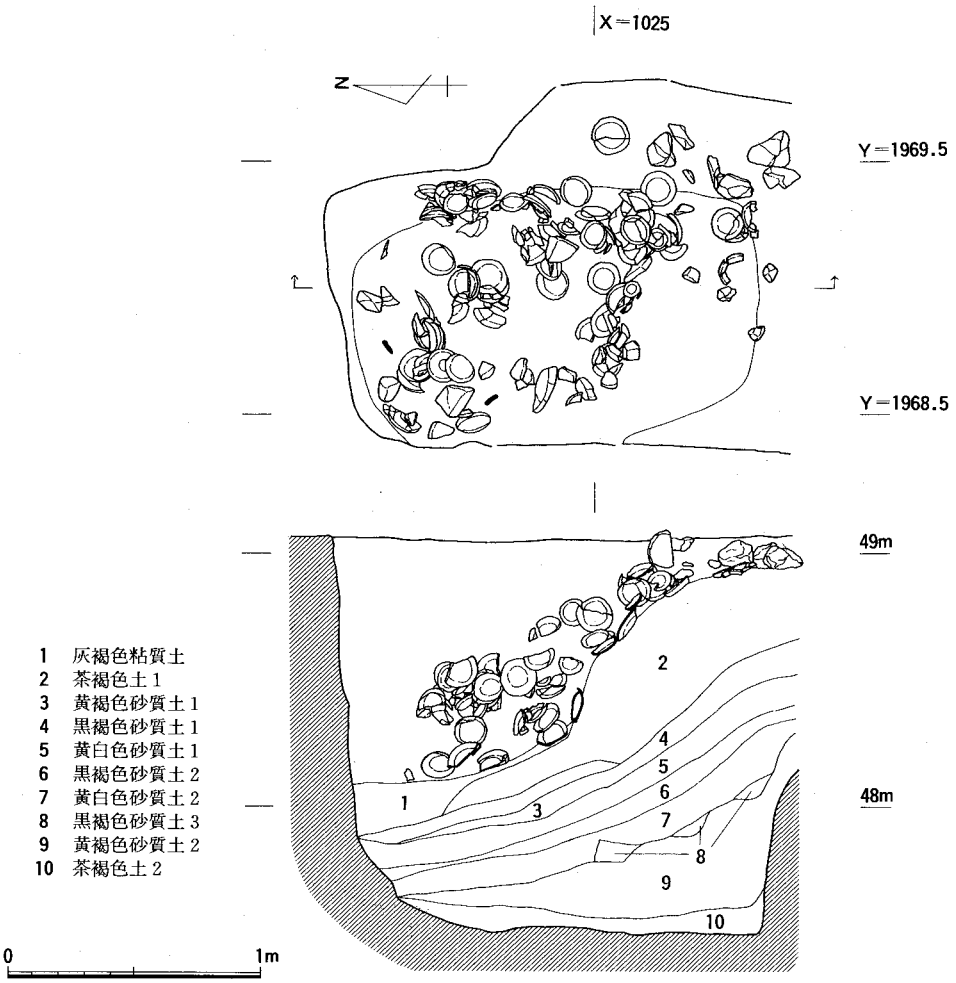


図10　土坑SK3遺物出土状況　縮尺 1/30

土坑SK3（図版3-2，図10・11）　調査区北部，X＝1025，Y＝1969付近に位置する。管路によって南半を破壊されているが，長さは2.1 m前後でおさまるものと推測され，幅は北辺で1.1 m，南辺で1.4 mを測る。検出面からの深さは1.55 mを測る。

埋土の状況は上半と下半の2つに分けられる。下半は土坑を堀りくぼめたときの掘削土の埋め戻し土と考えられ，茶褐色土，黄褐色・黒褐色・黄白色砂質土，灰褐色粘質土が南側から北側へ向かって傾斜をつくりながら埋積している。遺物下半の埋土からは遺物はほとんど出土していない。上半には茶褐色土が埋積し80個体をこえる土師器皿，少量の瓦器椀，灰釉系陶器の小片を包含していた。土師器皿は上面から出土した一部を除いて，ほとんど完形に復原できるものであった。遺物は下半の埋積によって形成された北に下がる斜面に沿って，南側から置かれた，あるいは廃棄されたような状況で出土した。土坑の壁や斜面にもたれかかるように，ほぼ垂直に立っていた土師器も多量にみとめられた。出土遺物のほとんどが完形の土師器皿で占められることや，埋積の状況，底部外面に人面を墨書した土師器皿が出土していることから，祭祀にかかわる遺構である可能性が高い。

Ⅱ14～Ⅱ23はSK3出土遺物。Ⅱ14～Ⅱ19は口径14.1～14.6 cmを測る大型の土師器皿AⅠ類，Ⅱ14は2段撫で素縁手法C_3類，Ⅱ15～Ⅱ17は2段撫でつまみ手法C_4類，Ⅱ18・Ⅱ19は2段撫で面取り手法C_5類。Ⅱ16は底部に焼成後の穿孔を有する。Ⅱ16の口縁部内外面には煤が付着しており，底部の小孔に燈芯を通し，燈明皿として使用したものであろう。Ⅱ20・Ⅱ21は，口径10 cmを測る土師器皿AⅡ類。このほかに土師器皿の中に

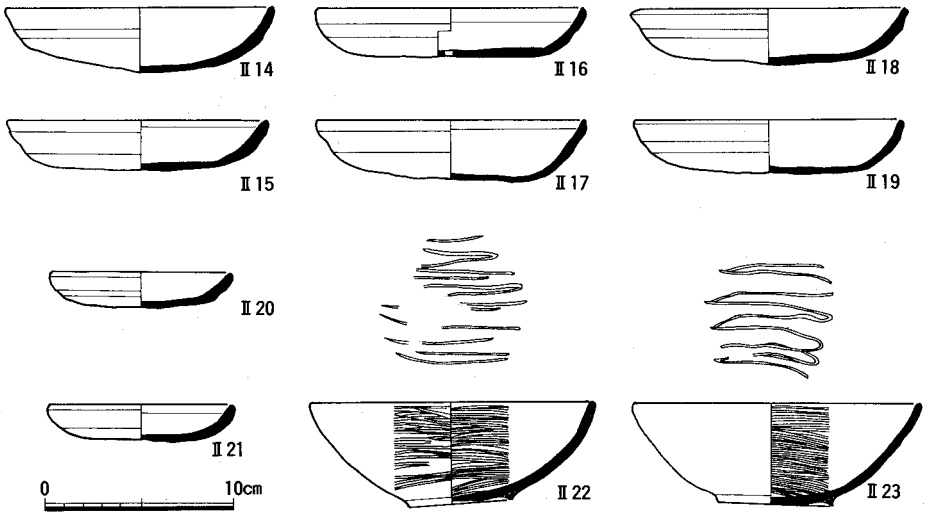


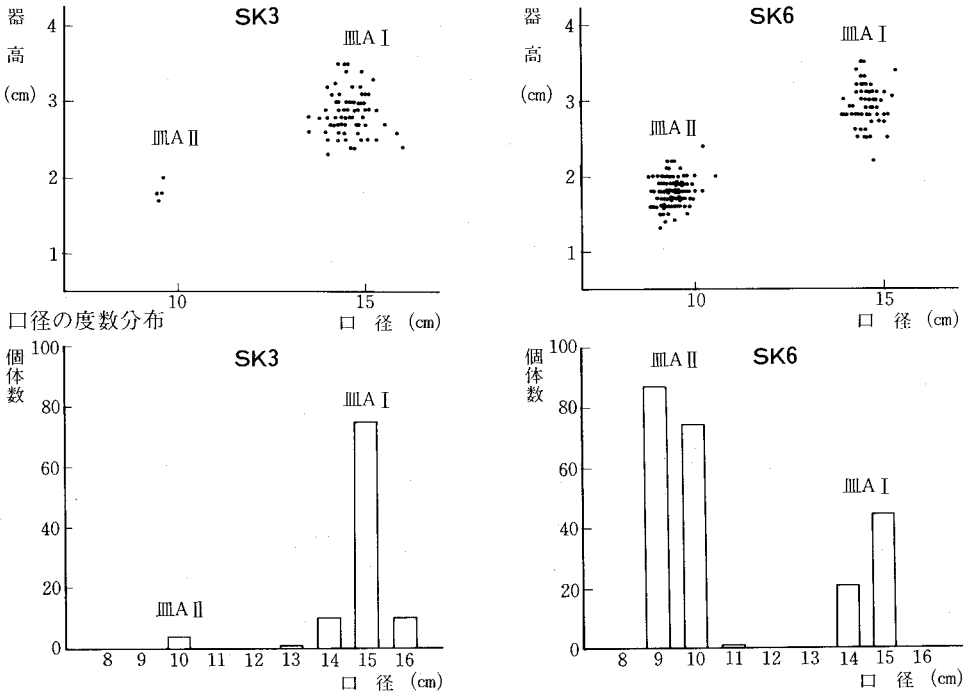
図11　SK3出土遺物（Ⅱ14～Ⅱ21土師器，Ⅱ22・Ⅱ23瓦器）

表1　SK3・SK6出土土師器

規格別口縁部形態の比率

SK3		SK6					
ⅢAⅡ 個体数4.8個体	ⅢAⅠ 75.7個体	ⅢAⅡ 個体数 162個体				ⅢAⅠ 66個体	
C_3 類 55.1%	C_3 類 32.6%	C_2 類	0.0%	D_2 類	0.0%	C_2 類 1.2%	D_2 類 2.4%
		C_3 類	30.3%	D_3 類	3.0%	C_3 類 28.4%	D_3 類 14.9%
C_4 類 5.2%	C_4 類 62.4%	C_4 類	51.6%	D_4 類	4.5%	C_4 類 37.7%	D_4 類 7.4%
		C_5 類	9.1%	D_5 類	0.0%	C_5 類 6.8%	D_5 類 0.6%
C_5 類 39.7%	C_5 類 5.0%	D_1 類	1.5%			D_1 類 0.6%	
合 計 100.0%	合 計 100.0%	合 計			100.0%	合 計	100.0%

法 量 分 布



人面墨書土器が1点（Ⅱ55）含まれているが，これについてはSK6出土の墨書土器とまとめて記述する。Ⅱ22・Ⅱ23は瓦器椀。両例とも見込みには，蛇行する暗文が施されている。これらの遺物は12世紀中葉のものであろう。

SK3から出土した土師器皿を口縁部計測法で総計すると80.5個体となった。そのほとんどは口径 15 cm にピークをもつ大型のⅢAⅠ類で，全体の94.0%を占める。口縁部手法

は2段撫でつまみ手法 C_4 類のものと2段撫で素縁手法 C_3 類が多く，2段撫で面取り手法 C_5 類のものは少ない。

土坑SK6（図版4-1，図12～14）　東西方向の長さ6.0m，南北方向の検出長5.0m，検出面からの深さ1.0mを測る大規模な土坑である。南半分は攪乱を受け，南北長は不明である。埋土の状況から西半部と東半部の2回にわたって埋積したことがわかる。東半部の埋土は多量の土師器皿と瓦器椀などを含む。西半部の埋土は土師器皿や中世陶器甕の破片を含むが，遺物の全体量は東半部より少ない。東半部の埋土は東から西に向かって流れ込むように埋積し，遺物の多い層と，少ない層が互層をなして堆積している。

ここから整理箱69箱の遺物が出土した。大半は土師器皿であったが，そのほかに，土師器高杯と蓋が1個体分，土師器鉢が3個体分，瓦器椀が17個体以上，瓦器皿が2個体，灰釉系陶器椀・鉢・壺が1個体以上，大型の陶器甕が1個体分，軒丸瓦1個体，平瓦などが

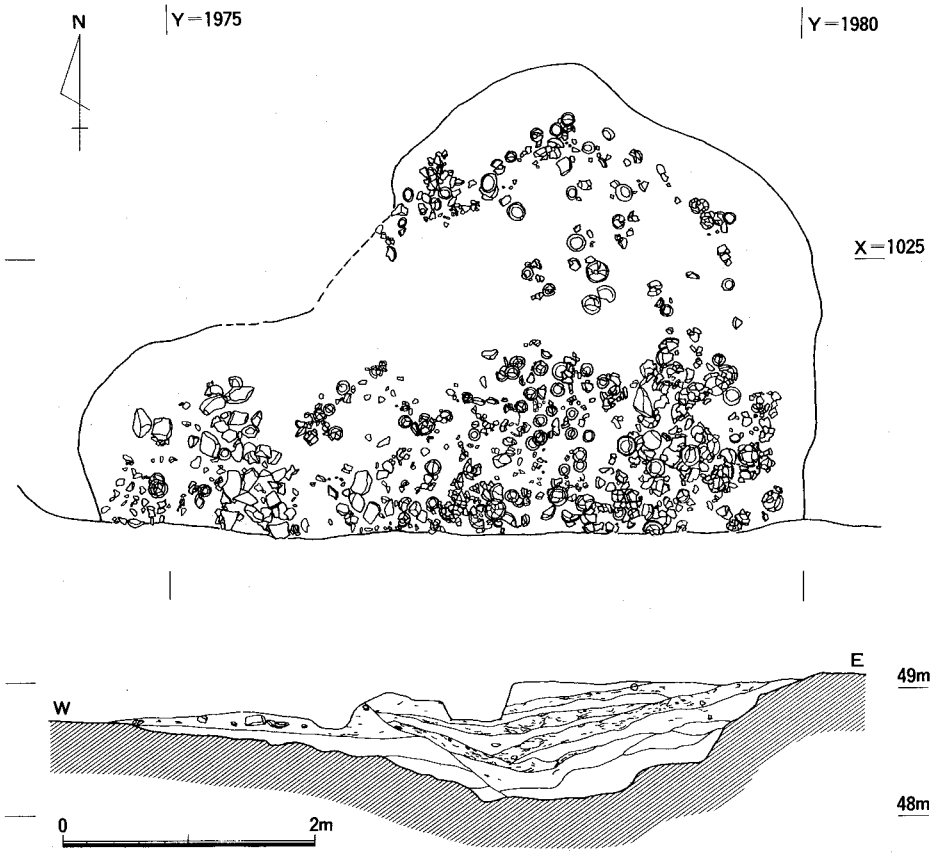


図12　土抗SK6遺物出土状況　縮尺1/60

含まれていた。

土師器皿については，完形品のみを取り上げて法量を計測した。SK3と同様，表1のように，口径15 cmを中心とする大型の皿AⅠ類（Ⅱ24～Ⅱ31）と，口径9 cmを中心とする小型の皿AⅡ類（Ⅱ32～Ⅱ36）とにはっきり二分される。口縁部形態は，皿AⅠ類では2段撫で素縁手法C_3類（Ⅱ24・Ⅱ25），2段撫でつまみ手法C_4類（Ⅱ26・Ⅱ27），1段撫で素縁手法D_3類（Ⅱ30）が多く，2段撫で面取り手法C_5類（Ⅱ28・Ⅱ29），1段撫で面取り手法D_4類などをふくむ。皿AⅡ類でも，C_3類（Ⅱ32・Ⅱ33），C_4類（Ⅱ34）を中心とし，D_4類（Ⅱ36），D_3類（Ⅱ35）などをふくむ。こうした土師器皿の中には墨書をもつもの，底部に穿孔をもつもの，口縁部付近に煤が付着したものがある。また赤と青の顔料が付着したものなどがあり，分析の結果，赤から鉄分と水銀が，青からは亜鉛が検出されている。[2]

Ⅱ37は土師器の蓋である。まったく同様の形態のものが，本部構内AW27区〔五十川ほか92〕，鳥羽離宮跡〔京都市埋文研86 p. 84〕から出土しており，「度嶂散」，「白散」といった薬の名称が墨書されていた。薬壺の蓋とみてよいだろう。Ⅱ38は平底の底部で口が大きく開く，他にあまり例をみない器形の土師器鉢である。ロクロ成形であり，底部には回転糸切り痕を残す。同様に回転糸切り痕を残す平底の底部破片を2点検出している。これらの資料は12世紀後葉ごろのものと考えられる。

Ⅱ39～Ⅱ48は瓦器。皿2個体，小型の椀2個体のほか，椀が比較的まとまって出土した。皿（Ⅱ39）は口縁部外面を強く撫でて外反させた形態で，見込みとともに口縁部内面にも粗い暗文を施すようである。小型の椀にはやや器高が低いもの（Ⅱ40）と深手のもの（Ⅱ41）がある。前者は内面に比較的密に螺旋状の暗文を施し，後者も，観察しにくいが内面に暗文を施すものと思われる。椀の高台はいずれも断面三角形状の小さなもので，内面には密に，外面には粗く螺旋状の暗文を施す。口縁部内側に小さな段をもつもの（Ⅱ42～Ⅱ44・Ⅱ46・Ⅱ47）と，もたないもの（Ⅱ45・Ⅱ48）がある。見込みの暗文にも渦巻を連ねるもの（Ⅱ42～Ⅱ45），格子状のもの（Ⅱ46），蛇行するもの（Ⅱ47・Ⅱ48）の区別がある。

Ⅱ49は青白磁の合子蓋。天井部に花文を施す。Ⅱ50・Ⅱ51は白磁の皿。内面に一条の圏線を施す。外面下半は露胎である。Ⅱ52・Ⅱ53は灰釉系陶器。Ⅱ52は椀。Ⅱ53は壺の底部であろう。Ⅱ54はSK6の最底部から出土した軒丸瓦である。本例は比較的残りがよく，他に瓦類がほとんど出土していない。あるいは，井戸の廃絶などにあたって意図的に軒丸

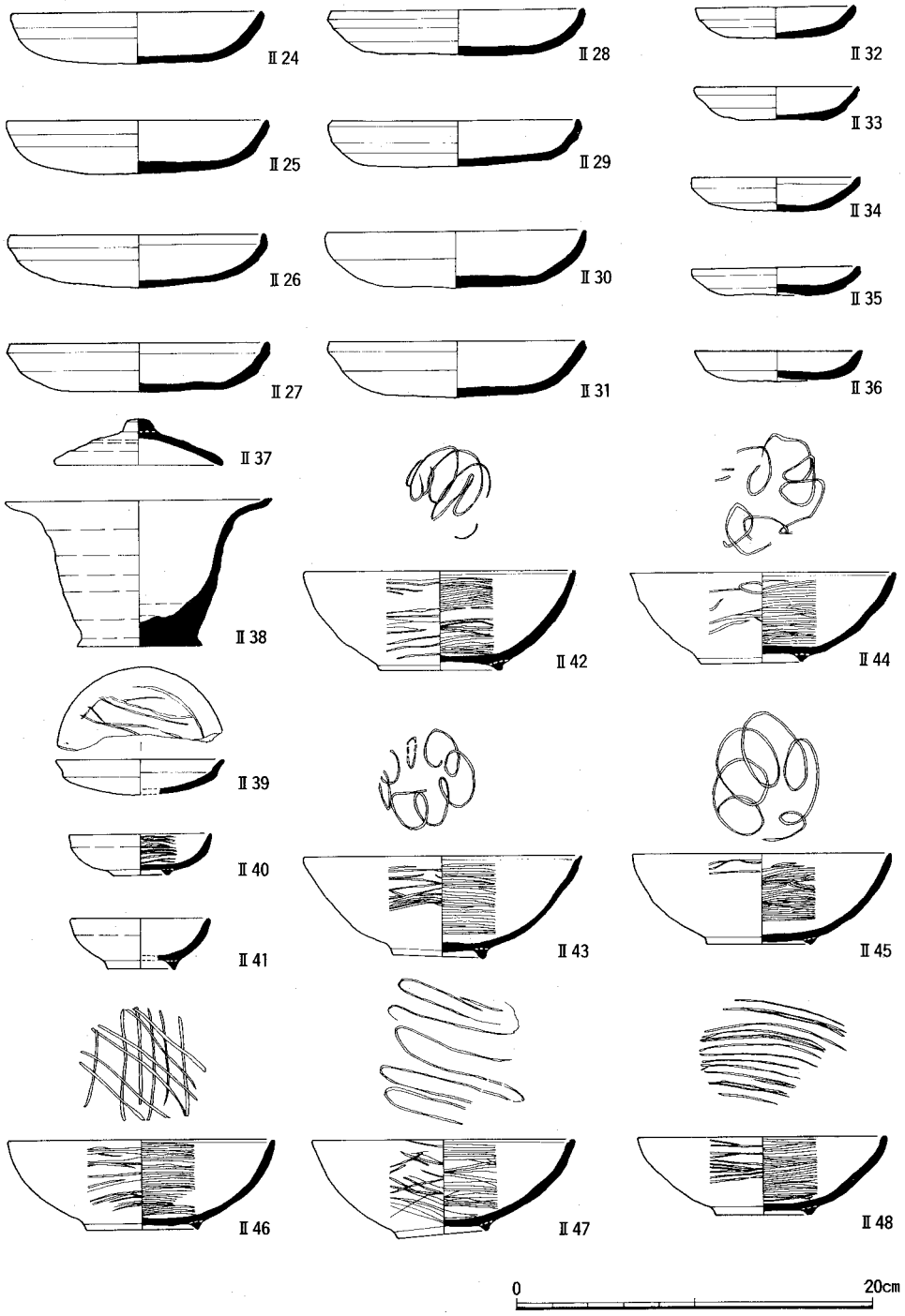


図13　SK6出土遺物(1)（Ⅱ24～Ⅱ38土師器，Ⅱ39～Ⅱ48瓦器）

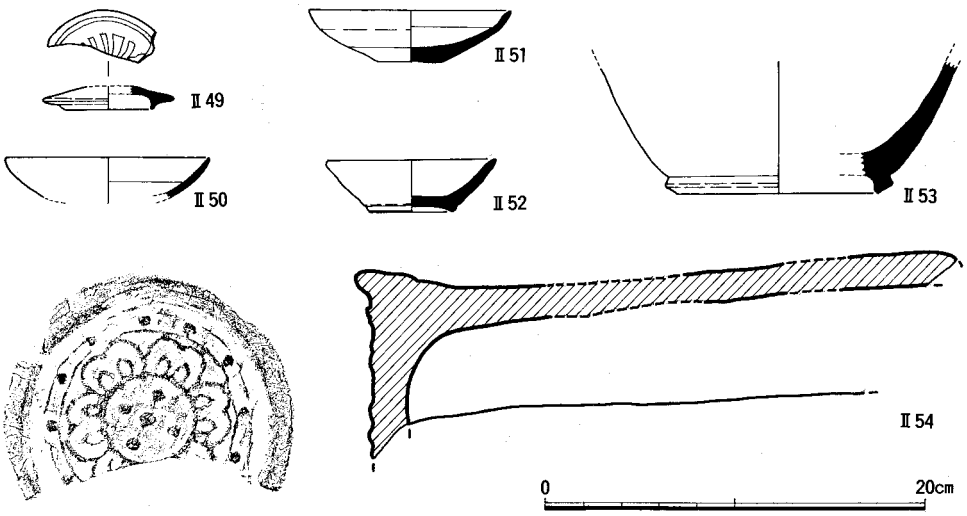


図14　SK6出土遺物(2)（Ⅱ49青白磁，Ⅱ50・Ⅱ51白磁，Ⅱ52・Ⅱ53灰釉系陶器，Ⅱ54軒丸瓦）

瓦を埋めた可能性もある。

SK3・SK6出土の墨書土器（図15）　SK3とSK6出土の土師器皿には墨書の施されたものや，使用の痕をとどめるものなどいくつかの興味深い資料が含まれていた。ここで両遺構出土の墨書土器について，まとめて報告する。

Ⅱ55はSK3から出土した人面墨書土器である。大型の皿AⅠの底部に，墨が薄れてやや判別しにくい部分もあるが，眉，目，団子状にふくらんだ鼻，口髭，歯をむきだしにした口などが表現されている。顔の左側にも何か墨書されているが判別できない。

Ⅱ56～Ⅱ58はSK6出土の墨書土器である。いずれも小型の皿AⅡ類に施されている。Ⅱ56は内外面に蓮華文を描く。外面の蓮華文では交互に表された花弁の間を櫛歯文で埋めている。内面の中央には蓮子がみられ，中房のまわりには蕊（しべ）の表現もある。花弁の大きさ，位置は不均等で，内面と外面の花弁の位置も対応しない。Ⅱ57は底部外面に人面を描く。髪と太い眉，目を描き，女性を表現したものと思われる。Ⅱ58は皿。3～5回ほど筆の方向を変え，5本の線を描く。SK6からはこのほかに墨書の認められる小さな破片が2点出土している。

土坑SK23（図16）　調査区北部で検出した土坑。四方を管路によって削られており，正確な輪郭は不明である。Ⅱ59・Ⅱ60は2段撫でつまみ上げ手法 C_4 類の土師器皿。Ⅱ61は2段撫で素縁手法 C_3 類の土師器小皿。Ⅱ62は土師器受け皿である。Ⅱ63は土師器鍋。口縁が水平に近く外方へ屈曲し端部に面をもつ。外面には指おさえの痕跡が残り，内面は刷毛

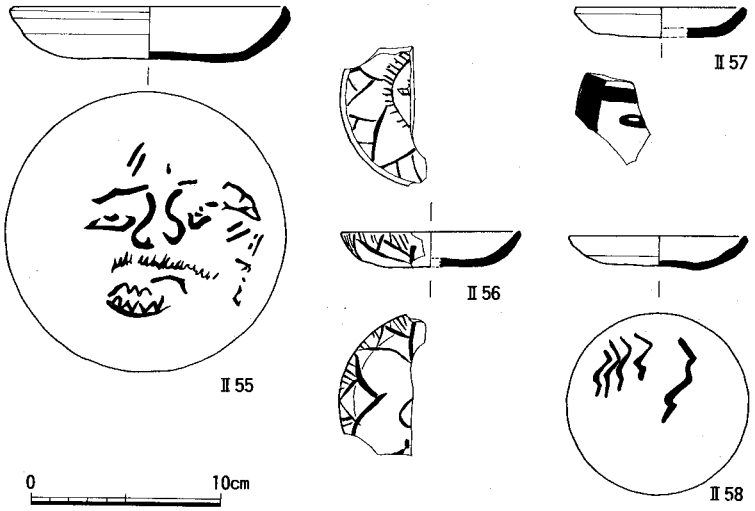


図15　墨書土器（Ⅱ55 SK3，Ⅱ56～Ⅱ58 SK6）

目調整である。胴部外面に屈曲部近くまで煤が付着する。12世紀末ごろに位置づけられる。

土坑SK43（図16）　調査区南部で検出した方形の土坑である。木炭などともに土師器，灰釉系陶器，青磁などが出土した。Ⅱ64・Ⅱ65はともに1段撫で面取り手法 D_5 類の土師器皿。Ⅱ66は灰釉系陶器のすり鉢。内面は使用によって激しくすり減っている。Ⅱ67は青磁皿。底部に花文状の墨書がある。一部に煤が付着している。Ⅱ68・Ⅱ69は瓦器鍋。口縁部の屈曲が明瞭でほぼまっすぐ立ち上がる。内面はきわめて細かい刷毛目調整で，Ⅱ69では板状工具の静止痕を観察できる。13世紀の前半ごろに位置づけられるだろう。

土坑SK20（図16）　調査区北東部で検出した土坑。上層には炭化物の層があり，その下から人頭大の石がまとまって出土した。Ⅱ70・Ⅱ71は1段撫で素縁手法 E_1 類の皿。Ⅱ72は1段撫で素縁手法の小型の皿。Ⅱ73は1段撫で素縁手法 E_1 類の椀。Ⅱ74は瓦器鍋。Ⅱ68・Ⅱ69と同様の形態であるが，口縁部の屈曲があまくなっている。

土坑SK11（図16）　井戸SE1とほぼ重なって位置し，SE1によって切られていた浅い土坑。Ⅱ75は1段撫で素縁手法 E_1 類の土師器皿。Ⅱ76は1段撫で素縁手法 E_1 類の土師器椀。Ⅱ77は瓦器羽釜。内面に刷毛目痕を残す。Ⅱ78は瓦器鍋。端部の屈曲が矮小化している。以上に挙げた土坑は鍋，羽釜，すり鉢など調理具を出土し，また炭や石などをともなうものもある。いずれも日常生活に強く関連した遺構と考えられよう。

調査区東部の北半では，SD5をはじめとして，東西方向に延びる中世，近世の溝が集中する（図8）。

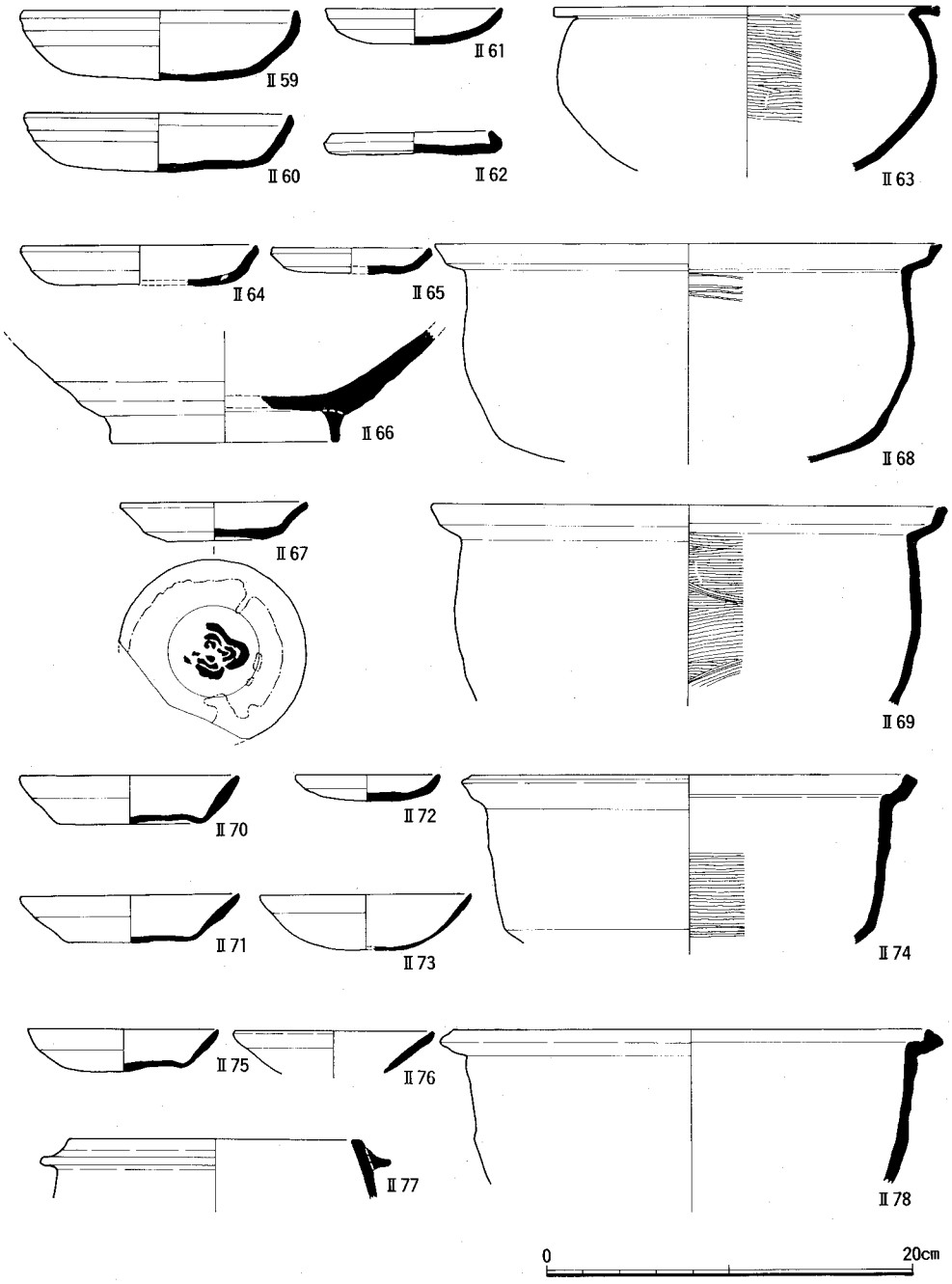


図16 SK23 出土遺物（Ⅱ59～Ⅱ63土師器），SK43 出土遺物（Ⅱ64・Ⅱ65土師器，Ⅱ66灰釉系陶器，Ⅱ67青磁，Ⅱ68・Ⅱ69瓦器），SK20 出土遺物（Ⅱ70～Ⅱ73土師器，Ⅱ74瓦器），SK11 出土遺物（Ⅱ75・Ⅱ76土師器，Ⅱ77・Ⅱ78瓦器）

溝SD3（図17）　調査区の北部東端で，南北方向の溝SD3を検出した。溝SD3は幅0.7 m，検出面からの深さ0.3 m，検出長約10.0 mを測る溝で，12～14世紀の遺物を含む。Ⅱ79・Ⅱ80は1段撫で手法D_5類の土師器皿で，Ⅱ79は口径9.6 cm，Ⅱ80は9.2 cmを測る。Ⅱ81は青白磁合子の身で，外面下半部は釉を施さず，外底部は釉を掻き取る。Ⅱ82は龍泉窯系青磁椀で，青緑色の釉調を示し，外面体部には鎬蓮弁文を施す。

溝SD7（図17）　幅約1.1 m，検出面からの深さ0.8 mのV字型の溝で，近世の溝SD1に切られる。Ⅱ83は灰釉系陶器の鉢で，口縁部が外反する。

溝SD9（図17）　検出幅2.3 m，深さ1.6 mの溝で，ほぼ同規模の溝SD8，SD7に切られる。Ⅱ84は白磁の椀で，Ⅱ84は口縁部を外反させ，Ⅱ86は見込みに櫛目文を施す青磁椀。Ⅱ85は瓦器のミニチュアの羽釜。

溝SD5（図17）　幅2.7 m，検出面からの深さ1.6 m，断面が逆台形を呈する溝である。Ⅱ87は体部が直線的に外へ開く陶器のすり鉢で，やや深めである。口縁端部は丸く，内面の口縁部直下にはかすかな稜をなす段がある。内面には5条1単位の櫛状工具を用いて，おろし目を放射状に施す。よく使い込まれており，下半部のおろし目は摩耗し，器壁もやや薄くなっている。底部は平底であるが，調整は粗雑である。

これらの溝は近世の遺物を含むSD1まで，ほぼ同じ位置に重なるうえ，旧吉田村と旧聖護院村との字境界がこの辺りを通ることから，中世から続く土地境界あるいは道路の側溝に関連する遺構と考えられる。

この境界に沿うような位置で，SE1とSE2の2基の井戸を検出した。

井戸SE1（図17・18）　一辺が約2.6 mの隅丸方形の掘形の中に板で井戸枠を作るもので，検出面からの深さ2.6 m，井筒の一辺は0.7 mであった。Ⅱ88は2段撫で手法C_4類の土師器皿で，口径は11.7 cmを測る。12世紀の遺物である。

井戸SE2（図17・18）　一辺約3.1 mの隅丸方形の掘形の中に人頭大の石を積む。石組みの井筒の内径は1.4 mを測る。石組みの井筒の下部に方形の木枠を組み，さらにその下に曲物と思われる水溜めをもつ井戸で，検出面からの深さは4.0 mを測る。Ⅱ89・Ⅱ90は1段撫で素縁手法E_1類の土師器皿。Ⅱ91・Ⅱ92は灰白色を呈する土師器の椀で，口縁部の形態はⅡ91は1段撫で素縁手法E_1類，Ⅱ92は1段撫で素縁手法E_2類の凹底小椀。Ⅱ93は常滑産の甕の口縁部。Ⅱ94は鋳鉄製の犁先[3]。中央部に目釘穴を開けている。Ⅱ95は白磁の四耳壺。高台部は露胎であり，高台上部をしぼり込むように削る。14世紀の資料と考えている。

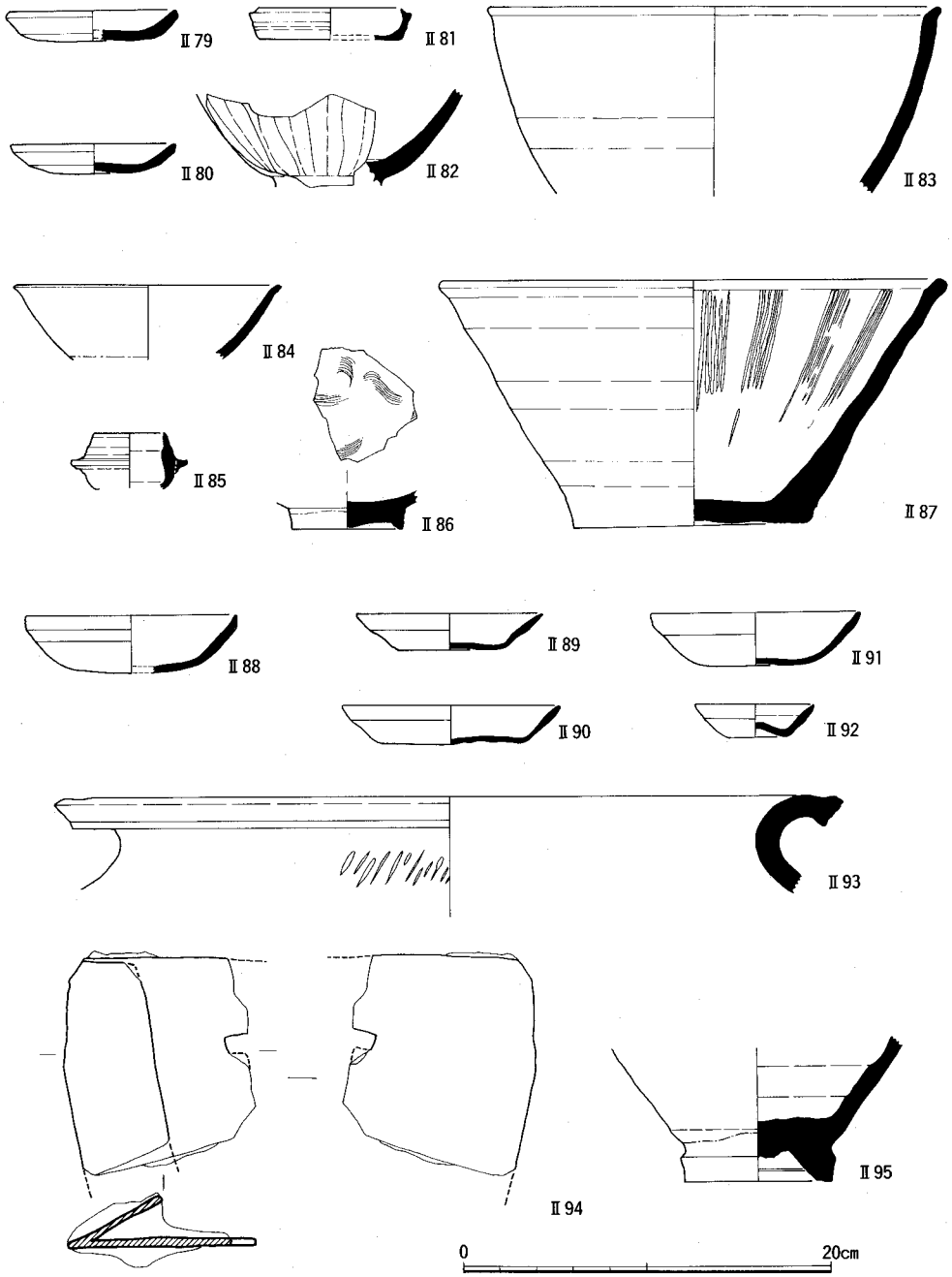


図17 SD3出土遺物（Ⅱ79・Ⅱ80土師器，Ⅱ81青白磁，Ⅱ82青磁），SD7出土遺物（Ⅱ83灰釉系陶器），SD9出土遺物（Ⅱ84白磁，Ⅱ85瓦器，Ⅱ86青磁），SD5出土遺物（Ⅱ87陶器），SE1出土遺物（Ⅱ88土師器），SE2出土遺物（Ⅱ89～Ⅱ92土師器，Ⅱ93陶器，Ⅱ94鉄製犁先，Ⅱ95白磁）

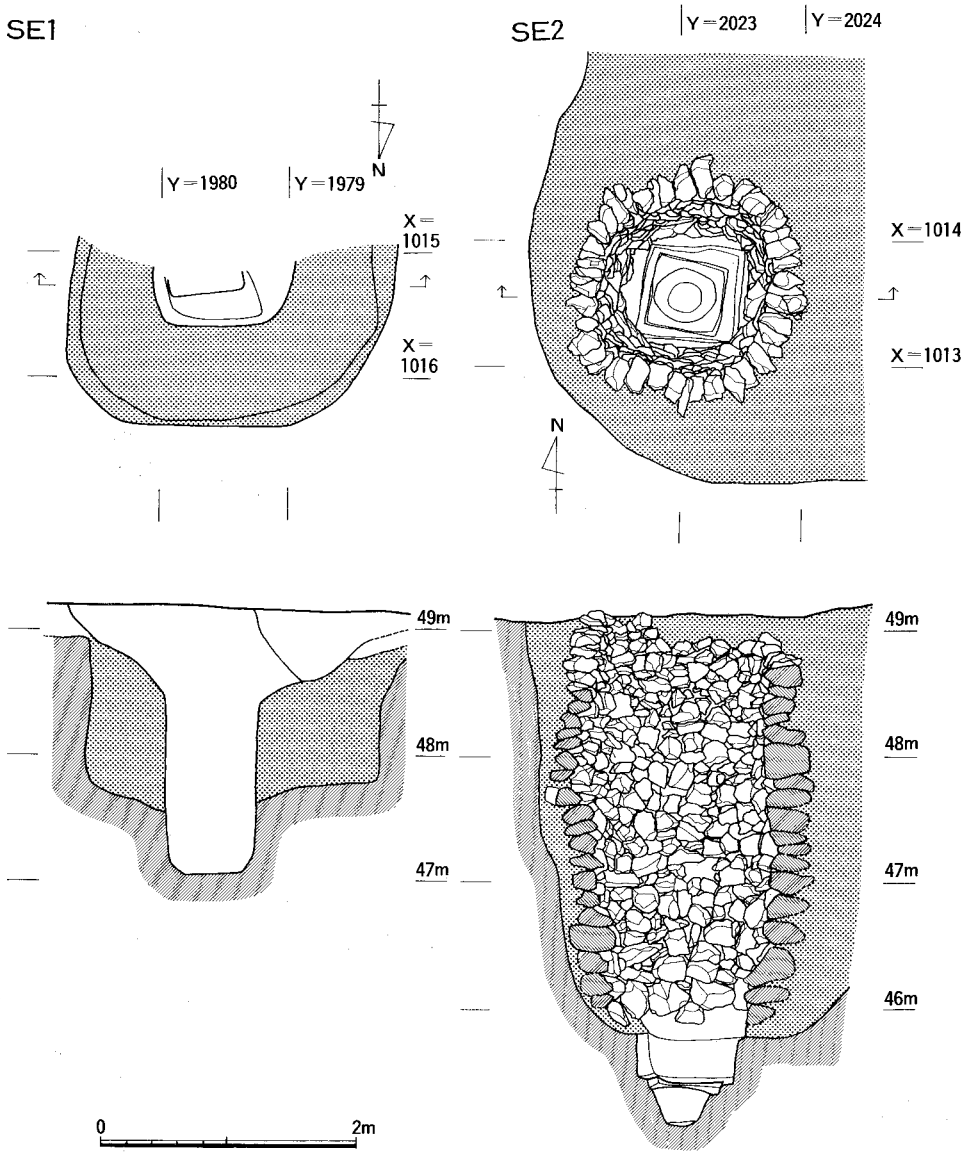


図18　井戸SE1・SE2　縮尺 1/60

調査区の東部南半から南部において検出した柱穴群は，直径 20～30 cm のもので，根石を据えているものが目立つ。建物跡を復原できるような並びを見いだすことはできなかったが，この南において多数検出された土坑群とあわせて，中世の，中規模程度の建造物の存在を考えることができるだろう。

5　近世の遺跡

幅の広い溝SD20～SD24と幅の狭い溝のSD1以外，近世の遺構に目立ったものはない。SD20は検出幅2m，深さ0.8m，断面逆台形を呈するもので，東西軸に対してやや斜めに25m以上はしり，東端のY＝2000付近で南に曲がる。SD21は溝の南半分しか検出していないが，検出長19m，幅1.8m以上，深さ0.3mを測る。SD22，SD23は相接し，ほぼ南北方向に走る溝で，SD22は検出長14.5m，幅1.3m，深さ1.3mで断面逆台形。SD23は検出長14.5m，幅2.8m，深さ0.4mで底は不定形。SD24はほぼ東西方向に走り，検出長3m，幅2m，深さ1.0mを測る。

SD20，SD21は，近世の出土遺物が少なく，埋積の際に混入した中世の遺物が多く含まれる。これに対し，両者を切って掘られたSD22，SD23は，瓦や近世の陶磁器を大量に含む。これらは江戸時代後期のものと考えられるが，当時のこの地には，現在東大路通りの東側に移転している，照臨院なる寺院のあったことがわかっており，この溝や瓦もそれに関連するものの可能性がある。

溝SD22出土遺物（図19・20）　Ⅱ96～Ⅱ117は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅱ96は大型の皿で口径16.2cm，Ⅱ97～Ⅱ103は中型の皿で口径11.5～12.0cm，Ⅱ104～Ⅱ117は小型の皿で口径9.5～10.5cmを測る。大型，中型の皿は器壁が厚く，直線的に立ち上がるものが多く，橙褐色の色調を呈するのに対して，小型の皿は器壁が薄く，外反気味に立ち上げ，端部を内側へつまむものが多く，にぶい黄褐色の色調を呈する。Ⅱ103・Ⅱ108・Ⅱ110・Ⅱ112・Ⅱ117の口縁部には煤の跡がつく。Ⅱ118～Ⅱ127は見込みに圏線を有しない土師器の小皿。法量の上で，口径8.0～9.2cmを測る大型の皿（Ⅱ118・Ⅱ119）と，口径5.0～7.0cmを測る小型の皿（Ⅱ120～Ⅱ127）の2種類に細分できる。大型の皿は量的に少ない。Ⅱ119・Ⅱ125の口縁部に，煤の跡が認められる。Ⅱ128は土師器壺。ロクロ成形を施した扁平な壺である。Ⅱ129・Ⅱ130は焼塩壺の蓋。上面は平坦であり，内面には型作りであることを示す布目痕が残る。Ⅱ131～Ⅱ133は焼塩壺の身。Ⅱ131は，外面に刻印をもつが器面の剝離がひどく判読できない。Ⅱ129・Ⅱ130は渡辺誠のいう蓋B類に，Ⅱ131は身のA類，Ⅱ132はF類，Ⅱ133はG類にあたる。Ⅱ128もL類のミニチュアの可能性がある〔渡辺誠85〕。Ⅱ134は，土師器鉢。口縁部に紐掛け孔をもつ把手がつく。Ⅱ135，Ⅱ136は土師器炮烙。Ⅱ136は外型を用いて底部を作り，回転撫でで仕上げる。鍔はなく口縁部は内傾する。難波洋三のいうF類にあたる〔難波89〕。Ⅱ137は陶器椀。見込み

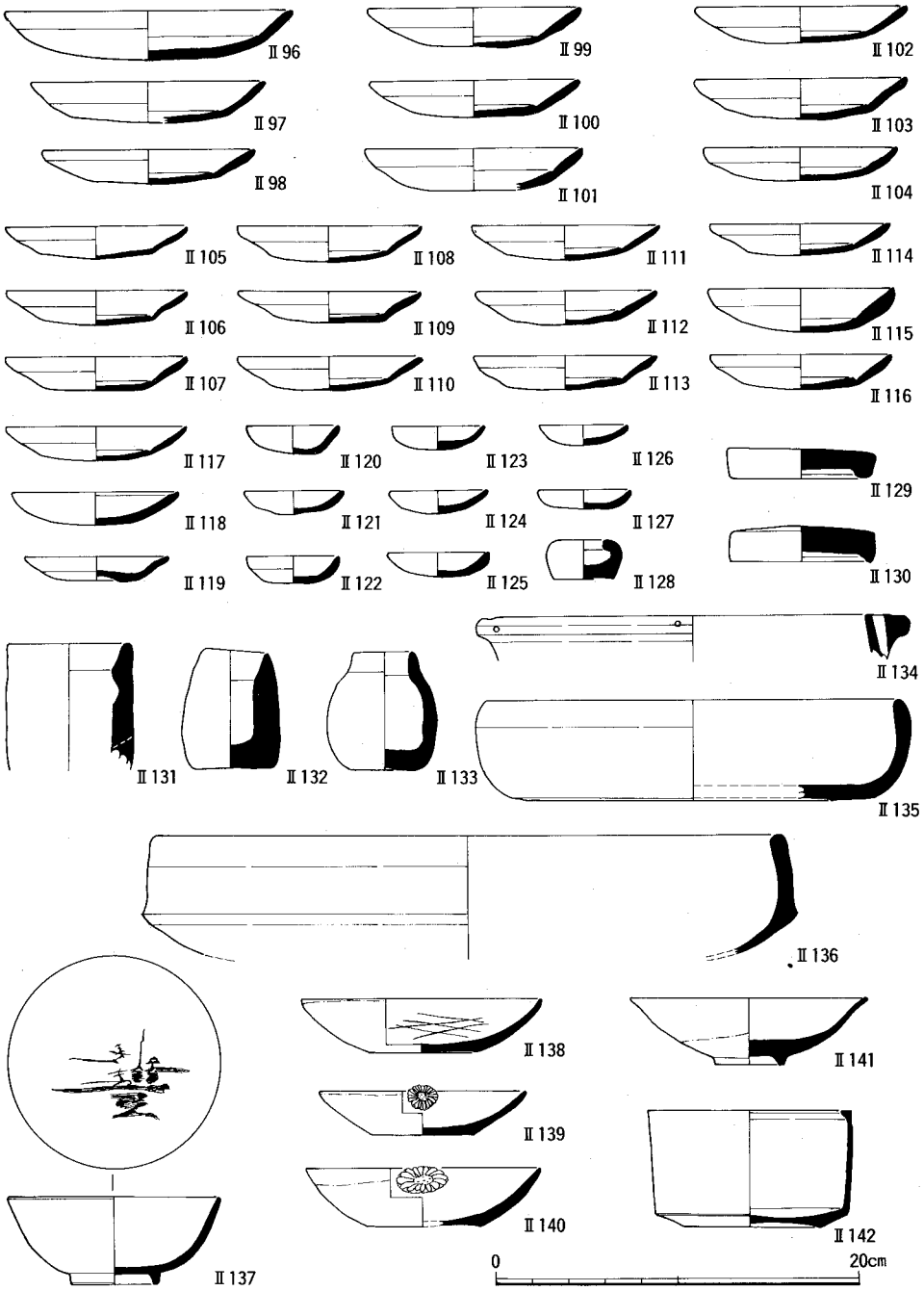


図19　SD22出土遺物（Ⅱ96～Ⅱ136土師器，Ⅱ137～Ⅱ142陶器）

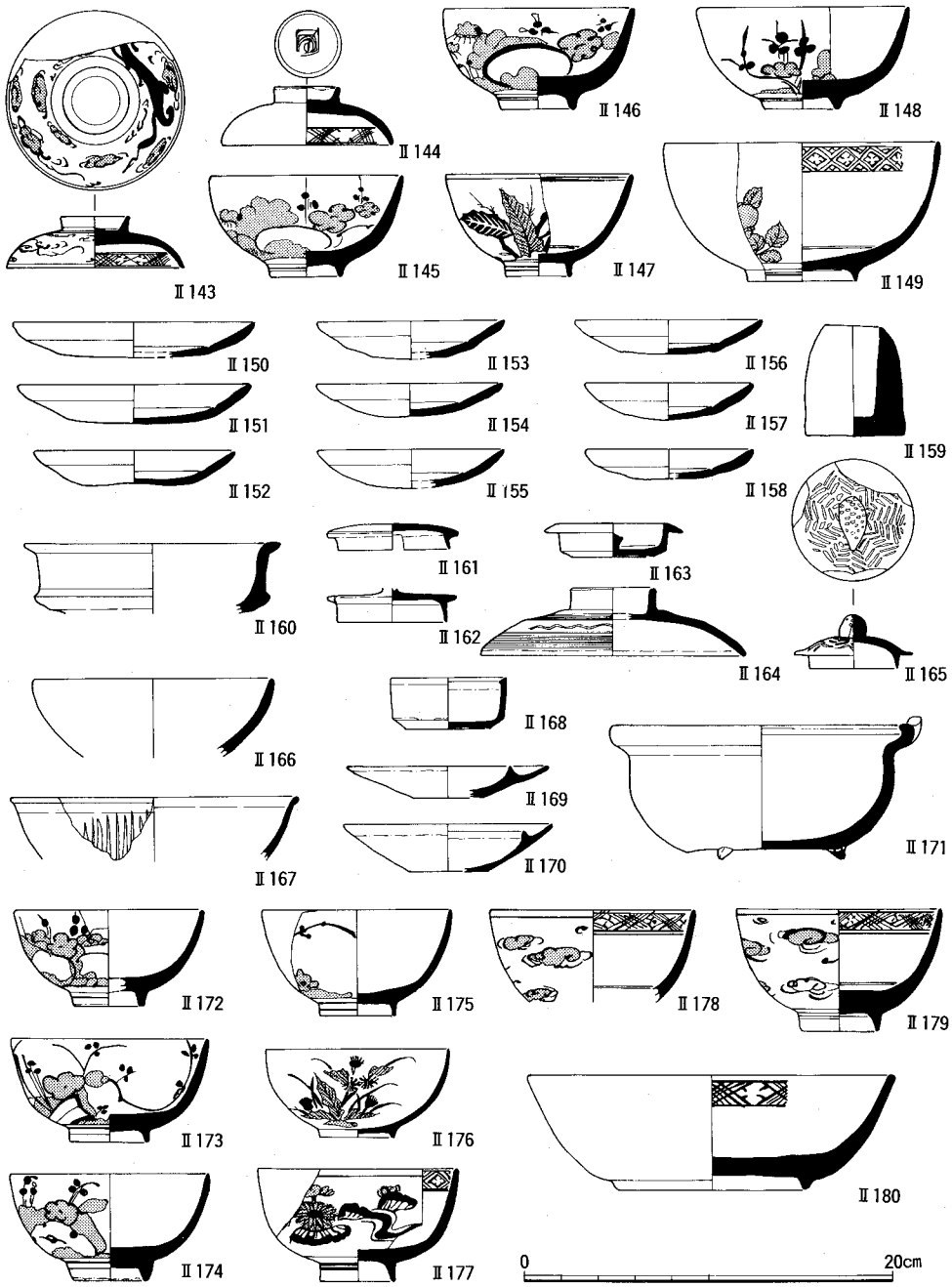


図20 SD22 出土遺物（Ⅱ143～Ⅱ149染付），SD23出土遺物（Ⅱ150～Ⅱ160土師器，Ⅱ161～Ⅱ171陶器，Ⅱ172～Ⅱ180染付）

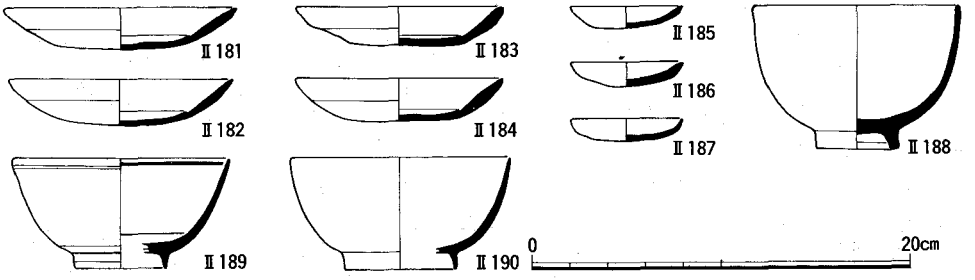


図21　SD24出土遺物（Ⅱ181～Ⅱ187土師器，Ⅱ188陶器，Ⅱ189染付，Ⅱ190磁器）

に山水楼閣文を鉄絵で描く。Ⅱ138～Ⅱ140は陶器燈明皿。Ⅱ139・Ⅱ140は口縁内面に型抜きによる菊花をはりつける。Ⅱ141は陶器皿。Ⅱ142は陶器向付。Ⅱ143・Ⅱ144は染付椀の蓋。Ⅱ144は外面に青磁釉を施し，高台内部に「渦福」銘をもつ。Ⅱ145～Ⅱ149は染付椀。Ⅱ145～Ⅱ147は，くらわんか椀で樹花文を描く。

溝SD23出土遺物（図20）　Ⅱ150～Ⅱ158は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅱ150・Ⅱ151は口径13.0 cm，12.7 cmを測る中型の土師器皿。Ⅱ152～Ⅱ158は9.5～11.0 cmを測る小型の土師器皿。Ⅱ159は焼塩壺の身。Ⅱ160は土師器炮烙。Ⅱ161～Ⅱ165は陶器蓋。Ⅱ161は黄緑色の釉を施す蓋。つまみは無く，「合口」に切り込みがあることから，油差しのような液体容器の蓋であったと考えられる。Ⅱ162・Ⅱ163・Ⅱ165は土瓶の蓋で，Ⅱ162・Ⅱ165は山蓋，Ⅱ163は平蓋である。Ⅱ163は花を，Ⅱ165は松笠を模したものをつまみとする。Ⅱ164は土鍋の蓋で，口縁部を除く内外面に灰緑色の釉を施す。Ⅱ166は陶器椀。黄色釉で内外面に文様を描く。Ⅱ167は陶器鉢。口縁部は外反し，外面には縦位の沈線を施す。Ⅱ168は陶器向付。Ⅱ169・Ⅱ170は陶器燈明受皿。Ⅱ171は陶器鍋。外底部を除く内外面に鉄釉を施す。Ⅱ172～Ⅱ179は染付椀。Ⅱ172～Ⅱ175は，くらわんか椀で，樹花文を描く。Ⅱ176・Ⅱ177は草花文，Ⅱ178・Ⅱ179は雲形文を描いている。Ⅱ180は染付皿。

溝SD24出土遺物（図21）　Ⅱ181～Ⅱ184は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅱ181・Ⅱ182は口径12.4 cm，12.0 cmを測る中型の土師器皿。Ⅱ183・Ⅱ184は11.0 cm，10.8 cmを測る小型の土師器皿。Ⅱ185～Ⅱ187は見込みに圏線をもたない土師器小皿。口径はいずれも6.0 cm。Ⅱ188は陶器椀。全体に褐色の釉を施す。Ⅱ189は染付椀。文様は内外の単純な横線のみである。Ⅱ190は磁器椀。まったく絵付けを施していない。

SD22～SD24より出土した土師器皿は共通する特徴やよく似た規格をもっており，また，SD22とSD23では酷似する染付椀が出土していることから，これらの溝はほぼ同じ時期に埋積したと考えてよいであろう。その時期は土師器，染付の年代観より18世紀後半

の年代を与えられよう。

6　小　　結

本調査区一帯は，高野川系と白川系の河川堆積物によって土地形成がおこなわれている。今回の調査では，堆積物の中から縄文中・後期の土器が出土し，奈良時代の遺構がその上に営まれていたことから，その河川による堆積の時期を，その間に限定することができた。また，高野川系，白川系の両河川の岸辺にも縄文人の活動が及んでいたことが判明した。

奈良時代の遺構では，住居跡の可能性をもつ土坑SK22のほかに，調査区の南端でもこの時期の遺物包含層を検出している。北側に隣接する154地点の土坑SK51からは，7世紀後半から8世紀初めにかけての土師器甕，須恵器杯，鉄滓が出土しており，この地一帯で平安京造営以前に生活が営まれていたことをうかがわせる〔五十川ほか89〕。また，本部構内では，8世紀の竪穴住居跡を検出しており，この時期の竪穴住居跡の存在の可能性を裏付ける〔五十川81〕。

多量の土器が出土した12世紀の土坑SK3・SK6に関連すると思われるものに福勝院がある。福勝院は鳥羽法皇の皇后高陽院泰子が仁平元（1151）年に創建した寺で，九躰阿弥陀堂，寝殿，三重塔，護摩堂などのあったことが知られている〔杉山62，川上77〕。その位置は本調査区の北東に位置する京都大学楽友会館から近衛中学校のあたりに比定されているが，正確な位置は不明である。SK3・SK6から出土した土器には，燈明皿として使用された痕跡を残すもの，人面墨書土器（Ⅱ55），密教法具のひとつ六器の台皿を模したと思われる墨書土器（Ⅱ56）がある。本調査区の北約150mの169地点で出土した六器の鋳型とともに，福勝院での祭祀にかかわった遺物の可能性がある〔浜崎90〕。

調査区の東端，X＝1000～1010のあたりに中世から近世にかけて集中していた溝のうち，SD5やSD9を詳細に検討した結果，この2本の溝が白河の条坊地割の小路のひとつである勘解由小路末の側溝である可能性が高くなり，教養部構内111地点で検出した溝SD10〔五十川・飛野84〕や，本部構内75地点で検出した溝SD3〔五十川81〕とともに，白河街区の条坊地割の復原をおこなった〔浜崎91〕。

SD4～SD9などの溝が集中する部分を境にして，本調査区の北部にはSK6を中心とする土坑群が多数掘られ，南部においては掘立柱の建物が作られていた。本調査区一帯では，井戸，祭祀などに用いられた土坑が集中する北部と，井戸をほとんど検出していない

南部とに明確に分けられることは，ここに街区を区画する小路のあった事を裏付ける。

また，近世の溝SD1は，聖護院村と吉田村の字境と一致する。天明6（1786）年に作製された中井家本洛中洛外図（京都大学附属図書館蔵）にはこの位置を通る道が描かれており，SD1はこの道の側溝とも考えられる。154・155地点で検出した大規模な土取り穴も，SD1より南にはなく，調査区南部で検出したSD22・SD23も北に延びていない。近世においてもSD1あたりに境界があったものと考えられる。

近世の溝SD20～SD23に関連するものとして照臨院があげられる。照臨院は享保5（1720）年，霊潭が荒廃していた洛東千日庵に移り住み，聖臨庵（照臨院）と改称し，浄土宗最初の律院として開創したことに始まる。近代初頭の境内は，東西21間5尺，南北18間4尺を測り，本堂，客間，隠寮，物入，鎮守堂などの建物があった[(4)]。この照臨院は，明治30年の京都帝国大学附属病院の開設にともない，本調査区の東，東大路を隔てた地に移転した。その旧地は現在地より半町ばかり西といわれ[(5)]，本調査区一帯に当たる。大量の近世瓦と近世陶磁器が出土したSD20～SD23は，照臨院にかかわるものである可能性がある。なお，前述の中井家本洛中洛外図では，SD22，SD23が聖護院村の西端にあたる可能性もあるが，さらに西へ延びるSD20，SD21については不明である。

〔注〕

(1) こうした様子は，富岡鉄斎が安政～文久年間にかけての聖護院村を晩年に回顧して描いた「聖護院村略図」に詳しい〔浜崎・宮本87 p. 54〕。
(2) 分析にあたっては本学環境保全センターの御協力をいただいた。
(3) 京都芸術短期大学の内田俊秀氏に分析を依頼した。そして，金属顕微鏡を用いてサビ中の金属組織を観察した結果，鋳造組織が確認された。
(4) 『社寺録愛宕郡之部』，『寺院明細帳』京都府立総合資料館蔵
(5) 碓井小三郎「聖護院村」『京都坊目誌』1915年

第3章 京都大学病院構内AE12・AE13区の発掘調査

千葉豊　森下章司

1　調査の経過

本調査区は，京都大学医学部附属病院構内の西南部に位置する（図版1-192・198）。ここに，ウイルス研究所実験研究棟および医学部・遺伝子実験施設分子生物科学実験研究棟の新営が計画されたため，予定地全域の発掘調査をおこなった。なお調査区は，西半のAE12区（192地点）と東半のAE13区（198地点）の2区にわたるが，隣接地点であり，ここにまとめて報告する。調査面積は，総計で1410.5 m^2 である。

調査区のある地は，元永元（1118）年に造営された白河上皇の院の御所「白河北殿」の北辺一帯にあたる。この周辺においては，1976・1977・1982年度に医療技術短期大学部の校舎新営にともなう発掘調査がおこなわれており，古代から近世にいたる遺構・遺物が発見されている〔京大埋文研81a〕。この調査では，古代末に築かれた旧高野川系河川の護岸跡がみつかっており，今回の調査区一帯における遺跡の形成時期とその土地利用の変遷が問題となるところであった。

調査の結果，近世後半の畑作に関係する道，井戸，野壺などを発見したほか，近世の土師器と大量の陶磁器を得ることができた。この地一帯における地形環境の変遷や近世の土地利用のありさまを明らかにするうえで，また，近世後半の土師器，陶磁器の編年や流通を検討するうえで基礎資料とすることができるであろう。

2　層　　位

現地表の標高は46.2 m前後で，ほぼ平坦である。基本的な層位は，上より表土（第1層），黒色土（第2層），茶褐色砂礫（第4層）の順である（図22）。黒色土は耕作土層で，近世後半の遺物を包含する。茶褐色砂礫は旧高野川系流路の堆積物。中世後半の土師器・青磁片を少量含むが，いずれも摩滅している。調査区東半のY＝1667付近から西では茶褐色砂礫の上面が段をなし，黄褐色土（第3層）が20 cmほどの厚さで茶褐色土の上に堆積している。この段差は，調査区東半の北辺では，ほぼ南北方向に続き，面的な広がりがみとめられた。時代を特定できる遺物をほとんど含んでいないが，近世前半の開発などにかかわるものと推定している。

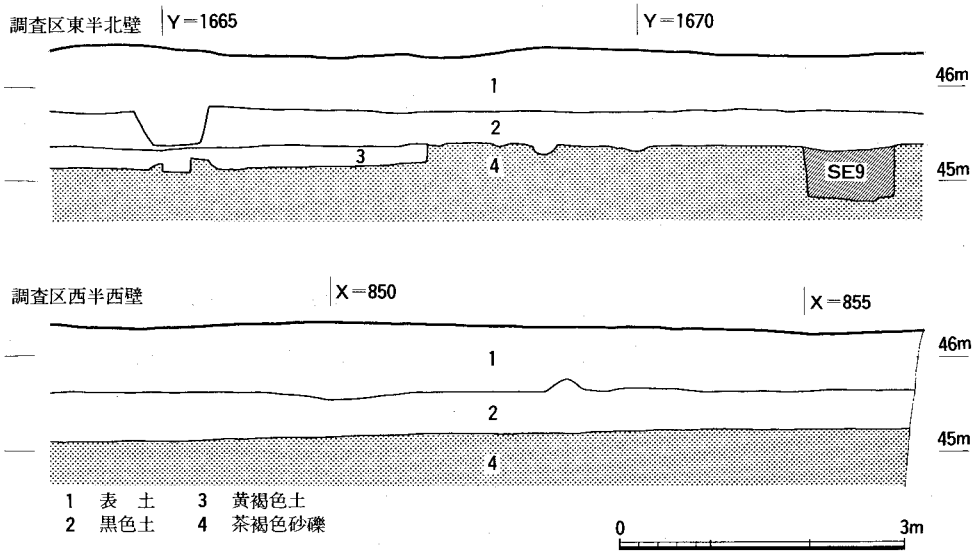


図22 調査区の層位 縮尺 1/80

3 遺　　構

検出した遺構には，道，井戸，野壺，溝，柱穴，集石がある（図版13・14，図23～26）。いずれも近世後半の耕作に関連する遺構と考えられる。

道SF1は，調査区西半で検出した。幅は約1mと狭く，礫混じりの土を固めて作られた簡単な構造である。方位は，真北より東へ約2°度振れており，ほぼ南北方向に伸びる小道である。この道を挟んで井戸と野壺を多数検出した。井戸と野壺は，さらに調査区東半の北辺でも集中して発見された。井戸と野壺の並びからみて，調査区外に東西方向にのびる道の存在が推定できる。

井戸は，井戸側を石組で作ったものと井戸瓦を用いたものに大別できるが，後者はSE8の1基のみである。水溜は，方形の木枠を利用したSE21を除いて，すべて円形の木桶を用いている。井戸底の標高は，43.1mから44.1mの間に分布する。

SE3，SE11，SE22は，石組の最下段にやや細長くて大ぶりの石を縦置きにして用いている。SE22は，ほぼ同じ位置で作り直しがおこなわれており，下部より前の井戸の石組を検出した。SE18は，石組の石が小ぶりで，下部にゆくほど小さくなる。ほかの井戸が円形の掘形をもつのに対して，北側へ幅0.6m，長さ0.8mの張り出しをもつ点でも異質である。

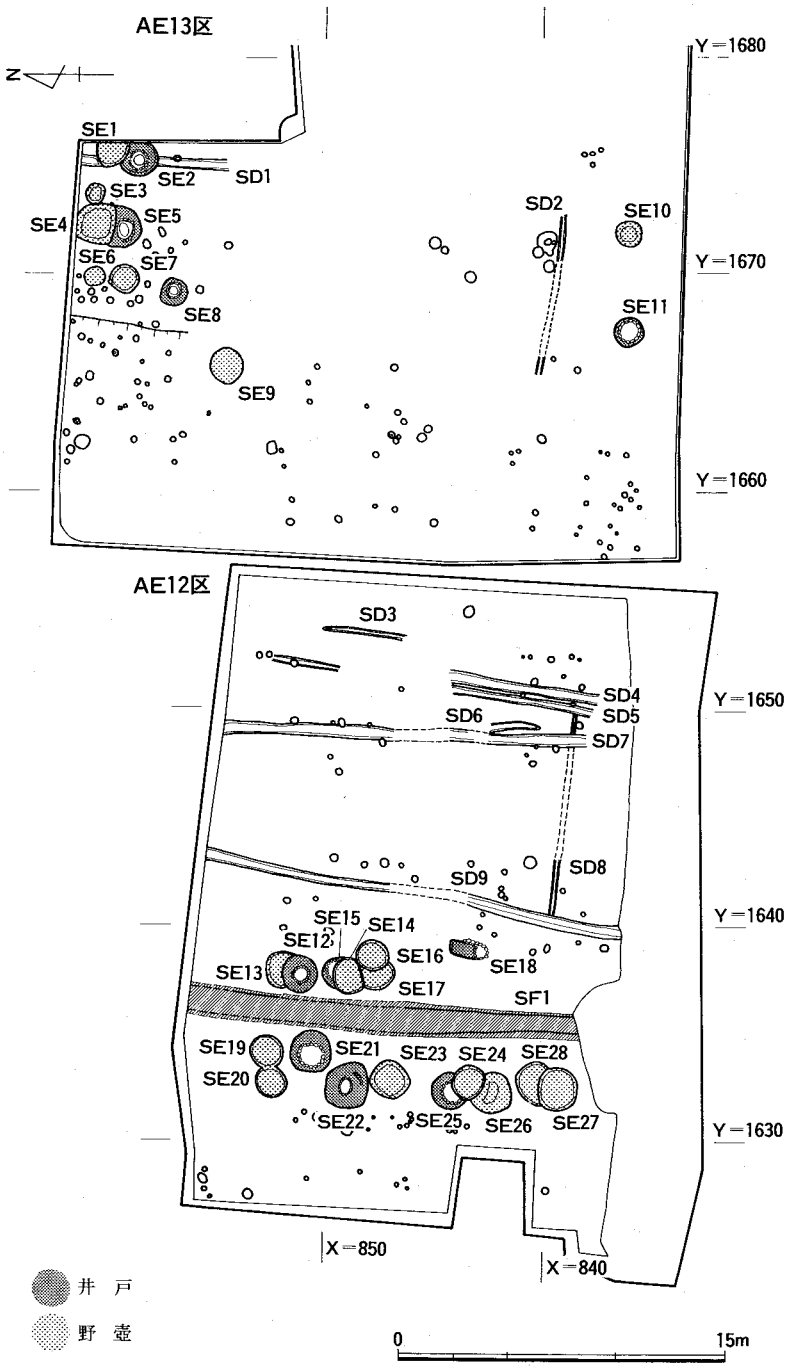


図23　近世の遺構　縮尺 1/350

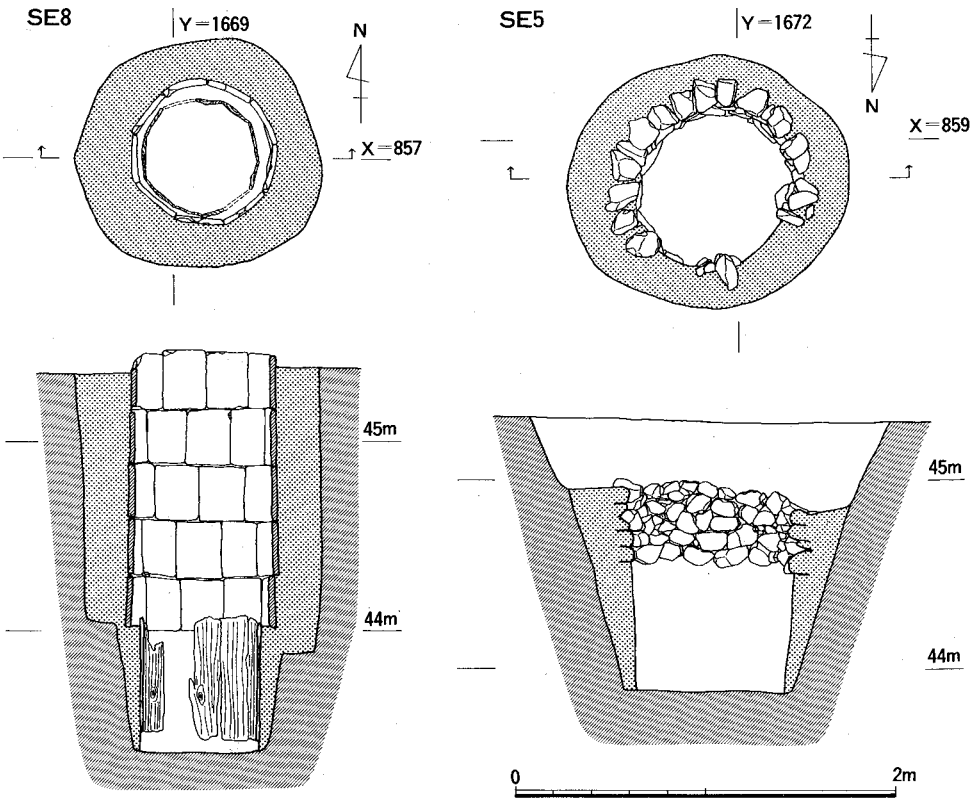


図24　井戸 SE8・SE5　縮尺 1/40

SE8 は，専用の井戸瓦を利用した井戸である。水溜に木桶を用い，その上に積み上げられた井戸瓦を 5 段分確認した。1 段にほぼ 9 枚の井戸瓦を並べている。下 2 段は，目地を揃えて置くのに対し，それより上は目地の位置をずらして置いている。井戸瓦は，縦 30 cm，横 26 cm，厚さ 3 cm。多くは表裏平滑なものであるが，凸面に長さ 5 cm の楔形の刻みを，八字状にいれたものがある。すべりどめの役割を果たしたものと考えられるが 2 点のみである。

井戸の周囲より野壺を多数検出した。SE1・SE9・SE14・SE23 は，漆喰製の野壺。SE9 の埋土は表土と同じもので，ガラス製品などを含んでおり，近代以降まで用いられていたらしい。そのほかの野壺は，木製桶を用いたと想定される野壺である。SE16 は，木桶の底板が残存していた。

井戸と野壺は組み合わせて耕作用に利用されたものと考えられる。SE1 と SE2，SE4 と SE5，SE8 と SE6・SE7，SE12 と SE14，SE15 と SE16・SE17，SE21 と SE19・SE20，

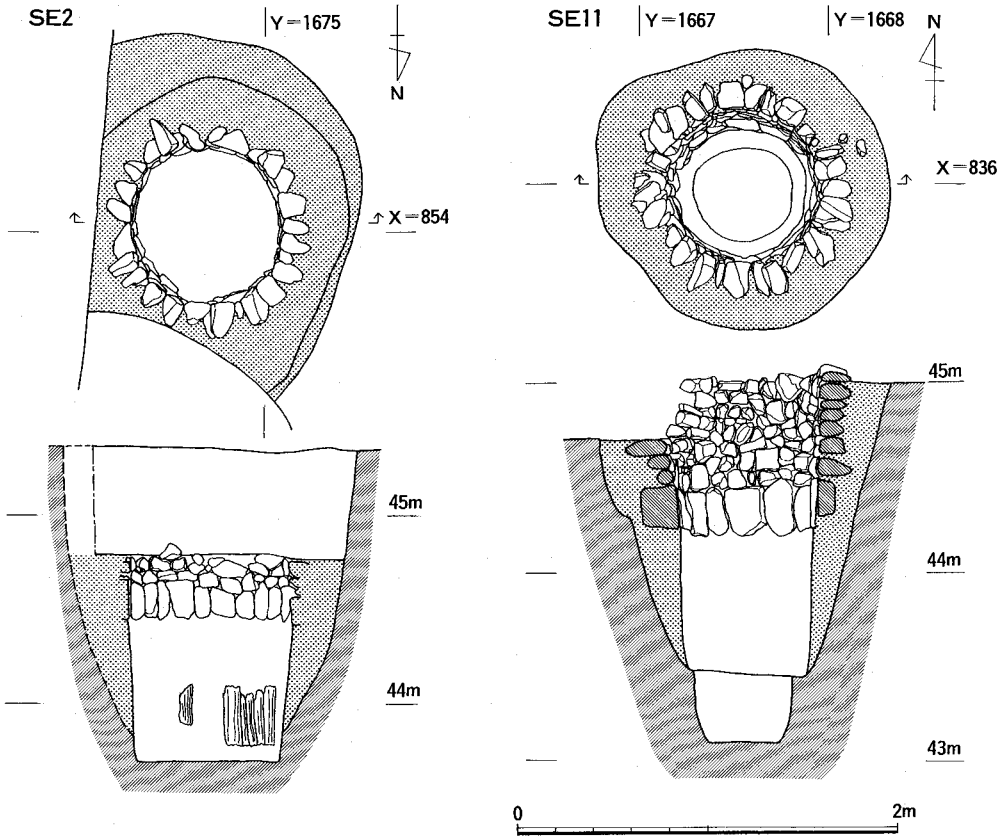


図25　井戸 SE2・SE11　縮尺 1/40

SE22 と SE23，SE25 と SE26～SE28 という組合せが想定できる。切り合い関係にあるものをみると，SE12 と SE14 が新しく，SE15 と SE16・SE17 はそれ以前である。漆喰製の野壺が木桶製のものより新しいことがわかる。肥料は，このような道の傍らの野壺に納められ，井戸の水で希釈して用いられたのであろう。

溝 SD1 と SD7 は，方位を真北から東へ約 2° 振っており，道 SF1 にほぼ平行する。これに対して，SD2・SD8 と SD3～5・SD9 はほぼ直交し，方位を真北から東へ約 7° から 13° 振る。

柱穴は，調査区全域に分布しており，耕作にともなう柵状の施設となろう。東に隣接する19・30地点では東西方向の柵列を多数確認しているが〔京大埋文研81a p. 23〕，本調査区では明確な並びを確認することはできなかった。

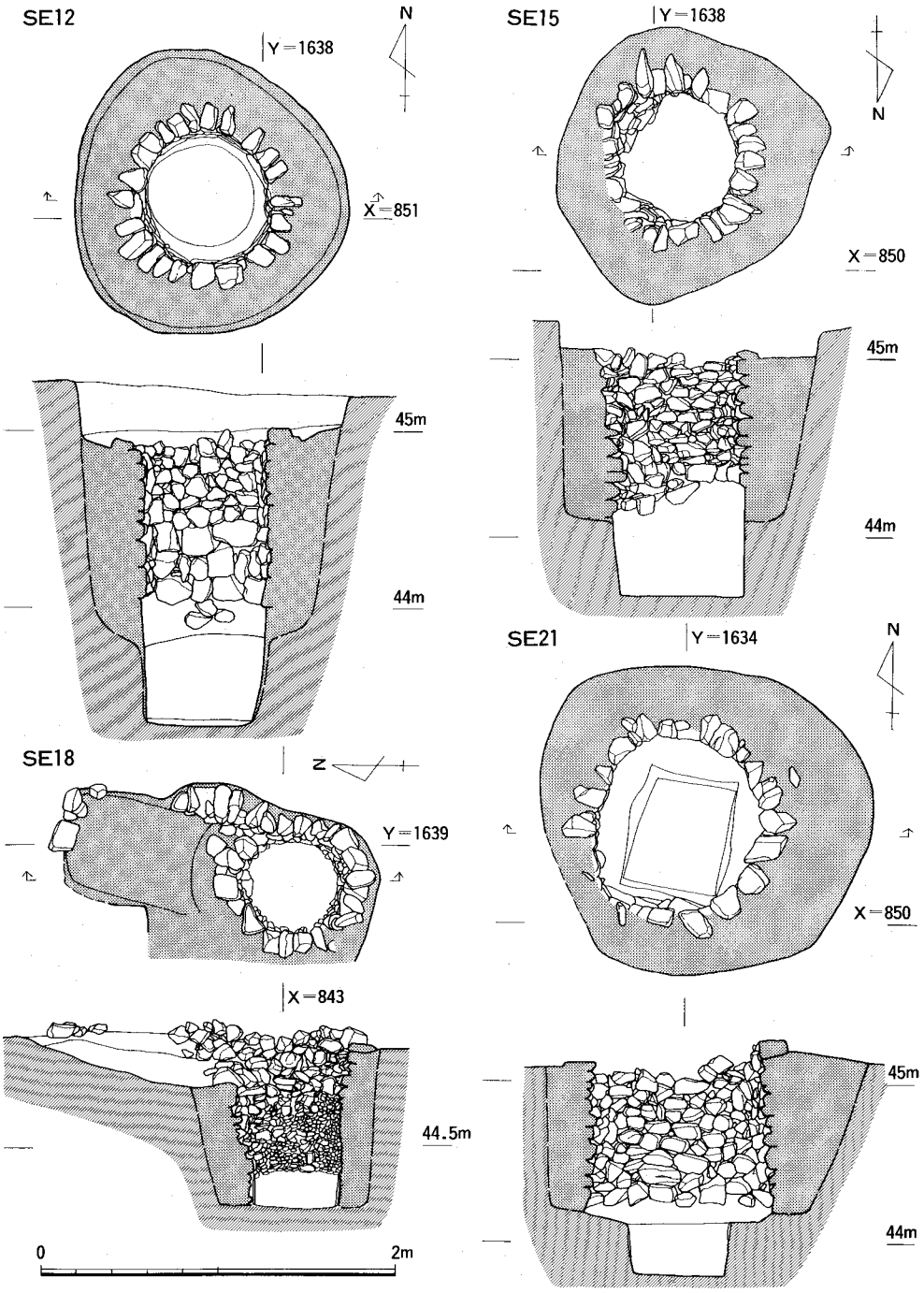


図26　井戸 SE12・SE15・SE18・SE21　縮尺 1/40

4　遺　　物

本調査区からは整理箱35箱の遺物が出土した。遺物の時期は，中世から近世にわたるが，その大半は，近世後半の土器，陶磁器，瓦，泥面子，伏見人形などであった。ここでは，井戸，野壺より出土した遺物について記述する（図版15・16，図27・28）。

Ⅲ1～Ⅲ13はSE2出土遺物。Ⅲ1～Ⅲ3は土師器皿。Ⅲ3は見込みに圏線をもつ。Ⅲ4は陶器蓋。Ⅲ5は陶器燈明皿。口縁部内面に型抜きによる菊花をはりつける。Ⅲ6～Ⅲ8は染付椀。Ⅲ6は焼継による補修がみられる。Ⅲ8は口縁部が外反する小椀。Ⅲ9は赤絵皿。内外に網目文様を施す。Ⅲ10は染付皿。口縁部を玉縁状に肥厚させる。Ⅲ11は染付仏飯。Ⅲ12は染付蓋。外面全面に草花文をあしらう。Ⅲ13は炮烙。体部外面は，型作りのため，離型材として使われた雲母をふくむ細粒が付着し，粗面を呈する。大阪府枚方市周辺で製作された炮烙である〔難波92 pp. 385-6〕。

Ⅲ14～Ⅲ22はSE1出土遺物。Ⅲ14は土師器皿。Ⅲ15・Ⅲ16は「雛」と呼ばれる小型の土師器皿。Ⅲ17は炮烙。Ⅲ18は口縁部が外反する陶器椀。Ⅲ19・Ⅲ20は染付椀。Ⅲ19は外面に草花文を施す。Ⅲ20は半筒型の椀で，外面に青磁釉をかける。Ⅲ21は染付皿。Ⅲ22は染付蓋。

Ⅲ23～Ⅲ30はSE5出土遺物。Ⅲ23～Ⅲ27は土師器皿。Ⅲ23～Ⅲ26は見込みに圏線をもつ。Ⅲ28は小型の土師器皿。Ⅲ29は陶器椀。Ⅲ30は染付椀。くらわんか椀で樹花文を描く。

Ⅲ31～Ⅲ45はSE4出土遺物。Ⅲ31～Ⅲ33は土師器皿。いずれも見込みに圏線をもつ。Ⅲ34～Ⅲ36は土師器雛。Ⅲ37・Ⅲ38は深草周辺で作られた土師器のデンボである〔難波89 p. 40〕。底部に篦切痕が残る。Ⅲ39は陶器燈明皿。Ⅲ40は陶器燈明受皿。Ⅲ41～Ⅲ44は染付椀。Ⅲ41はコンニャク判で桐花を施している。Ⅲ42は外面に青磁釉を施し，底部見込みに「渦福銘」をもつ。Ⅲ43は口径 14.6 cm をはかる大ぶりの椀で，内外面に草花文を描いている。Ⅲ44は半筒型の椀で，外面に牡丹唐草文を施す。Ⅲ45は染付皿。内面には墨弾きの技法により，蛇行沈線文を配している。

Ⅲ46～Ⅲ48はSE15水溜内出土遺物。Ⅲ46・Ⅲ47は土師器皿。Ⅲ47は見込みに圏線をめぐらす。Ⅲ48は，青磁染付椀。見込みにコンニャク判で五弁花を施す。

Ⅲ49～Ⅲ52はSE17出土遺物。Ⅲ49は土師器皿。見込みに圏線をめぐらす。Ⅲ50は土師器火消壺の蓋。Ⅲ51は陶器燈明受皿。全面に鉄釉をかける。Ⅲ52は染付椀。樹花文を描

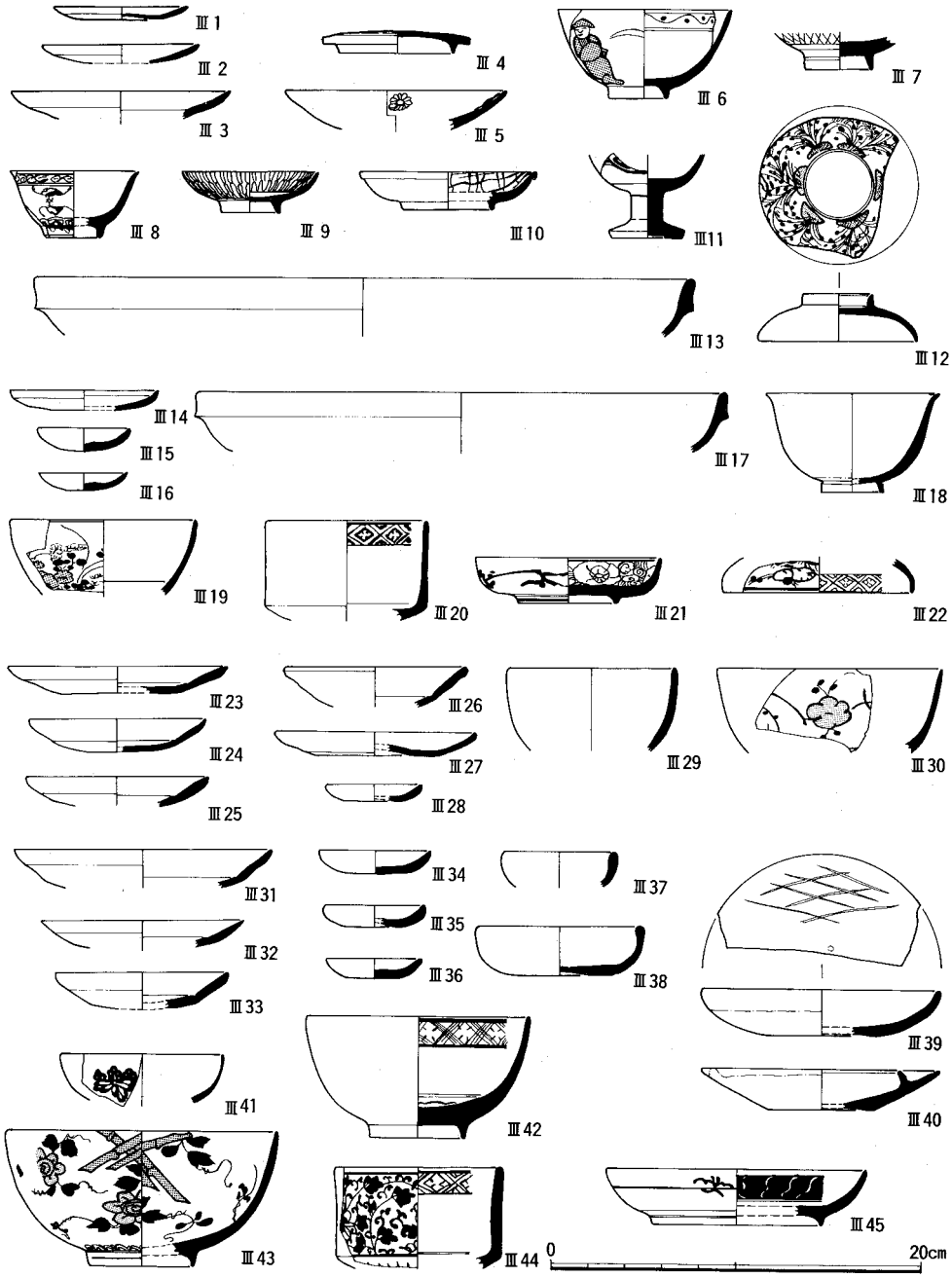


図27 SE2 出土遺物（Ⅲ1～Ⅲ3・Ⅲ13土師器，Ⅲ4・Ⅲ5 陶器，Ⅲ6～Ⅲ12染付），SE1 出土遺物（Ⅲ14～Ⅲ17土師器，Ⅲ18陶器，Ⅲ19～Ⅲ22染付），SE5 出土遺物（Ⅲ23～Ⅲ28土師器，Ⅲ29陶器，Ⅲ30染付），SE4 出土遺物（Ⅲ31～Ⅲ38土師器，Ⅲ39・Ⅲ40陶器，Ⅲ41～Ⅲ45染付）

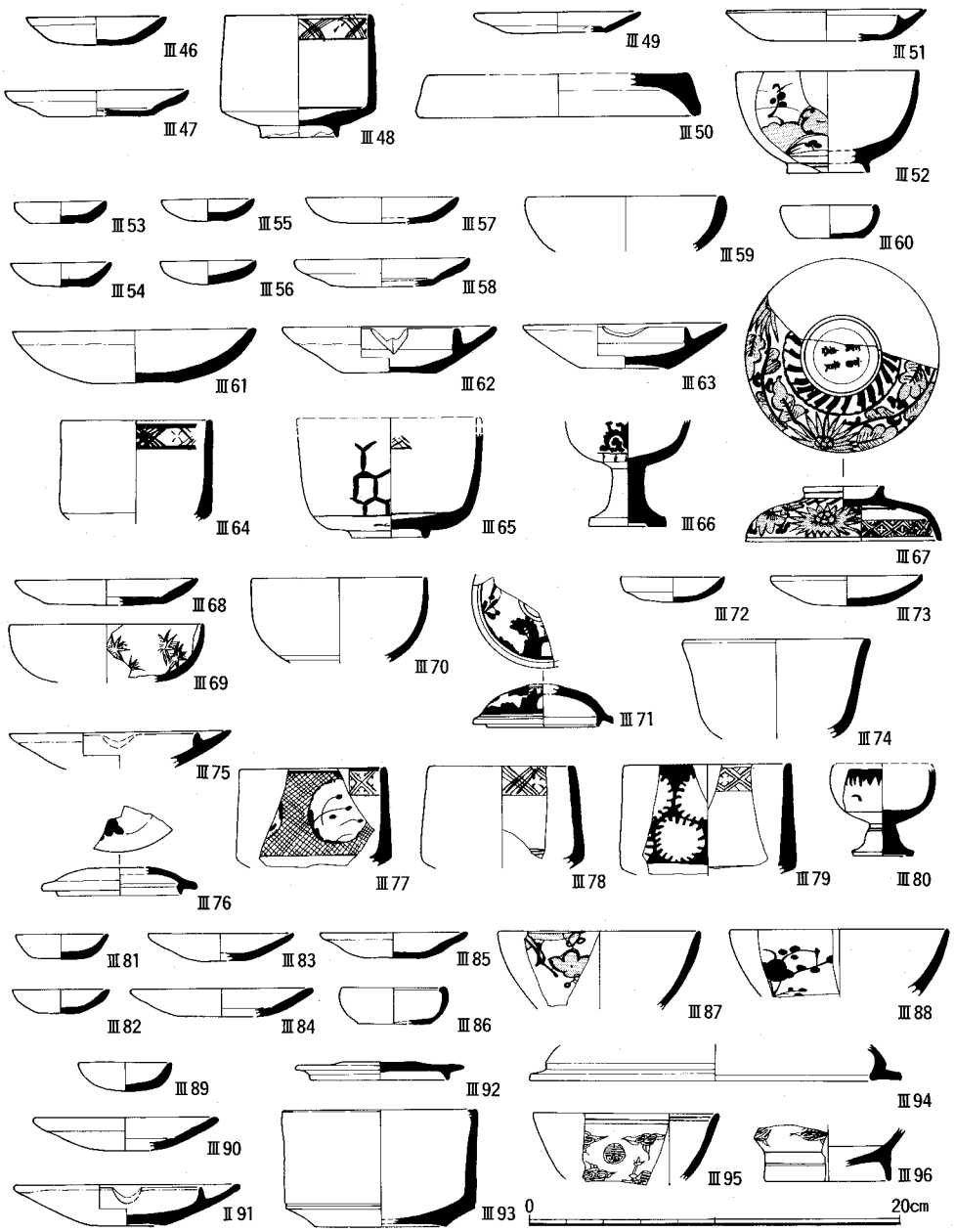


図28　SE15出土遺物（Ⅲ46・Ⅲ47土師器，Ⅲ48染付），SE17出土遺物（Ⅲ49・Ⅲ50土師器，Ⅲ51陶器，Ⅲ52染付），SE16出土遺物（Ⅲ53～Ⅲ60土師器，Ⅲ61～Ⅲ63陶器，Ⅲ64～Ⅲ67染付），SE26出土遺物（Ⅲ68土師器，Ⅲ69・Ⅲ70陶器，Ⅲ71染付），SE24出土遺物（Ⅲ72・Ⅲ73土師器，Ⅲ74～Ⅲ76陶器，Ⅲ77～Ⅲ80染付），SE27出土遺物（Ⅲ81～Ⅲ86土師器，Ⅲ87・Ⅲ88染付），SE22出土遺物（Ⅲ89・Ⅲ90土師器，Ⅲ91～Ⅲ94陶器，Ⅲ95・Ⅲ96染付）

く，くらわんか椀である。

Ⅲ53～Ⅲ67はSE16出土遺物。Ⅲ53～Ⅲ58は土師器皿。Ⅲ58は見込みに圏線をもつ。Ⅲ59・Ⅲ60は土師器デンボである。Ⅲ61は陶器燈明皿。Ⅲ62・Ⅲ63は陶器燈明受皿。受部の口縁に，Ⅲ62はV字形，Ⅲ63は弧状の欠き込みをもつ。Ⅲ64は青磁染付椀。Ⅲ65は染付椀で，亀甲文を施す。見込みに五弁花を描く。Ⅲ66は染付仏飯。見込みに五弁花を描く。Ⅲ67は染付蓋。高台内側に「富貴長春」の銘をもつ。

Ⅲ68～Ⅲ71はSE26出土遺物。Ⅲ68は土師器皿。見込みに圏線をもつ。Ⅲ69・Ⅲ70は陶器椀。両例とも灰黄色の釉を全面に施し，Ⅲ69は内面に鉄釉で花をあしらう。Ⅲ71は染付蓋。

Ⅲ72～Ⅲ80はSE24出土遺物。Ⅲ72・Ⅲ73は土師器皿。Ⅲ74は陶器椀。淡緑色の釉をかける。Ⅲ75は陶器燈明受皿。Ⅲ76は陶器蓋。灰黄色の釉をかけ，外面は鉄釉で絵を描く。Ⅲ77～Ⅲ79は染付椀。Ⅲ78は外面に青磁釉をかける。Ⅲ80は染付仏飯。

Ⅲ81～Ⅲ88はSE27出土遺物。Ⅲ81～Ⅲ85は土師器皿。Ⅲ84は見込みに圏線をめぐらす。Ⅲ86はデンボ。Ⅲ87・Ⅲ88は染付椀。外面に樹花文を描く，くらわんか椀である。

Ⅲ89～Ⅲ96はSE22出土遺物。Ⅲ89・Ⅲ90は土師器皿。Ⅲ91は陶器燈明皿。Ⅲ92は陶器向付の蓋。Ⅲ93は陶器向付。Ⅲ94は陶器ゆきひらの蓋。口縁部を露胎にし，鉄釉をかける。Ⅲ95・Ⅲ96は染付椀。線描きで文様を描く。Ⅲ96は高台が高く，広東椀である。

これらの資料は，18世紀後半から19世紀前半におさまるものであろう。

5　小　　結

本調査区周辺では，東に隣接する39地点で古代末の旧高野川系流路の護岸施設がみつかっており，その西に位置する調査区一帯の中世から近世にいたる地形環境や土地利用の変遷を明らかにすることが期待されたのである。

調査の結果，下層の茶褐色砂礫からは，少量の摩滅した中世の遺物は出土したものの，遺構は検出されなかった。この茶褐色砂礫は，調査区東半のY＝1667付近で段差があり，1段低くなっている西側には黄褐色土の面的な広がりが認められた。この黄褐色土からは，時期を特定できる遺物をえることはできなかったが，上層の黒色土と下層の茶褐色砂礫の年代から判断して，近世前半の開発などにかかわるものと推定している。

このように，この地付近は中世の段階では旧高野川系河川の流路内にあたり，不安定な状況にあった。鴨川がほぼ現在の流路に安定したのは近世にはいってのことであり，近世

後半以降に聖護院村周辺の畑地等として利用されるようになったのであろう。

近世後半の耕作に関わる遺構として，道とその両脇に並ぶ井戸，野壺，溝を検出した。道は，規模が小さく構造も簡単なことから，畑地の間を抜ける小径であったと考える。

道脇に並ぶ野壺は，京都大学構内では，白川道沿いをはじめとして，ほかの地点でも多数発見されており〔岡田・吉野80 pp. 23-6，五十川・宮本88 pp. 18-19，五十川ほか92 pp. 22-3，森下92 pp. 39-40〕，いずれも近世後半以降のものである点が共通している。この頃からこの地一帯が都市近郊農村として，多量の肥料を用いて，商品作物である疏菜の生産を発展させていったことを物語るものである。肥料の多くは，人糞尿と考えられるが，多量の使用は商品としての流通を生み出しており〔辻72 pp. 602-3〕，京市中より白川道などの街道を通じて近郊農村へと搬送されたのであろう。このように，近郊農村にとって都市は，単なる消費地ではなく有機肥料を介して生産を支える一翼を担っていたのであり，この点が都市近郊農業の特質ともいえる〔渡辺善83 pp. 341-8〕。

今回の調査で明らかとなった道，井戸，野壺，溝という耕作に関わる遺構群は，こうした都市近郊農業のありようを具体的にみることのできる重要な資料であり，また都市近郊農村である近世聖護院村の景観を復原するうえでも一助となろう。

参　考　文　献

石田志朗・中村徹也　1972年　『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』

泉　拓良　　1977年　「京都大学植物園遺跡」『佛教藝術』　115号

泉　拓良・飛野博文　1986年　「京都大学本部構内AT29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

五十川伸矢　1981年　「京都大学本部部構内AT27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1986年　「京都大学医学部構内AN20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

1991年　「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

五十川伸矢・千葉　豊・伊藤隆夫　1992年　「京都大学教養部構内AW27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』

五十川伸矢・飛野博文　1984年　「京都大学教養部構内AP22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫　1989年　「京都大学病院構内AJ18・AJ19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』

五十川伸矢・宮本一夫　1988年　「京都大学教養部構内AN18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

宇野隆夫　　1981年　「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ――白川北殿北辺の調査――』

梅原末治　　1923年　「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告　第5冊』

1935年　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第16冊』

1936年　「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第7輯』

岡田保良・吉野治雄　1980年　「京都大学本部構内AW28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

小野山節・都出比呂志　1973年　『高槻市安満遺跡の条里遺構』

小野山節・中村徹也　1976年　『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』

川上　貢　　1977年　「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）

1977年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）

1978年a　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

1978年b　『京都大学埋蔵文化財調査報告　第1冊――京大農学部遺跡BG36区――』

1979年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

1981年a　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ――白川北殿北辺の調査――』

1981年b　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1984年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

1985年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ――北白川追分町縄文遺跡の調査――』

参 考 文 献

1986年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』
1987年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』
1988年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』
1989年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』
1990年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』
1991年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』
1992年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』

京都市埋文研（京都市埋蔵文化財研究所）　1986年　『平安京発掘資料選(二)』

島田貞彦　1924年　「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号

島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦　1929年　「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号

清水芳裕・吉野治雄　1981年　「京都大学医学部構内AP19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

杉山信三　1962年　『院の御所と御堂』

千葉　豊　1991年　「病院構内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

辻ミチ子　1972年　「近郊の営み」『京都の歴史』第5巻近世の展開

中村徹也　1973年　『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年a　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
1974年b　「京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
1975年　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』

難波洋三　1989年　「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』
1992年　「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』

浜崎一志　1983年a　「京都大学北部構内BD30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』
1983年b　「浄蓮華院と吉田構――応仁の乱後の吉田の復原的考察――」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』
1990年　「京都大学医学部構内AL20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』
1991年　「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

浜崎一志・宮本一夫　1987年　「京都大学病院構内AF19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』

藤岡謙二郎　1973年　「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集
1978年　「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

森下章司　1992年　「芝蘭会国際交流会館建設予定地AR19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』

横山浩一・佐原　眞　1960年　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代

吉野治雄ほか　1980年　「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

渡辺　誠　1985年　「焼き塩」『講座・日本技術の社会史』第2巻塩業・漁業

渡辺善次郎　1983年　『都市と農村の間――都市近郊農業試論――』

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

第1条　京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という。）を置く。

第2条　センターは，京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。

第3条　センターにセンター長を置く。

2　センター長は，京都大学の専任の教授をもって充てる。

3　センター長の任期は，2年とし，再任を妨げない。

4　センター長は，センターの所務を掌理する。

第4条　センターに，必要に応じて，助教授，助手その他の職員を置く。

第5条　センターに，調査研究及び保存に関する業務を処理するため，研究部を置く。

2　研究部に主任を置き，前条の教官をもって充てる。

3　主任は，研究部の業務をつかさどる。

第6条　センターにセンターの事業に関する基本的計画，人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため，運営協議会を置く。

2　運営協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

(1) センター長

(2) センターの研究部の主任

(3) 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者　若干名

(4) 事務局長及び施設部長

3　センター長は，運営協議会を招集し，議長となる。

4　前各項に規定するもののほか，運営協議会の運営に関し必要な事項は，運営協議会が定める。

第7条　この要項に定めるもののほか，センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長

西川幸治（工学部教授　～1991.4.1）

小野山節（文学部教授　1991.4.2～）

運営協議会委員

小野山節（文学部教授　～1991.4.1）

應地利明（文学部教授）

川又良也（法学部教授）

西川幸治（工学部教授　1991.4.2～）

久馬一剛（農学部教授）

上田正昭（教養部教授　～1991.3.31）

足利健亮（教養部教授）

東村武信（原子炉実験所教授　～1991.3.31）

鎌田元一（文学部助教授）

山中一郎（文学部助教授）

林　昭三（木材研究所助教授　～1991.3.31）

鎮西清高（理学部教授　1989.4.1～）

清水芳裕（文学部助手）

大矢　誠（施設部長）

研究部主任

清水芳裕（文学部助手）

同研究員

五十川伸矢（文学部助手）

浜崎一志（工学部助手）

千葉　豊（文学部助手）

森下章司（文学部助手）

宮原恵美子（施設部教務補佐員　～1991.3.31）

石田由利子（施設部教務補佐員　1990.2.1～）

磯谷敦子（施設部教務補佐員　1990.2.1～）

植山京子（施設部教務補佐員　1990.2.1～）

事務室

中村美代（同事務補佐員　～1991.9.30）

辰巳ゆかり（同事務補佐員　～1990.3.3）

エフナコ八重子

（同事務補佐員　1990.4.1～9.30）

中田敬子（同事務補佐員　1990.10.1～）

松本一代（同事務補佐員　1991.10.1～）

京都大学構内遺跡調査会規約

第1条　この会は，京都大学構内遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称し，京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行うことを目的とする。

第2条　調査会は，事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。

第3条　調査会は，第1条の目的を達成するために次の事業を行なう。

(1)　京都大学の委託により行う当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査

(2)　前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存，管理に関する事項の審議

(3)　埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成

(4)　その他必要とする事項

第4条　調査会に次の役員を置く。

(1)　会長1名

(2)　委　　員

イ　京都大学の学識経験者若干名

ロ　新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長

ハ　新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者　若干名

(3)　監事若干名

2　会長は，前項2号イの委員の推薦する者とする。

3　会長の任期は2年とし，再任を妨げない。

4　委員及び監事は，会長が委嘱する。

5　第1項第2号ロ及びハの委員は，当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任務が終わったときは，退任する。

第5条　会長は，調査会を代表し，業務を総括する。

2　委員は，委員会を構成し，委員会の議決に基づく業務を執行する。

3　監事は，調査会の会計を監査する。

第6条　委員会は，会長及び委員をもって組織する。

2　委員会は，会長が招集し，議長となる。

3　委員会は，新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で，必要と認めたときは，部会を置くことができる。

第7条　第3条の発掘調査の実施に当たるため，調査会に調査班を置く。

2　調査班は，調査班長，調査員及び調査補助員をもって組織する。

3　調査班長は，委員会の議に基づき会長が委嘱する。

4　調査員及び調査補助員は，調査班長の推薦により会長が委嘱する。

第8条　調査会の事務を処理するため，調査会に事務局を置く。

2　事務局に職員若干名を置く。

3　職員は，会長が任免する。

第9条　調査会の経費は，京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。

第10条　調査会は，4月1日に始まる年度ごとに，事業報告書及び収支決算書を作成し，監事の監査を経て，年度終了後3ケ月以内に委員会の承認を受けるものとする。

第11条　この規約に定めるもののほか，調査会の運営に関し必要な事項は，会長が定める。

京都大学構内遺跡調査要項

調査委員会

会　　長　大山喬平（文学部教授 ～1991.3.31）
　　西村　進（工学部教授 1991.4.1～）

委　　員　小野山節（文学部教授）
　　大山喬平（文学部教授 1991.4.1～）
　　亀井節夫（理学部教授）
　　西川幸治（工学部教授）
　　足利健亮（教養部教授）
　　上野陽里（原子炉実験所教授～1991.3.31）
　　石田英寶（理学部教授 1989.4.1～）
　　山中一郎（文学部助教授）
　　石田志朗（理学部助教授）
　　西村　進（理学部助教授 ～1991.3.31）
　　清水芳裕（文学部助手）
　　加藤義行（事務局庶務部長 ～1990.1.19）
　　松本道雄（事務局庶務部長 ～1991.3.31）
　　高石道明（事務局庶務部長 1991.4.1～）

規約第4条1項(2)ロ

　　井村裕夫（医学部長　1989.7.1～1990.3.31）
　　河合忠一（附属病院長　1989.4.1～1990.3.31）
　　由良　隆（ウイルス研究所長　1989.4.1～1990.3.31）

規約第4条1項(2)ハ

　　浪貝　毅（京都市埋蔵文化財調査センター所長）
　　泉　拓良（奈良大学助教授）

監　　事　南　芳美（施設部企画課長　～1990.3.31）
　　市山悦也（施設部企画課長　1990.4.1～）
　　谷澤　充（医学部事務長　1989.7.1～1990.3.31）
　　今井義男（附属病院管理課長　1989.4.1～1990.3.31）
　　岡田平三（ウイルス研究所事務長　1989.4.1～1990.3.31）

調　査　班

調査班長・主任　清水芳裕，五十川伸矢，浜崎一志，千葉　豊，森下章司，宮原恵美子
調 査 員　黄　曉芬，次山　淳，西脇対名夫，岡田忠雄
調査補助員　上尾千代，植山京子，磯谷敦子，石田由利子
事 務 員　松本一代（～1991.9.30）
作 業 員　五十棲彰雄，木村謙次，浮田博文，河野佳子，古前健次，中山祥夫，
　　橋本庄次，橋本俊夫，三谷正三，安田秀男，堀井良一

京都大学構内遺跡調査要項

病院構内 AH19 区整理調査班

所 在 地　京都市左京区聖護院河原町
工 事 名　附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営
調査期間　1989年1月4日～同6月30日
面　　積　2495 m^2
班長・主任　清水芳裕，浜崎一志，千葉　豊，森下章司，宮原恵美子
調 査 員　1名
調査補助員　4名

病院構内 AE12 区整理調査班

所 在 地　京都市左京区聖護院河原町
工 事 名　ウイルス研究所実験研究棟新営
調査期間　1989年4月1日～同5月31日
面　　積　598.5 m^2
班長・主任　清水芳裕，千葉　豊，森下章司，宮原恵美子
調 査 員　2名

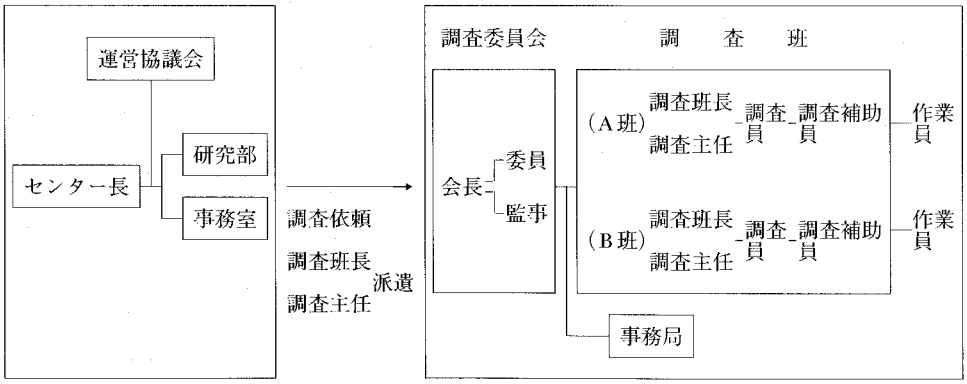
病院構内 AE13 区発掘・整理調査班

所 在 地　京都市左京区聖護院河原町
工 事 名　ウイルス研究所実験研究棟新営
調査期間　1989年7月1日～同9月30日（発掘）
1989年10月2日～1990年1月31日（整理）
面　　積　805 m^2
班長・主任　清水芳裕，千葉　豊，森下章司，宮原恵美子
調 査 員　3名
調査補助員　3名

北部構内 BA28 区試掘調査班

所 在 地　京都市左京区北白川追分町
工 事 名　北部構内校舎新営
調査期間　1991年10月28日～30日
面　　積　20 m^2
班長・主任　清水芳裕，千葉　豊，森下章司

京都大学構内遺跡の調査体制



京都大学埋蔵文化財研究センター　　京都大学構内遺跡調査会

表2　京都大学構内遺跡のおもな調査

（地点は図版1を参照，文献中「埋」は京大埋文研，「調」は京大調査会をさす。）

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田　耕作	表採・試掘			縄文土器，石器	梅原23，島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府安満		島田　貞彦 水野清一ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墓		梅原　末治	発掘			乾漆棺，玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原　末治				縄文土器，石器	梅原25	
1956	農学部	3	羽館　易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田　志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
	大阪府安満		小野山　節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器，石器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地蔵	6	石田　志朗 中村　徹也	事前発掘	600		弥生土器，石器	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村　徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器，瓦（平安）	埋78 b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村　徹也	事前発掘	600		縄文土器，土師器	中村73	
	農学部	10	中村　徹也	事前発掘	40		縄文土器		
	植物園	11	中村　徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b，泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74 a	
	農学部	13	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山　節 中村　徹也	事前発掘	750		土師器，瓦，陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 BE33区	16	泉　拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器，土師器，瓦	調77	
	病院 AE15区	19	岡田　保良	事前発掘	2200	古代・中世溝，池，土器溜	土師器，瓦，陶磁器	調77，埋81 a	
	植物園 BD35区	29	吉野　治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復原

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1976	病院 AH17区	34	泉　拓良	事前発掘	200	近世溝，井戸，集石	土師器，瓦	埋78 a	
	和歌山県 瀬戸		丹羽　佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器，人骨	埋78 a	
1977	病院 AF14区	39	岡田　保良 宇野　隆夫	事前発掘	800	古代護岸，中世溝，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋78 a，埋81 a	
	医学部 AO18区	41	泉　拓良 吉野　治雄	事前発掘	1200	中世溝，土器溜，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田　保良 宇野　隆夫 吉野　治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓，中世火葬塚	弥生土器，土師器，瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
	農学部 BG32区	55	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	100	古代土坑，溝	縄文土器，土師器	埋79	
	北部 BG31区	56	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80，埋85	
	本部 AW28区	57	岡田　保良 吉野　治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器，土師器，銭貨	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水　芳裕 五十川伸矢 吉野　治雄	事前発掘	2776	中世井戸，溝，土器溜	土師器，瓦，陶磁器，旧石器	埋81 b	
	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居，中世土壙墓，近世道路	土師器，須恵器，白磁	埋81 b	竪穴住居跡を現地保存
1980	本部 AT27区	89	泉　拓良	事前発掘	115	近世道路，堀	土師器，近世陶磁器	埋81 b	
	本部 AX28区	90	泉　拓良 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1120	近世白川道，中世土器溜，井戸，建物	土師器，瓦，陶磁器銅鏃（弥生），磨製石鏃	埋83	
	京都府 美月		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志 吉野　治雄	事前発掘	1468	弥生中・後期水路，土坑，中世土器溜	弥生土器，打製石斧，瓦器，陶磁器	埋83	立ち合い調査中に遺跡発見，工事を中断し発掘調査
	教養部 AO21区	91	吉野　治雄	事前発掘	112	中世井戸，土壙墓	土師器，瓦器，陶磁器	埋83	
	本部実験 排水	98	清水　芳裕	立合		流路，中世土器溜	土師器，丸瓦	埋83	遺構実測

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	理学部 BD30区	109	泉　拓良 浜崎　一志	事前発掘	272	古代建物，近世瓦溜	土師器，瓦陶磁器	埋83	
	和歌山県 瀬戸		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1500	弥生土坑，弥生配石，古墳時代土坑	縄文土器，硬玉管玉，弥生土器，製塩土器	埋84	
	本部 AX28区	110	浜崎　一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器，瓦，陶磁器，硯	埋83	
	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野　博文	事前発掘	1716	古墳，古代梵鐘鋳造遺構，中世門，溝，墓	縄文土器，弥生土器，須恵器，土師器，鋳型，溶解炉	埋84	梵鐘鋳造遺構を現地保存
	京都市 本山			分布調査			縄文土器，緑釉陶器，灰釉陶器	埋83	
1982	京都府 中海道		泉　拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器，土師器	埋84	
	病院 AF15区	122	清水芳裕 浜崎　一志	事前発掘	1028	中世井戸，溝，土坑	土師器，瓦器，白磁	埋84	
	農学部 BF33区	123	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	787	縄文住居跡，中世土坑	縄文土器，土師器	埋84	縄文住居跡を現地保存
	和歌山県 瀬戸		泉　拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器，弥生土器，製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
	本部 AT29区	124	泉　拓良 飛野　博文	事前発掘	890	中世濠，建物	土師器，瓦器，陶磁器	埋86	
	農学部 BE33区	125	泉　拓良 飛野　博文	事前発掘	803	中世・近世水田，溝	土師器，瓦，陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉　拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸，土取り穴	須恵器，瓦器，土師器	埋86	
	北部 BF31区	135	清水　芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林，古代，中世溝	縄文土器，土師器，緑釉陶器	埋87	
1984	病院 AF19区	141	浜崎　一志 宮本　一夫	事前発掘	863	近世池，井戸，野壷	縄文土器，蓮月焼	埋87	
	病院 AJ19区	142	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	260	中世土坑，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋87	
	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	1920	中世井戸，土取り穴，中世梵鐘鋳造遺構	土師器，瓦器，鋳型	埋88	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1985	北部 BJ31区	153	清水　芳裕 宮本　一夫	事前発掘	624	古代溝，建物跡，土坑，近世溝	弥生土器，土師器，須恵器	埋88	
	病院 AJ18区	154	清水　芳裕 浜崎　一志 菱田　哲郎	事前発掘	4295	中世井戸，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋89	
	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	3000	中世井戸，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器，鋳型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水　芳裕 宮本　一夫 難波　洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器，近世陶磁器	埋89	
	本部 AX30区	168	清水　芳裕 難波　洋三	事前発掘	330	古代土坑，中世道	土師器，陶磁器	埋89	
	医学部 AL20区	169	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	331	近世土取り穴	土師器，陶磁器	埋90	
	教養部 AL23区	170	清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	試掘	24	中世溝	土師器，瓦器，陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	618	土坑，河川	縄文土器，土師器，須恵器	埋90	
	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉　豊	事前発掘	1604	中世土坑，近世道路	縄文土器，土師器，陶磁器	埋92	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水　芳裕 森下　章司	事前発掘	216	中世土坑，近世道路	土師器，瓦，陶磁器	埋92	
	病院 AH19区	191	浜崎　一志 千葉　豊 森下　章司	事前発掘	2495	中世土坑・溝	土師器，瓦，陶磁器	第2章	
	病院 AE12区	192	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	598.5	近世道路，溝，野壺，井戸	土師器，瓦，陶磁器	第3章	
1989	病院 AE13区	198	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸，野壺，柵列	土師器，陶磁器，瓦	第3章	
1990	本部 AY23区	199	清水　芳裕	立合					遺跡なし
1991	病院 AG14区	200	千葉　豊 森下　章司	事前発掘	393.5	近世井戸，道路	土師器，陶磁器	整理中	
	北部 BA28区	201	清水　芳裕 千葉　豊 森下　章司	試掘	20	中世・近世包含層	土師器，須恵器	第1章	
	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎　一志 森下　章司	立合		中世土坑	土師器	第1章	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (m^2)	遺構	遺物	文献	備考
1991	病院 AE16区	203	浜崎一志	立合					遺跡なし
	病院 AF12区	204	千葉豊	立合					遺跡なし
	北部 BG35区	205	森下章司	立合		中世包含層			
	京都府 中海道 (向日市)	206	清水芳裕 五十川伸矢	立合		中世包含層			

第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 X

京都盆地の縄文時代遺跡

千葉　豊

地理情報システムを用いた
遺跡データベースの試験的研究

浜崎　一志

京都盆地の縄文時代遺跡

千葉　豊

1　はじめに

京都盆地の縄文時代遺跡は，1972年の段階ではわずか16箇所が確認されているにすぎなかったが[1]，1989年には70箇所に増加し[2]，現在では100箇所以上の遺跡がみとめられている。近畿地方では有数の遺跡密集地域となっているといってよい。また，これらの遺跡の分布をみると，盆地内に一様に所在するわけではなく，分布には粗密があり，偏在していることがうかがわれる。本稿は，京都盆地という一地域に分布する縄文遺跡を「遺跡群」としてとらえる視点から整理検討し，縄文時代遺跡群の提起する問題に接近しようとするものである。

縄文時代における遺跡群を検討する目的のひとつは，隣接して存在する複数遺跡の関係の復原ということであろう[3]。こうした検討は，集落そのものの構造的な検討同様，縄文人の集団領域や集団関係あるいは縄文社会の構造を明らかにするうえで，避けて通ることのできない重要な課題である。大規模開発にともなう広域にわたる悉皆調査などの進展にともない，東日本では様々な視点から検討が加えられ，多くの蓄積がなされてきているが[4]，西日本ではまず事例研究を積み重ねることが急務である。資料的制約という大きな障害があるにもかかわらず，本稿を起こす動機はこうした現状認識による。なお，「遺跡群」という用語は，ある一定地域に隣接して所在する複数の遺跡を包含する概念であるが，この用語は多様な内容が含み込まれて使用されることが多い。本稿では「遺跡群」を，ある一定地域における，(1)時期の異なる遺跡の累積（通時的側面），(2)同一年代を共有している遺跡の集合（共時的側面），という二つの側面から整理しておきたい。

2　京都盆地縄文時代遺跡の群別

南山城の平野部も含めて，京都盆地（山城盆地）と呼ばれることもあるが，ここでは，より地形的まとまりの強い盆地北部の旧巨椋池周辺までを対象地域とする[5]（図29）。遺跡の分布する範囲は南北約 20 km，東西約 17 km を測る。この地域は，北および東西は山塊がさえぎり，南は宇治川や桂川，巨椋池が画して地形的に閉鎖性の強い空間を形成している。

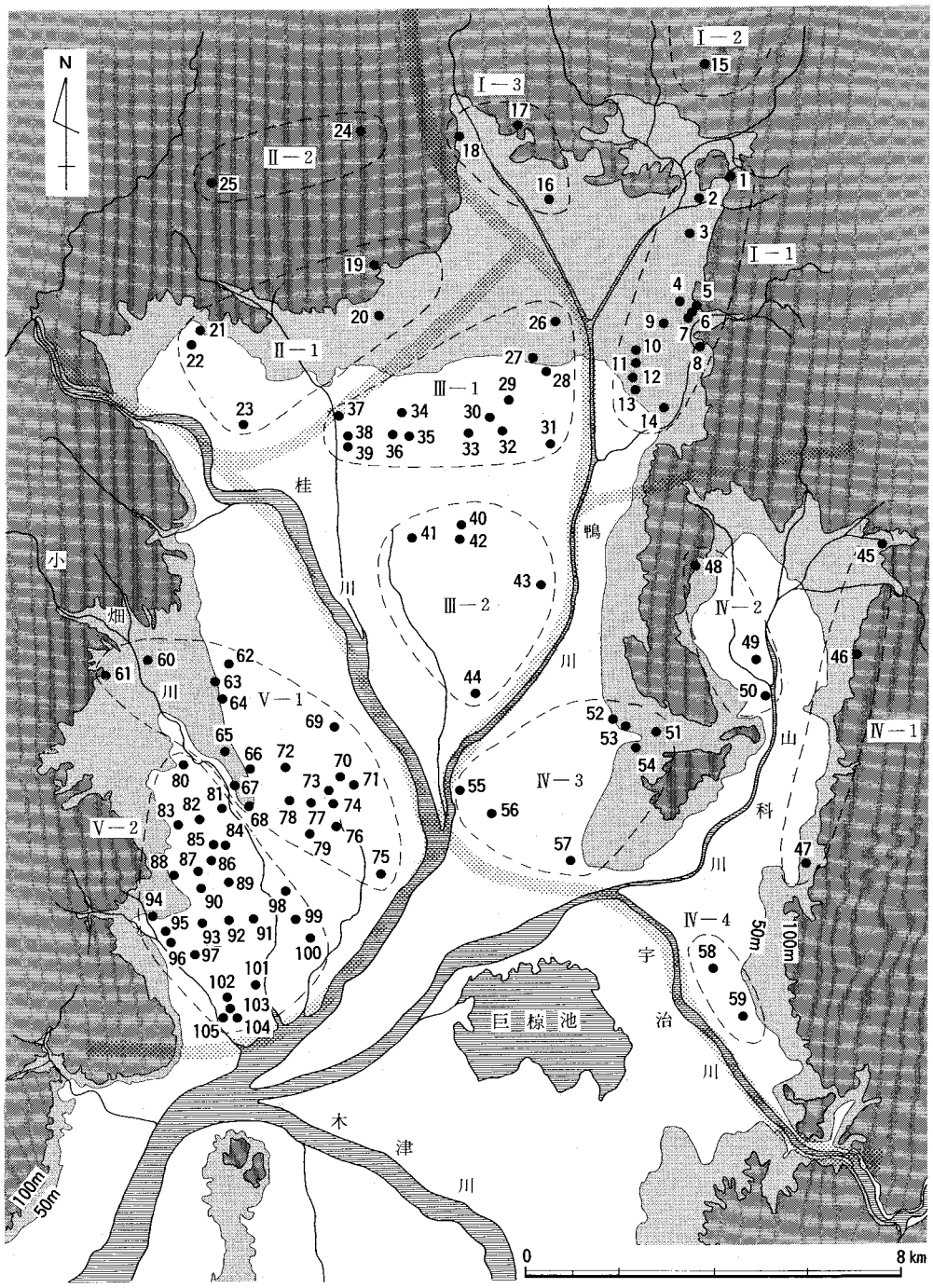


図29　京都盆地の縄文時代遺跡分布　縮尺 1/15万

遺跡群の設定は，遺跡の地理的位置や密集度，地形環境に基づいておこなった。遺跡を群としてとらえるためには，年代のものさしをできるだけ細かくし，すなわち細別された土器型式に基づき，同時期の遺跡を群としてとらえてゆく必要がある。しかしここでは，記述が煩雑になるのを避けるためと，一定地域への長期にわたる遺跡の累積がなんらかの社会的関係を反映しているとの想定より，まず，京都盆地に残された縄文時代全体の遺跡分布から，大きく5つの地域に区分し，各々の地域の中をさらに2～5の地区に細分した。この区分をもとに，通時的な視点と共時的視点から，実際のすがたをみてゆくことにしたい。最初に，設定した地域の特徴を概観しておく。

Ⅰ地域は，盆地北東部で18遺跡を数える。盆地の最奥部に位置する。比叡山西南麓に発達した扇状地上にとくに遺跡が密集している。比叡山西南麓の遺跡をⅠ-1地区，岩倉の遺跡をⅠ-2地区，上賀茂の遺跡をⅠ-3地区とする。

Ⅱ地域は，盆地北西部で7遺跡を数える。丘陵上と段丘上に遺跡は立地する。南部の段丘上の遺跡をⅡ-1地区，北部の丘陵上の遺跡をⅡ-2地区とする。

Ⅲ地域は，鴨川と桂川に挟まれた盆地中央部にあたり，19遺跡を数える。北部で扇状地上に立地する遺跡をⅢ-1地区，南部で扇状地から氾濫原に位置する遺跡をⅢ-2とする。

Ⅳ地域は，山科盆地，宇治川右岸，鴨川左岸を含む盆地東南部で，15遺跡を数える。段丘上，扇状地上から氾濫原に立地する遺跡が分布する。山科盆地東部の扇状地上に立地する遺跡をⅣ-1地区，山科盆地西部の丘陵，段丘，扇状地上に立地する遺跡をⅣ-2地区，鴨川右岸の扇状地から氾濫原にかけて立地する遺跡をⅣ-3地区，宇治川右岸の扇状地上に立地する遺跡をⅣ-4地区に細分する。

Ⅴ地域は，桂川右岸に位置する盆地西南部で48遺跡を数える。段丘，扇状地，氾濫原に立地する遺跡を含む。小畑川右岸の遺跡をⅤ-1地区，左岸の遺跡をⅤ-2地区とする。

3　遺跡群の時期的消長とその実態

時期別遺跡数　まず最初に，京都盆地全体としての遺跡の動向を他地域と比較しておきたい。図30は，泉拓良氏が作製した地域別の縄文遺跡の時期別比率のグラフに，京都盆地を加筆したものである。[(6)] 京都盆地の時期別比率は，早期から前期にかけてわずかに減少し，中期以降は順次増加してゆくという線を描いている。前期以降にかんして言えば，低地部の遺跡の代表である大阪平野とその周辺の比率とよく似ていることが判明する。異なっているのは，京都盆地では早期の遺跡の比率がやや高いことで，これは盆地縁辺の丘

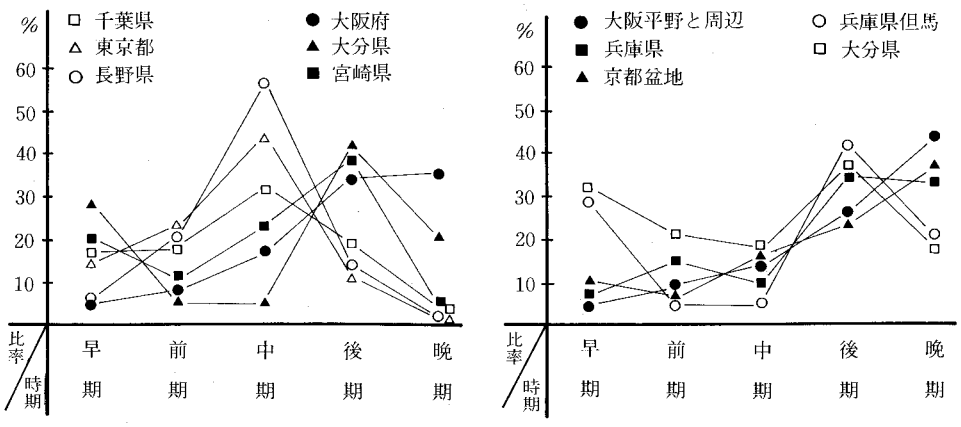


図30　各府県・各地方の遺跡数時期別比率（注6泉文献，第8図に加筆）

陵状の地形が早期の遺跡を増やしている結果と考えられる。

表3は，京都盆地の時期別の遺跡数推移をさきに設定した地区別にみたものである。個々の地区の単位でみてゆくと，比較的継続的に占地されている地区（Ⅰ-1・Ⅲ-1・Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅴ-2），前半期に主体がある地区（Ⅱ-1），後半期に主体のある地区（Ⅲ-2，Ⅳ-1），全く時期の不明な地区（Ⅰ-2，Ⅱ-2）など，遺跡数の推移にはいくつかの傾向があることがわかる。しかし，地域単位でみると，Ⅱ地域を除けば，それぞれの地域は京都盆地全体の遺跡数推移の傾向とほぼ似た変動を示しているといえよう。とくに，Ⅳ地域とⅤ地域における前期遺跡の未発見が，大阪平野と比較して京都盆地全体における前期遺跡の比率が低い現象を惹起させていると想定できる。

型式別遺跡数　大別時期では京都盆地全体および地域別の単位で，前期以降遺跡数は順次増加する傾向にあることをみてとれた。表4は，現在までに何等かの形で公表されている資料をもとに，土器型式別に確認できる遺跡数の推移をみたものである。未報告の資料の存在や新たな発見など，今後の変動も予想されるが，おおよその傾向を示しているとみてよいだろう。

遺跡数が比較的多いⅠ-1地区やⅤ-2地区そして京都盆地全体をとりあげれば，遺跡が前期から晩期に向かって一直線に増加しているわけではなさそうである。むしろそれぞれの時期のなかで，増加と減少という細かなジグザグ線を描きながら推移している，というのが実態であろう。そうした中で，早期前半の新しい段階（押型文後半期），中期末（北白川C式），後期前葉（北白川上層式1期），晩期末（船橋式，長原式）に比較的大きな増加がみられるのが注目される。しかし，こうした増加もその型式内か2，3型式の間で再

表 3　京都盆地時期別遺跡数の推移

	Ⅰ-1	Ⅰ-2	Ⅰ-3	計	Ⅱ-1	Ⅱ-2	計	Ⅲ-1	Ⅲ-2	計	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-4	計	Ⅴ-1	Ⅴ-2	計	全体
草創期？	—	—	—	0	1	—	1	4	—	4	—	2	—	—	2	2	4	6	13
早　期	5	—	1	6	1	—	1	1	—	1	—	1	1	1	3	2	3	5	16
前　期	5	—	—	5	1	—	1	1	—	1	—	—	—	—	0	—	—	0	7
中　期	7	—	1	8	—	—	0	3	1	4	1	1	—	—	2	4	6	10	24
後　期	11	—	1	12	—	—	0	1	2	3	2	2	—	—	4	7	8	15	34
晩　期	11	—	1	12	—	—	0	3	3	6	2	1	4	2	9	10	8	18	45

表 4　京都盆地土器型式別遺跡数の推移

	Ⅰ-1	Ⅰ-2	Ⅰ-3	計	Ⅱ-1	Ⅱ-2	計	Ⅲ-1	Ⅲ-2	計	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-4	計	Ⅴ-1	Ⅴ-2	計	全体
押型文(古)	—	—	—	0	—	—	0	1	—	1	—	1	—	—	1	—	—	0	2
押型文(新)	5	—	1	6	—	—	0	—	—	0	—	—	1	—	1	1	1	2	9
宮ノ下	2	—	1	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	3
条痕文	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	1
羽島下層Ⅱ	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	1
北・下層Ⅰ	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	3
北・下層Ⅱ	4	—	—	4	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	4
北・下層Ⅲ	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	3
大歳山	2	—	—	2	—	—	0	1	—	1	—	—	—	—	0	—	—	0	3
鷹島	2	—	—	2	—	—	0	1	—	1	—	—	—	—	0	—	1	1	4
船元Ⅰ	1	—	—	1	—	—	0	1	—	1	—	—	—	—	0	—	2	2	4
船元Ⅱ	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	1	1	2
船元Ⅲ	2	—	—	2	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	1	1	2	4
船元Ⅳ	2	—	1	3	—	—	0	—	1	1	—	—	—	—	0	—	2	2	6
里木Ⅱ	1	—	1	2	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	2
北白川C	5	—	1	6	—	—	0	1	—	1	1	1	—	—	2	3	3	6	15
中津	2	—	1	3	—	—	0	—	—	0	2	1	—	—	3	3	3	6	12
福田K2	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	1	1	2	6
広瀬土坑40	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	1	1	2	5
北・上層1	5	—	1	6	—	—	0	—	1	1	—	—	—	—	0	3	4	7	14
北・上層2	6	—	1	7	—	—	0	—	1	1	2	1	—	—	3	4	2	6	17
北・上層3	4	—	—	4	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	3	—	3	8
一乗寺K	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	1	—	1	3
元住吉山Ⅰ	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	—	1	1	3
元住吉山Ⅱ	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	—	—	—	2
宮滝	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	2	2	4	6
滋賀里Ⅰ	—	—	—	0	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	1	1	2	3
滋賀里Ⅱ	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	1	—	2	3	2	5	8
滋賀里Ⅲ	2	—	—	2	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	5	3	8	11
滋賀里Ⅳ	2	—	—	2	—	—	0	1	—	1	—	1	—	—	1	3	—	3	7
船橋	6	—	—	6	—	—	0	2	1	3	1	1	1	1	4	2	—	2	15
長原	9	—	1	10	—	—	0	2	1	3	—	1	2	—	3	5	2	7	23

表 5　京都盆地縄文時代遺跡の消長

時期	遺跡名	Ⅰ－1														Ⅰ-2	Ⅰ－3			Ⅱ－1					Ⅱ－2		Ⅲ-1
		1 修学院離宮	2 修学院小学校内	3 一乗寺向畑町	4 北白川上終町	5 北白川廃寺下層	6 北白川小倉町	7 北白川別当町	8 銀閣寺下層	9 北白川追分町	10 京大本部構内	11 京大教養部構内	12 吉田近衛町	13 聖護院	14 岡崎	15 岩倉中在地	16 植物園北	17 上賀茂	18 西賀茂	19 衣笠氷室町	20 北野	21 広沢池	22 嵯峨釣殿町	23 蜂ヶ丘中学校内	24 沢池	25 菖蒲谷	26 同志社女子大構内
草創期																					●						
早期	押型文（古）																										
	押型文（新）																										
	宮ノ下式																										
前期	条痕文																										
	羽島下層Ⅱ式																										
	北白川下層Ⅰa式																										
	北白川下層Ⅰb式																										
	北白川下層Ⅱa式																										
	北白川下層Ⅱb式																										
	北白川下層Ⅱc式																										
	北白川下層Ⅲ式																										
	大歳山式																										
中期	鷹島式																										
	船元Ⅰ式																										
	船元Ⅱ式																										
	船元Ⅲ式																										
	船元Ⅳ式																										
	里木Ⅱ式																										
	北白川C式																										
後期	中津式																										
	福田K２式																										
	広瀬土坑40																										
	北白川上層式１																										
	北白川上層式２																										
	北白川上層式３																										
	一乗寺K式																										
	元住吉山Ⅰ式																										
	元住吉山Ⅱ式																										
	宮滝式																										
晩期	滋賀里Ⅰ式																										
	滋賀里Ⅱ式																										
	滋賀里Ⅲa式																										
	滋賀里Ⅲb式																										
	滋賀里Ⅳ式																										
	船橋式																										
	長原式																										

表5　つづき

時期	遺跡名	Ⅲ－1												Ⅲ－2					Ⅵ－1			Ⅳ－2			Ⅳ－3	
		27 内膳町	28 京都御苑春日町	29 高陽院下層	30 二条城町	31 高倉宮下層	32 堀川院下層	33 朱雀第7小学校内	34 西ノ京南上合町	35 西ノ京新建町	36 西ノ京桑原町	37 右京三条四坊二町	38 西院三蔵町	39 西院平町	40 坊城町	41 西七条市部町	42 鴻臚館下層	43 東九条西山王町	44 上鳥羽	45 芝町	46 大宅廃寺下層	47 日野谷寺町	48 旭山	49 中臣	50 勧修寺	51 馬谷	52 深草
	草創期							●			●	●		●									●	●			
早期	押型文（古）																										
	押型文（新）																										
	宮ノ下式																										
前期	条痕文																										
	羽島下層Ⅱ式																										
	北白川下層Ⅰa式																										
	北白川下層Ⅰb式																										
	北白川下層Ⅱa式																										
	北白川下層Ⅱb式																										
	北白川下層Ⅱc式																										
	北白川下層Ⅲ式																										
	大歳山式																										
中期	鷹島式																										
	船元Ⅰ式																										
	船元Ⅱ式																										
	船元Ⅲ式																										
	船元Ⅳ式																										
	里木Ⅱ式																										
	北白川C式																										
後期	中津式																										
	福田K２式																										
	広瀬土坑40																										
	北白川上層式１																										
	北白川上層式２																										
	北白川上層式３																										
	一乗寺K式																										
	元住吉山Ⅰ式																										
	元住吉山Ⅱ式																										
	宮滝式																										
晩期	滋賀里Ⅰ式																										
	滋賀里Ⅱ式																										
	滋賀里Ⅲa式																										
	滋賀里Ⅲb式																										
	滋賀里Ⅳ式																										
	船橋式																										
	長原式																										

● 有茎尖頭器　⬆ 住居跡　▲ 土器棺墓　▼ 配石・集石　⟷ 細別型式不明

表5　つづき

時期	遺跡名	Ⅳ－3					Ⅳ－4		Ⅴ－1																		
		53 貞観寺下層	54 谷口	55 鳥羽離宮下層	56 下鳥羽	57 金森出雲	58 寺界道	59 隼上り	60 大枝	61 大原野	62 西ノ岡	63 中海道	64 物集女車塚周辺	65 西垣内	66 殿長	67 中野	68 南山	69 中久世	70 東土川西	71 東土川	72 渋川	73 石田	74 鶏冠井	75 久我西出町	76 鶏冠井清水	77 高田	78 森本
草創期										●					●												
早期	押型文（古）																										
	押型文（新）																										
	宮ノ下式																										
前期	条痕文																										
	羽島下層Ⅱ式																										
	北白川下層Ⅰa式																										
	北白川下層Ⅰb式																										
	北白川下層Ⅱa式																										
	北白川下層Ⅱb式																										
	北白川下層Ⅱc式																										
	北白川下層Ⅲ式																										
	大歳山式																										
中期	鷹島式																										
	船元Ⅰ式																										
	船元Ⅱ式																										
	船元Ⅲ式																										
	船元Ⅳ式																										
	里木Ⅱ式																										
	北白川C式																										
後期	中津式																										
	福田K２式																										
	広瀬土坑40																										
	北白川上層式１																										
	北白川上層式２																										
	北白川上層式３																										
	一乗寺K式																										
	元住吉山Ⅰ式																										
	元住吉山Ⅱ式																										
	宮滝式																										
晩期	滋賀里Ⅰ式																										
	滋賀里Ⅱ式																										
	滋賀里Ⅲa式																										
	滋賀里Ⅲb式																										
	滋賀里Ⅳ式																										
	船橋式																										
	長原式																										

表5　つづき

時期	遺跡名	V-1	V－2																								
		79 中福知	80 石見	81 上里	82 井ノ内	83 朝日寺	84 今里北ノ町	85 今里	86 舞塚	87 大塚	88 長法寺	89 弓場街道	90 東代	91 神足	92 開田	93 十三	94 奥海印寺	95 下海印寺	96 伊賀寺	97 友岡	98 馬場	99 芝本	100 雲宮	101 南栗ヶ塚	102 谷	103 宮脇	104 下植野南	105 松田
草創期									●	●								●	●									
早期	押型文（古）			↑																					↑			
	押型文（新）																	▌										
	宮ノ下式			↓																					↓			
前期	条痕文																											
	羽島下層Ⅱ式																											
	北白川下層Ⅰa式																											
	北白川下層Ⅰb式																											
	北白川下層Ⅱa式																											
	北白川下層Ⅱb式																											
	北白川下層Ⅱc式																											
	北白川下層Ⅲ式																											
	大歳山式																											
中期	鷹島式																			▌								
	船元Ⅰ式														▌													
	船元Ⅱ式																			▌								
	船元Ⅲ式																			▌								
	船元Ⅳ式																			▌					▌			
	里木Ⅱ式																											
	北白川C式			▌		▌		▌																				
後期	中津式			▌		▌												▌										
	福田K２式																											
	広瀬土坑40				▲▌												▲											
	北白川上層式１							▌							▌										▌			
	北白川上層式２														▌			▌										
	北白川上層式３																											
	一乗寺K式																											
	元住吉山Ⅰ式																											
	元住吉山Ⅱ式																											
	宮滝式																								▌	▌		
晩期	滋賀里Ⅰ式																							↑			↑	
	滋賀里Ⅱ式																					▌				▌		
	滋賀里Ⅲa式																						▌					
	滋賀里Ⅲb式														▌						▲▌							
	滋賀里Ⅳ式																											
	船橋式																											
	長原式							▲▌															▌					

● 有茎尖頭器　▲ 住居跡　▲ 土器棺墓　▼ 配石・集石　⟷ 細別型式不明

び落ち込む。小さな変動にいくつかの大きな変動が重なりながら遺跡数が推移していることに注目しておきたい。

遺跡の実態　ここまでとくに断わらずに，遺跡という用語を使ってきた。「遺跡群」の実態にふみこむためには，遺跡が示す内容を検討する必要がある。一口に「遺跡」といっても，住居や墓が発見され，多量の遺物がみつかる遺跡から，多量の遺物がみつかっても遺構が確認できない遺跡，少量の遺物のみが見つかる遺跡，後世の包含層の中から少量の遺物がみつかっている2次堆積の遺跡まで様々なすがたの遺跡を含んでいる。また土器型式からみて，長期にわたって存続したとみられる遺跡，短期あるいは断続的な占地が想定しうる遺跡があり，これらを同質のものとして扱うことはできない。

遺跡の性格による類型化（＝遺跡タイポロジー）は，遺構と遺物の組合せや遺跡の立地形態などを考慮して，6つのパターンに分類する小林達雄氏の案などがある。[(7)] このような分類案は，おもに東日本の縄文遺跡のあり方に基づいたものである。遺構の検出等がきわめて限定され，集落形態の違いも予測しうる近畿地方の遺跡にそのまま用いることは，不可能ではないとしてもあまり現実的ではない。そこでここでは，住居や墓などの集落を構成する主要な施設や石棒や土偶など祭祀にかかわって使用されたとみられる遺物が見つかっている場合あるいは多量の遺物が見つかっている場合は，中核的な集落と考えた。そして，少量の遺物のみが見つかっている場合は一時的な利用地ないしは集落候補地にとどめ，2次堆積の遺跡はその地域における時期的な連続性をみるさいに補助的に利用することにしたい（表6・7）。

遺跡群の消長　遺跡の実態を以上のようにとらえたうえで，時期別に遺跡の内容を検討しながら，群ごとの消長をみてみよう。なお，Ⅱ地域は実態がまったく不明であるので記述を省く。

草創期　草創期に編年される土器は，京都盆地ではまだ確認されていない。有茎尖頭器を出土した遺跡が草創期に含まれる可能性を考えて，「草創期？」として扱った。全体で13遺跡を数えるが，ほとんどが後世の堆積土などからの単独出土例であり，遺跡の状況がわかる例はない。ただし，Ⅲ-1地区で4例，Ⅳ-2地区で2例，Ⅴ-1地区2例，Ⅴ-2地区4例と集中して見つかっており，この地域を舞台に活動していた集団の存在が想定される。Ⅲ-1地区では，京都盆地最古の土器（早期前半の大川式）も見つかっており，低地部における遺跡の立地状況に今後留意する必要がある。

早　期　早期前半押型文期の遺跡は盆地の縁，丘陵上に分布する傾向にある。押型文

表 6　主要な遺構のみつかった遺跡

〔住 居 跡〕

番号	遺　跡　名	地　区	数量	時　　期	土器型式	備　　考
5	北白川廃寺下層	Ⅰ-1	1	早期前半	黄島式直前	壁柱穴
9	北白川追分町	Ⅰ-1	2	中 期 末	北白川C	石囲炉 1，地床炉 1
4	北白川上終町	Ⅰ-1	1	中 期 末	北白川C	石囲炉
47	日野谷寺町	Ⅳ-1	3？	中末後初	北白川C・中津	石囲炉 3，プラン未確認
82	井 ノ 内	Ⅴ-2	1	後期前葉	広瀬土坑40	地床炉
67	中　　野	Ⅴ-1	1	晩期中葉	滋賀里Ⅲ	
31	高倉宮下層	Ⅲ-1	1	晩期後葉		

〔土器棺墓〕

番号	遺　跡　名	地　域	数量	時　　期	土器型式	備　　考
9	北白川追分町	Ⅰ-1	7	後期前葉	北白川上層 1	正位・横位単独，配石
49	中　　臣	Ⅳ-2	2	後期前葉	北白川上層 2～3	正位単独
9	北白川追分町	Ⅰ-1	1	晩期後葉	長　原	横位単独，壺棺か
31	高倉宮下層	Ⅲ-1	1	晩期後葉	滋賀里Ⅳ	単　独
49	中　　臣	Ⅳ-2	6	晩期後半	滋賀里Ⅲb～船橋	単独 4，合蓋 1，合口 1
74	鶏 冠 井	Ⅴ-1	1	晩期中葉	滋賀里Ⅲb	合　口
98	馬　　場	Ⅴ-2	1	晩期中葉	滋賀里Ⅲb	単　独
46	大宅廃寺下層	Ⅳ-1	1	晩期後葉	船　橋	横位単独
3	一乗寺向畑町	Ⅰ-1	1	晩 期 末	長　原	横位単独
85	今　　里	Ⅴ-2	1	晩 期 末	長　原	合蓋，壺棺
16	植物園北	Ⅰ-3	1	晩 期 末		合　口

〔配石・集石〕

番号	遺　跡　名	地　域	数量	時　　期	土器型式	備　　考
5	北白川廃寺下層	Ⅰ-1	8	早期前半	黄島式直前	集石土坑，住居跡
47	日野谷寺町	Ⅳ-1	2	中末後初	北白川C・中津	配石土坑，土坑
9	北白川追分町	Ⅰ-1	8	後期前葉	北白川上層 1	配　石，土坑，土器棺
95	下海印寺	Ⅴ-2	1	後期前葉	広瀬土坑40	集　石
9	北白川追分町	Ⅰ-1	1	晩期後葉	滋賀里Ⅳ	配石土坑

前半期の遺跡は，西ノ京南上合町（34-遺跡番号以下同じ）と中臣(49)の 2 遺跡しかない。ともに 1 片程度の土器が確認されているだけであって，具体的な遺跡の状況はとらえにくい。これに対し，押型文後半期の遺跡は 8 遺跡に増加する。Ⅰ地域とⅤ地域を中心に集団が居住したらしい。とくにⅠ-1 地区では，北白川廃寺下層(5)で住居跡 1 棟と集石土坑 8 基が確認され，この時期の集落のすがたがとらえられた。集落は，現在は埋没しているやせ尾根上に営まれており，早期的な集落立地として注目しうる。

早期後半の宮ノ下式期では，遺跡数は減少しⅠ地域でのみみとめられるが，少量の土器が確認できるだけである。この時期の遺跡は扇状地上に占地している。早期前半の遺跡立地の傾向とは異なっており，前期以降につながる立地形態といえる。

前　期　　ほとんどの時期を通じて，Ⅱ-1 地区でのみ遺跡がたどられる。この地域で

表 7　祭祀遺物出土遺跡

〔石棒・石刀〕

番号	遺跡名	地域	数量	時期	種類	備考
9	北白川追分町	Ⅰ-1	2	中期末	石棒	頭部＋基部 1，身部 1
17	上賀茂	Ⅰ-3	1	中期末	石棒	頭部
68	南山	Ⅴ-1	1	中期末	石棒	頭部，溶結凝灰岩製
85	今里	Ⅴ-2	1	中～後期	石棒	
13	聖護院	Ⅰ-1		後期前葉	石棒	
44	上鳥羽	Ⅲ-2	1	後期前葉	石棒	基部，緑色凝灰岩製
82	井ノ内	Ⅴ-2	1	後期前葉	石棒	
74	鶏冠井	Ⅴ-1	1	晩期前半	石刀	
74	鶏冠井	Ⅴ-1	1	晩期中葉	石棒	ホルンフェルス製
9	北白川追分町	Ⅰ-1	5	晩期後葉	石棒	緑色片岩製
31	高倉宮下層	Ⅲ-1	2	晩期後葉	石棒	片岩系石材
73	石田	Ⅴ-1	1	晩期末	石刀	
63	中海道	Ⅴ-1	1	晩期末	石刀	
77	高田	Ⅴ-1	1	晩期	石刀	頁岩製
49	中臣	Ⅳ-2	11	晩期	石刀	
14	岡崎	Ⅰ-1			石棒	
46	大宅廃寺下層	Ⅳ-1			石棒	

〔土偶〕

番号	遺跡名	地域	数量	時期	備考
47	日野谷寺町	Ⅳ-1	1	中期末後期初	分銅形，完形品
31	高倉宮下層	Ⅲ-1	1	晩期後葉	脚部
100	雲宮	Ⅴ-2	1	晩期末	頭部

は，早期後半から扇状地上に遺跡が占地するようになり，前期に入って本格的な集落が北白川小倉町(6)で営まれる。前期の大部分を通じて集落は継続するが，前期末に集落の中心は一段低い扇状地末端の北白川追分町(9)に移動する。ただし遺物量からみて，前期末から中期初頭には集落の規模は縮小したようである。

盆地中央部のⅢ-1 地区の高倉宮下層(31)で，前期末大歳山式が出土しているが，2 次堆積による出土であり，遺跡の性格は今後の周辺調査に期待したい。

中　期　　Ⅰ-1 地区は前期に引き続いて集落が営まれるほか，Ⅰ-3 地区，Ⅲ-1・2 地区，Ⅳ-1・2地区，Ⅴ-1・2 地区でも遺跡が確認され，盆地全体に遺跡が分布するようになる。複数の集落の並存状況がみとめられる。

Ⅰ-1 地区では，北白川追分町(9)で集落が営まれる。中期末に繁栄を迎え，この時期には北白川上終町(4)にも集落が形成される。Ⅰ地域では，このほか 3 地区の上賀茂(17)でも，中期中葉に遺跡が始まる。中期末に属する石棒が出土しており，中核的な集落であると考えられる。Ⅲ地域は散漫な出土状況で，集落と確実にいえる遺跡は今のところつかめ

ていない。Ⅳ地域では，1地区の日野谷寺町(47)と2地区の中臣(49)で集落が営まれるようになる。中臣は，これ以降遺物の出土量に増減などがみられるものの，晩期末まで集落が継続しており，京都盆地では今のところ唯一の長期にわたる継続型の集落であるといえよう。

Ⅴ地域では，1地区の鶏冠井(74)，2地区の上里(81)，今里(85)，友岡(97)があげられる。1地区の鶏冠井は中期末に始まる集落で，後晩期にはこの地区の中核的な集落となっていったようである。また南山(68)出土の石棒は，2次堆積の遺物であるが，この地付近に中期末の集落の存在を示唆するものといえる。2地区の友岡は，前半を中心に営まれた集落で中葉に盛期を迎えている。上里，今里は中期末以降，中核的な集落となる可能性があり，今後の調査に期待したい。

後　期　　中期から集落が営まれている地区では，規模の拡大縮小はみられるものの後期前半も継続して集落の存在をたどることができる。新たにⅢ-2地区の上鳥羽(44)で，前葉の集落が形成されている。Ⅰ-1地区では，前葉に集落の並存状況がみられる。北から，修学院小学校(2)，北白川上終町(4)，北白川小倉町(6)，北白川別当町(7)，北白川追分町(9)，聖護院(13)があり，土器型式別にみて2程度の集落の並存が推定できる。このうち，北白川追分町では配石8基と土器棺墓7基がみつかっており，集落内の祭域・墓域と考えられる。Ⅳ-2地区の中臣(49)では，前葉から中葉の墓域がみつかっている。Ⅴ-2地区の井ノ内(82)では住居跡，下海印寺(95)では配石がみつかっており，いずれも前葉に属し，Ⅰ-1地区同様，集落の並存状況が想定しうる。

こうした後期前半の状況に対して，後半の一乗寺K式期以降は遺跡数が減少する。Ⅰ-1地区では，それまで北白川扇状地上にみられた集落はすがたを消し，かわって一乗寺向畑町(3)で集落が営まれ，後期末まで継続する。この遺跡以外に，この時期の集落と目されるのは，Ⅳ-2地区の中臣(49)，Ⅴ-1地区の石田(73)，鶏冠井(74)，Ⅴ-2地区の硲(はざま)(102)，宮脇(103)であるが，実態は不明瞭である。

晩　期　　初頭から前葉の遺跡は，実態の不明な点が多い。Ⅰ-1の地区では，後期末に集落がとだえ，再び営まれるようになるのは中葉以降である。初頭から前葉で集落といえる遺跡は，可能性のあるものも含めて，Ⅳ-2地区の中臣(49)，Ⅴ-1地区の鶏冠井(74)，Ⅴ-2地区の芝本(99)や宮脇(103)である。

中葉以降は，遺跡数が増加する。集落と認定できる遺跡は，Ⅰ-1地区では一乗寺向畑町(3)，北白川追分町(9)，Ⅲ-1地区では内膳町(27)，高倉宮下層(31)，Ⅳ-1地区では大

宅廃寺下層(46)，Ⅳ-2地区では中臣(49)，Ⅳ-3地区では寺界道(58)，Ⅴ-1地区では中野(67)，鶏冠井(74)，Ⅴ-2地区では今里(85)，馬場(98)，雲宮(100)である。土器棺墓がみつかっている遺跡の多いのは，この時期の特徴である。さらに後葉（船橋式）から末葉（長原式）の時期には，これらの遺跡以外にも小規模な遺跡が増加している。遺跡の実態がはっきりしないが，注目すべき現象であろう。

4　遺跡を結びつける関係

前節までの検討の結果をまとめると，現状の資料によれば少なくとも京都盆地には，早期2～3，前期～中期後半1～2，中期末以降は時期により変動があるが，4～8の集落がある一定の距離を保ちつつ，並存していたと推定することができよう。泉拓良氏は，本稿でⅠ-1地区とした比叡山西南麓における遺跡群のありようを検討し，ひとつの集落を構成している集団は日常的な生活における生産と消費の基礎的単位であり，基本的にこの地区（小地域）を領域として移動を繰り返していたと考えている。[8] この地区では，後期前葉などいくつかの時期に複数の集落の併存がみられる。短期間の集落でも聖護院(13)のように石棒が出土しているので，季節的な利用地とは考えにくい。集落の分岐とみなすべき現象と想定するが，時期が限定される点を重視すべきであろう。

このようにみてくると，少なくとも中期末以降の京都盆地には，複数の集落（集団）の並存がみられ，それが遺跡群を形成しているとみとめられるわけである。それではこうした集落は，どのような関係で結ばれていたのだろうか。このような問題に直接ふみこめる手がかりはきわめて少ないが，ここでは土器を取り上げ，考えてみたい。

土器型式圏と地域間関係　型式の分布圏との関係で考えてみよう。土器研究の現状では，京都盆地には通時的にみて同一の土器型式が分布しており，今回区分したような地域ごとに識別できるような土器型式の差異は，ほとんど見出してはいない。その点では，京都盆地全体が同一土器型式を保有する土器地域圏を構成しているといってもよい。しかし，この土器地域圏は京都盆地内で完結するわけではなく，大部分の時期を通じて大阪平野や滋賀県湖西地域といったより広い地域を包括する。同一土器型式を保有する集団は京都盆地の範囲を越えた少なくとも近畿中央部程度の広がりをもっていたと考えるべきだろう。同一土器型式内の小地域色がいかなる地理的範囲で識別できるかが集団間の関係をとらえるうえで課題となろう。

この点に関する検討は資料的制約もあって十分進んでいないが，晩期末長原式につい

て，京都盆地中央部を境に小地域色が存在するとする中村健二氏の指摘は重要であろう。[9] 中村氏は，凸帯文深鉢のうち調整工程の違いで分けたⅡ類が，近江から京都盆地東半（Ⅰ～Ⅳ地域）に分布し，西半（Ⅴ地域）以西には分布しないという地域的な差を識別している。あとで述べる土器の胎土でもこの時期，Ⅴ地域とそれ以外では違いが生じており，集落間の結び付きという点で，2つのグループに分けることができそうである。同様な地域色の存在は，弥生中期以降の土器研究でははやくから指摘されており，[10] こうした地域的まとまりがどこまで遡りうるのか，追究する必要があろう。

土器型式の動態と地域間関係　土器型式の交替や推移といった現象はより広い地域における土器の変化と連動しており，通時的にみた場合，より東との関係が強かったり，逆に西との関係が強かったり，あるいは独自色が強いといった土器地域圏の変動がみとめられる。いま，土器量の増減も含めて内容が比較的よくわかっているⅠ-1地区における土器型式の動態と遺跡群の動きについてみてみよう。[11]

この地域では，早期前半の押型文後半期に集落が出現するが，押型文前半期から後半期への土器の変化は，瀬戸内地方からの強い影響によるもので九州から近畿までが一体となるような土器地域圏の再編の結果である。前期に入ると北白川小倉町(6)を中心に集落が繁栄するが，前期末中期初頭には北白川追分町(9)に集落の中心が移動しかつ規模が縮小する。前期北白川下層式諸型式は近畿を中心に型式が推移しているのに対し，前期末中期初頭の大歳山式・鷹島式の分布の中心は瀬戸内地方に移っており，これ以降中期後半までの土器地域圏の中心は瀬戸内地方にある。

これに対して，中期末北白川C式は東日本からの強い影響のもとに成立した型式であり，地域圏の大きな変化がみられる。この時期に，北白川追分町を中心に集落の繁栄がみとめられる。中期末に繁栄した集落は，後期初頭には一時的に衰退するが，後期前葉北白川上層式期には再び繁栄する。この時期には東日本からの影響と在地の伝統が複雑に組み合って型式が成立・推移している。後期前葉に繁栄した集落は，中葉一乗寺K式になると廃絶し，かわって一乗寺向畑町(3)に集落が移る。一乗寺K式は地域色の強まる時期であり，土器地域圏の変動期と想定している。

このように，土器型式の動態と集落の消長をみてくると，土器地域圏の変化と集落の廃絶や移動，遺物の出土量などに示される繁栄・衰退がある程度連動していることが想定される。個々の集落の移動・廃絶あるいは繁栄・衰退の過程をこれだけで説明できるとは思わないが，土器地域圏の変化をひきおこすような広域にわたる，ある種の社会的な変動が

個々の集落の存続にも深く関与していた可能性には注目する必要があろう。[12]

土器の胎土と地域間関係　土器から地域間の関係を探る指標として最後に，土器の胎土を取り上げる[13]（表8）。胎土Aとしたものは胎土中に角閃石を多量に含み，暗褐色の色調で，一般に「生駒山西麓」産と考えられているものである。[14]

まず筆者が検討できたⅠ-1地区を通時的にみてみると，胎土Aの構成比率は時期別に波がみられることが分かる。比率の高い時期として前期前半，後期前葉，晩期末があり，ほとんどみとめられない時期として，前期後葉，中期，晩期中葉～後葉の時期が指摘できる。とくに，前期初頭（羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅰ式），後期前葉（北白川上層式2期）には4割を越える非常に高い比率を有する。ただし，比率の高いのは深鉢（有文，無文ともにあり）で，鉢・浅鉢にはほとんど含まれていないか1割以下である。

こうした土器の移動現象について，弥生土器のあり方を詳しく検討した都出比呂志氏は4つの類型に分けて説明している。[15] しかし，特定の器種のみに4割を越えるような高率の他地域産の土器が占めるような現象は弥生土器にはみとめられないようであり，縄文的な移動現象を示しているようである。それがどういう背景をもっておこなわれたのか，早急に解釈する前に，時期的地域的に比較できるデータを積み上げる必要があろう。いずれにしても，その比率の変動は中河内の集団との関係を示す指標として利用できよう。

胎土Aのしめる比率は直接的には中河内の集団との関係を示す指標であり，京都盆地内の集団間の関係を示してはいない。しかし，盆地最奥部のⅠ-1地区の集団が，中河内の集団と直接関係したと考えるよりも，京都盆地と大阪平野を結ぶ要衝の地に位置しているⅤ地域の集団がなんらかの形で関係していたと考える方が自然であるとすれば，京都盆地内部の遺跡間で胎土Aの比率を比較検討することによって，京都盆地内部の集団間の関係も間接的にではあるが，ある程度読み取ることもできるであろう。

現状ではデータが少なく，比較できる時期・地域ともに限られているが，後期前葉ではⅠ-1地区，Ⅴ-1地区ともに胎土Aのしめる比率は高く，その比率の推移も連動しているとみてよいのではないだろうか。データを掲げていないが，Ⅰ-3地区の上賀茂(17)（北白川上層式2期）でも破片で比率をみたところ，4割以上の比率を占めている。[16]

これに対して，晩期後葉から末ではどうであろうか。Ⅰ-1地区の北白川追分町では晩期末に1割5分程度，Ⅲ-1地区の高倉宮下層(31)では晩期後葉から末の時期の土器のうち，胎土Aは全体の1割に満たず，Ⅳ-4地区の寺界道(58)ではほとんど含まれない。一方，Ⅴ-1地区では，3割5分以上という高い比率を示しており，地域的なばらつきをみと

表 8　遺跡別・時期別の土器の胎土

番号	遺　跡　名	地区	時期	土器型式	胎土A	胎土非A	備　　考
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	前期	羽島下層＋下層Ⅰ	7 (43.8)	9 (56.2)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	前期	北白川下層Ⅱa＋b	22(18.3)	98(91.7)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	前期	北白川下層Ⅱ c	2 (3.8)	50(96.2)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	前期	北白川下層Ⅱ	2 (9.5)	19(90.5)	鉢・浅鉢口縁部
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	前期	北白川下層Ⅲ	0 (0)	20(100)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	中期	船元Ⅲ～里木Ⅱ	0 (0)	30(100)	深鉢口縁部＋胴部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	中期	北白川C	1 (0.6)	156(99.4)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	中期	北白川C	1 (2.1)	46(97.9)	浅鉢口縁部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	後期	北白川上層 1	30(20.4)	117(79.6)	深鉢口縁部＋底部
71	東 土 川	Ⅴ-1	後期	北白川上層 1～2	胎土A，9 割以上		
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	後期	北白川上層 2	33(48.5)	35(51.5)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	Ⅰ-1	後期	北白川上層 2	2 (9.1)	20(90.9)	鉢・浅鉢口縁部
7	北白川別当町	Ⅰ-1	後期	北白川上層 2	12(40.0)	18(60.0)	深鉢口縁部
7	北白川別当町	Ⅰ-1	後期	北白川上層 2	0 (0)	6 (100)	鉢・浅鉢口縁部
78	森本 1 地点	Ⅴ-1	後期	中津～上層 3	32(45.1)	39(54.9)	口縁部
78	森本 2 地点	Ⅴ-1	後期	北白川上層 3	6 (11.8)	45(88.2)	口縁部
11	京大教養部	Ⅰ-1	後期	北白川上層 3	2 (25.0)	6 (75.0)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	晩期	滋賀里Ⅲ b	0 (0)	11(100)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	晩期	滋賀里Ⅳ	0 (0)	14(100)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	Ⅰ-1	晩期	船橋～長原	6 (14.3)	36(82.4)	深鉢口縁部
58	寺 界 道	Ⅳ-4	晩期	船　橋	胎土A，約60点中に 1 点		
74	鶏 冠 井	Ⅴ-1	晩期	長　原	胎土A，約 6 割		
73	石　　田	Ⅴ-1	晩期	滋賀里Ⅲ b＋長原	6 (50.0)	6 (50.0)	
70	東土川西	Ⅴ-1	晩期	滋賀里Ⅱ～Ⅴ	5 (35.7)	9 (64.3)	口縁部

数値は点数，括弧内は百分率を表す。

めてもよさそうである。

中河内の集団との結びつきという観点からみれば，盆地内部のⅠ-1地区とⅤ-1地区の「集団」間の関係は，後期前葉には強かったのに対し，晩期末の段階ではⅢ-1 地区，Ⅳ-3 地区も含めて，Ⅴ-1 地区との関係は希薄になっていると予測することができそうである。この時期は近畿地方では稲作の導入に示される大きな変動期にあたっており，中河内という近畿地方では時代の先端を進んでいた集団との関係，新来の文化の受容過程で，それまで一体的なあり方を示してきた集団間で対応の仕方に違いが生じつつあったことを示唆している。

5　展　　望

遺跡群のまとまりで示される集団間の関係を探るために，いくつかの手がかりをもとに検討をくわえてきた。最後に以上の結果をもとにして，「遺跡群」という視点から縄文時代の集団組織の問題にいかに接近できるか，その見通しを述べて結びにかえたい。

今回設定した地区のいくつかでは継続的な集落経営がみられ，複数存在する場合は時期が限定されたり，その内容に差があったりする。このような時期を限定した集落の存在を分岐集落としてとらえてよいのであれば，同一地区の集落のまとまりは人口の増加減少のサイクルに合わせて，集団の分裂や統合がスムーズにおこないうるような血縁的に緊密な関係を保った「集団」の存在を示唆する。こうした「集団」の居住地たる集落は，林謙作氏のいう「ムラ」にあたるのだろう。林氏は，さらに東日本ではムラそのものに拠点となるものと出作り村や娘村など存続時期の短いムラがあり，それらが一体となって「複合型」の「村落」を構成しているとする。一方，西日本ではムラと村落の区分が明確ではなく，「規模の似通った小規模なムラが希薄な分布を示す」として，「連合型」の村落構成を想定している。(17)

今回の検討結果では，京都盆地に存在したムラそのものやその範囲，数はある程度とらえられる見通しを得ることができたと思う。しかし，同時に存在していた複数のムラがいかなるまとまり，すなわちいかなる社会的関係を保っていたかという点になると，とたんに不明瞭になってしまうのが実状である。存続時期などで多少の違いはあっても東日本で指摘されるような規模や内容が他と大きく異なったムラが存在するわけではない。周辺地域の遺跡群の検討も含めて，集落間の関係の吟味は十分とはとてもいえないが，林氏の指摘するように，小規模なムラが連続的に分布し規模や内容にはっきりとした階層性を示さないという西日本的な村落構成がその把握を困難にさせていると考えられる。ただし，東西の組織原理の差も想定されるので，東日本で設定できるような村落的なまとまりそのものが存在したかどうかがまず問題となろう。

こうした問題については，奈良県二上山産のサヌカイトや紀ノ川流域産の結晶片岩など，石器や石製品の原料に遠隔地から運ばれて来るものがあり，それらが石材の中で重要な位置を占めている点を重視したい。たとえば，Ⅰ-1 地区の北白川小倉町(6)や北白川追分町(9)では前期以降，石鏃の九割以上が直線距離で約 60 km 離れた二上山で産出されたとみられるサヌカイトで製作されており，もっとも重要な狩猟具である石鏃の材料を二上山から恒常的に入手しうる機構の存在が想定される。また同じく北白川追分町で出土している晩期の石棒・石刀類は，直線距離で約 80 km 離れた紀ノ川流域産の結晶片岩が使われている。

北白川縄文人がどのようにサヌカイトや結晶片岩を入手したか，その具体的な機構の解明は今後の課題であるが，盆地最奥に居住した北白川縄文人が，二上山周辺あるいは紀ノ

川流域の集団と直接結び付いて遠隔地物資の入手をおこなっていたとは考えにくい。その間には，物資の流通を円滑に進める中継地の存在が予測されるし，その背景に，いくつかのムラを束ねて遠隔地物資の入手を円滑かつ恒常的におこなったりムラ間の利害を調節するような共同組織，すなわち林氏のいう「村落」の存在を想定してもよいのではないか。

この点で，Ⅴ-1地区の石田(73)で見つかったサヌカイト原石は示唆的である。[18] この原石は，後期末のものであり，11個が集積され貯蔵されていた。この遺跡の地理的位置をも考慮すれば，ここへ集積された石器原料は，この集落で消費されるためだけではなく，さらにここを中継地として盆地東部あるいは北部の集団へと再分配する性格をも，あわせもっていたのではないだろうか。京都盆地全体の集団が，いま述べたような遠隔地物資の入手・分配などをめぐって，緊密な社会的関係を結んでいたと想定したいのである。そうした結合の上に，土器型式の分布圏や特定の物資の流通圏で示されるような，さらに広域なネットワークが形成されていたのではないだろうか。

このようにみてくると，土器型式の小地域色や胎土の検討からうかがえた晩期末におけるⅤ地域とした盆地西半とそれ以外の東半の地域との関係の微妙なズレは，注目しうる現象であろう。この時期には小規模な遺跡が増加するという現象もおこっており，なんらかの社会的変動を予測させる。水稲農耕を受容してゆく過程の中で，盆地の東半と西半では，集団の対応の仕方に違いが生じていたことを示すものであり，これは盆地全体を束ねていた緊密かつ伝統的な社会的結合の解体を暗示している。

以上，いくつか推論を加えながら，京都盆地に存在した縄文時代の遺跡を群としてとらえる視点から検討を加えてきた。それは決して十分なものでなく，今後への出発点を示し得たに過ぎない。繰り返しになるが，遺跡を群としてとらえる視点とは，遺跡を有機的に結び付けることにほかならず，これは集団の領域や社会の構造を明らかにするための前提作業にほかならない。今後の課題をしるす。

資料的制約という大きな問題は存在するが，集落そのものや1集団を構成する集団の領域は，遺跡の分布状況，内容や時期的消長を綿密に辿ることである程度把握できる見通しを得ることができた。今後は時期的に並存する集落間の関係をどのように明らかにしてゆくのかについて，方法論的検討も含めて大きな課題になると思う。また今回試みたような検討をすでにおこなわれつつある他の地域の成果と比較検討することができれば，京都盆地でのあり方が京都盆地独自のものなのか，もっと広い地域と連動した現象なのか，具体的に明らかになろう。

〔注〕

(1) 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』，1972年，pp. 159-81。

(2) 京都府教育委員会『京都府遺跡地図〔第2版〕』，1989年，pp. 58-120。なお，本稿で集計した遺跡数70は，本遺跡地図の「埋蔵文化財包蔵地集計表」(p. 121) に記載された縄文時代遺跡数65より多い。これは，遺跡地図では旧石器時代に含められている「有茎尖頭器」を本稿では縄文草創期？として扱ったためである。

(3) 遺跡群研究の目的については，武井則道「遺跡群研究序説（前)」『調査研究集録』第4冊，1979年，pp. 1-50を参照。

(4) 主なものに小林達雄「多摩ニュータウンの先住者――主として縄文時代のセトルメントシステムについて――」「月刊文化財』112号，1973年，pp. 20-6，石井　寛「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊，1977年，pp. 1-41，小林達雄ほか「(第1回シンポジウムの記録）縄文人の生活領域を探る」『研究論集』Ⅶ，東京都埋蔵文化財センター，1989年，pp. 81-236，勅使河原彰「縄文時代の社会構成――八ケ岳西南麓の縄文時代中期遺跡群の分析から――」『考古学雑誌』78-1・2，1992年，pp. 1-45，145-71。

(5) 本稿で対象にした資料は，「京都盆地縄文時代遺跡地名表」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊，1989年，pp. 80-2に掲載した遺跡を基本にして，若干の追加修正をおこなったものである。データ作成のために利用した報告書類は，本稿では必要最小限のものを挙げるにとどめた。同書の「遺跡地名表参考文献」pp. 83-7を参照していただきたい。

(6) 泉　拓良「縄文集落の地域的特質――近畿地方の事例研究――」『講座考古地理学』第4巻，村落と開発，1985年，第8図。

(7) 前掲注4小林文献。

(8) 前掲注6文献および泉　拓良「縄文時代のムラ――近畿地方――」『縄文から弥生へ』，1984年，pp. 107-19。

(9) 中村健二「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」『滋賀文化財だより』No. 144，1990年，pp. 1-4。

(10) 1960年代には，第Ⅱ様式の土器について近江の影響の強い京都盆地の東部と弱い西部との地域色の存在が明らかにされている（佐原　眞・田辺昭三「鶏冠井遺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』，1965年，pp.182-4)。その後，資料の増加とともにほかの時期でもほぼ同様の地域色が明らかになっており詳細な検討が加えられつつある（円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査」(上）『仏教芸術』82，1971年，pp. 77-8，都出比呂志「弥生時代」『向日市史』上巻，1983年，pp. 89-98，飛野博文「山城の弥生後期土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和56年度』，1983年，pp. 67-77，國下多美樹「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』，1989年，pp. 84-128)。

(11) 千葉　豊・矢野健一「縄文土器の変遷」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊，1991年，pp. 54-62。

(12) 矢野健一「遺跡を群としてとらえる」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊，1991年，pp. 68-71。

(13) 文献から引用したデータの出典は，次のとおりである。

森本1地点――亀割均ほか「長岡宮跡第141次（7AN7H）地区～北辺官衙（南部)，森本遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第29集，1990年，pp. 14-6。

森本2地点・久我西出町――亀割均ほか「長岡宮跡第143次（7AN6C地区）～北辺官衙（北部)，森本遺跡発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第29集，1990年，pp. 51-3。

寺界道――南博史ほか『伊丹市口酒井遺跡――第11次発掘調査報告書――』，1988年，p. 236。

鶏冠井・東土川西――秋山浩三「河内からもち運ばれた土器――山城・乙訓出土の生駒西麓産土器――」『長岡京古文化論叢』，1986年，pp. 386-9。

石田――新庄良「縄文土器胎土中の砂礫分析の方法と展開」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第33集，1992年，pp. 181-95。

(14)　胎土の識別は，肉眼によりルーペを補助具として使用した。一般に「生駒西麓」産とみなされる胎土にも，含まれている鉱物・岩石の種類や量，大きさなどから，採取地の違いが想定されており（菅原正明編『東山遺跡』大阪府文化財調査報告書付論，pp. 19-72，1980年），肉眼に低倍率のルーペを補助具として利用した分析でも，細かな差異の識別が追求されつつある（前掲注13新庄文献）。このような分析によれば「生駒西麓」産としてくくられる土器にも，生駒山西麓付近で製作されたものと，その前面に広がる沖積低地で製作されたものが含まれているようである。本稿では，胎土Aとしたものの細部の差は，問題にしていない。したがって胎土Aは，上述の両地域を含む「中河内」産の可能性が最も高いということになる。ただし，後で述べるように時期によってはきわめて高率を占めたり，晩期末の大型壺（浜崎一志・千葉豊「京都大学北部構内BD33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1987年度』，1990年，図21）のように持ち運びには適さないものもある。土器そのものの移動ばかりではなく，原料としての粘土や混和材の移動をも想定しておく必要があるのかもしれない。

(15)　都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』，1989年，pp. 298-320。

(16)　京都大学文学部博物館所蔵資料による。

(17)　林謙作「亀ケ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古学』5，文化と地域性，1986年，pp. 104-10。

(18)　高橋美久二「縄文文化」『向日市史』上巻，1983年，pp. 43-4。

地理情報システムを用いた遺跡データベースの試験的研究

浜崎一志

1　はじめに

発掘調査で検出した遺構や遺物の数は，年々増加の一途をたどり，遺構や遺物に関する情報を整理し，遺跡の全体像を把握することは大変な作業となってきた。個人での情報処理には自ら限界があり，また担当者の異動等により，情報を一から蓄積しなおすといった事態がよく見うけられる。また，発掘区の大きさや場所が限定される市街地などにおける調査では，細分化され，しかも多年度にわたる調査の結果から，遺跡の全体像を把握することは時間的にも作業量的にも大変なものとなってきている。

こうした事態に対処するため，遺構や遺物のデータベースの構築が進められ，情報の検索などに効果を上げている。考古学の分野でも歴史研究支援のためのデータベース・システムの開発が試みられ[(1)]，土偶のデータベースや[(2)]，遺跡のデータベース[(3)]などが作成されている。筆者も光波測距器と携帯用コンピュータを連動させ，位置情報と文字情報を連結し，文字情報の検索結果を図示するシステムを開発し[(4)]，北白川追分町遺跡などでの運用を通じて，応用技術を蓄積してきた[(5)]。また，民族学の分野では文字情報，映像情報，音響情報などを一体化して検索するマルチメディアの検索システム構築が試みられている[(6)]。ただ，こうした試みは文字情報や，文字情報と連結した画像情報であり，領域や空間インデックスをもつ図形情報は含まれていない。このため，遺跡や遺物などのデータベースの検索結果を，文字情報や遺跡・遺物分布図として出力できても，遺跡の分布図や遺構の配置図の中から，指定した遺跡や遺構の属性を表示するなど，文字情報と図形情報の間を双方向に検索・参照することはできなかった。

本稿の目的は，CAD (Computer Aided Design) システムを用いた図形情報データベースと一般的な属性からなる文字情報データベースを組み合せた，いわゆる地理情報システム[(7)]を用いて，歴史的史料の情報化の新しい手法の課題と方向性を模索することにある。そのため，ここでは白河の条坊地割をケーススタディとして取り上げ，遺構の形態や位置などの図形情報と，遺構の時期や種類などの文字情報を双方向から検索・表示が可能な，白河の条坊地割に関する遺構の位置・形態のデータベースを作成し，条坊地割に関連する遺構の図形情報と文献情報を組み合わせたシステムがどのような付加価値を生むのかを検証

する。

なお，今回ケーススタディとして取り上げた白河（現京都市左京区吉田・岡崎一帯）の地に，平安京と同様に条坊地割が施されたのは，平安時代末期のことである。この条坊地割は，白河天皇の法勝寺をはじめとする「六勝寺」の造営にともなって，実施されたものである。白河の条坊地割の研究は，福山敏男，杉山信三両氏をはじめとする諸先学らにより，おもに文献をもとに始められた。[8] 近年は，発掘調査で検出した遺構をもとに条坊地割に言及した研究報告がふえてきたが，六勝寺近辺など限られた場所のものが多く，条坊地割全体に論究した研究は少ない。[9] 筆者も，おもに六勝寺より北の部分について検討し，地割の方位，造営尺，範囲などについて考察したが，大路小路の幅員などの詳細については未解明のままである。[10]

2　図形情報データベース

CAD を導入する以前には，条坊地割の復原作業は，縮尺 1/2500 の都市計画図の上でおこなってきた。しかし，正確さを期するには縮尺 1/2500 の図では小さく，地割の方位，造営尺，遺構相互の位置関係などの詳細な検討に支障をきたしていた。また，全体像を把握するために張り合わせると，大きな図となり取りまわしに困難をきたした。そのうえ，白河一帯で実施した発掘調査は試掘・立合調査まで含めると，数百件におよび，こうした情報の整理は，都市計画図とカードでは限界に達しつつあった。

そこで，汎用の CAD ソフトである Auto CAD を用いて，図形情報のデータベースを作成した。遺構の位置や形状を，xy 座標系の中で点の軌跡として入力し，ベクトル・データからなる図形データベースを作成した。ベクトル・データとして入力することにより，コンピュータの画面上で拡大，縮小，画層の重ね合わせなどが可能となった。

詳述すると，CADに遺構の図形データを入力することにより，

(1) CAD の拡大機能により，遺構と復原案の詳細な位置関係を確かめ，縮小機能により，遺構相互の位置関係や条坊全体を巨視的に検討することができる。遺構は数値データで入力しているため，方位，造営尺の検討を数値で行なうこともできる。

(2) 遺構と違う画層に復原案を描くことにより，遺構図に影響を与えることなく，何度でも試行錯誤を繰り返しながら復原案を検討することができる。条坊地割の方位や造営尺を微妙に変化させながら，検証することができる。

逆に，遺構のデータを CAD で取り扱う際の問題としては，

(1) 遺構は複雑な曲線からなるものが多く，正確に記録するためには細かく測点する必要があり，データ入力に要する人的負担が大きい。

(2) データ量が多くなり，拡大，縮小，視点の変更などの表示に対するコンピュータの負荷が大きくなる。

などがあげられる。こうした点をふまえながら，白河の条坊地割の図形情報データベースを作成した。具体的な手順としては，

(1) 既刊の調査報告書などから，白河の条坊地割に関連すると思われる，平安時代末期から室町時代にかけての遺構を抽出した。

(2) これらの遺構の座標値を，国土座標第Ⅵ座標系に統一し，汎用 CAD ソフトのひとつである Auto CAD に，ディジタイザを用いて，その平面形や位置を入力した。入力は遺構の種類ごとに画層と輪郭の線種，線の色をかえて入力した（図31～33)。

(3) 背景画像となる現在の街区や字境界，および，区画整理や字の統合が進められていない昭和初期の字境界も同様に入力し，必要に応じて表示するようにした（図32)。

以上のような手順で遺構の図形データベースを作成し，後述する文字情報データベースとの連結に備えた。

3 文字情報データベース

文化財を扱うデータベースには，文化庁と奈良国立文化財研究所が構築を進める『全国文化財データベース』がある。このデータベースは，遺跡や建造物群を対象とする「不動産文化財データベース」と，美術工芸品などを対象とする「動産文化財データベース」とからなる。「不動産文化財データベース」については共通項目群が設定され，共通項目，項目番号，文字数，文字種などや，時代区分など各項目のコードが呈示され，データベースの核として定義されている。[11] 本稿の主題はデータベースの項目やコードの定義ではなく，また，構築を試みるデータベースの主たる対象は遺構であり，こうした共通項目群を共有する部分は少ない。そこで各項目群やそのコードなどを尊重し，共有できる部分は共有しながら，遺構のデータベースの構築を試みた。

遺構の文字情報データベース作成の具体的な手順としては

(1) データベース・ソフトのひとつである R : BASE に，発掘区や文献データベース，および遺構の種類ごとのデータベースを作成した。

(2) データベースの項目は，遺構番号，遺構の時期，関連文献など共通なものと，遺構の

方位などデータベースごとに違うものを設定した。例えば，道路などはその方位，検出幅，などの項目を追加し，溝などではさらに傾斜の方向，底のレベルなどを追加し，文字情報からなる遺構のデータベースを作成した。

4　地理情報システムについて

地理情報システム（Geographic Information System）は，本来は地表におけるさまざまな現象を数値化して空間的，地理的にとらえるシステムである。地理的空間を数値化した空間のデータ・モデルには，国土の自然条件（海岸線，地形など），社会・文化条件（行政界，土地利用，交通路，集落など）などがある。この空間データ・モデルには，位置や形状のみならず，画像・統計・文献などの情報を含む。このため，地理情報システムの空間データ・モデルは地図を作成すると同時に分析する機能をもち，単なる地図の図化システムと本質的に異なったものであり，その検索機能も単なるキーワード検索を越えるものである。

このため，地理情報システムは，地理学の分野だけでなく，施設管理，都市計画支援システムなど，空間データと非空間データを取り扱う分野に利用範囲が広がった。本稿で構築を試みた遺構データベースもこの延長線上にあり，空間データ・モデルからなる図形情報データベースと，属性データからなる文字情報データベースの一体化をはかり，遺跡の分析の新たな方法を模索するものである。ここでは，現在，パーソナル・コンピュータ上で動作可能な地理情報システムに類する機能を持つ Auto CAD（Release 12 J 版）をケース・スタディとして取り上げ，地理情報システムの可能性を探った。

Auto CAD は元来，その仕様が公開されており，多くのユーザーがその使用法を工夫したことから，図形処理のプラットフォームとして使われ，素材型の CAD と言われてきた。このプラットフォームとしての Auto CAD には，SQL（Structured Query Language 構造化問い合わせ言語）に対応したデータベースを連結できる拡張機能である ASE（Auto CAD SQL Exetention）が用意されている。[12] この拡張機能を利用すると，おもだったデータベースの文字情報と，Auto CAD の図形情報データを連結することができ，単なる図面ではなく，データベースに支援された図面として取り扱えるようになる。すなわち，CAD に入力した遺跡や遺構の図形情報に，その遺跡や遺構の時期や方位などの文字情報を連動させながら，双方向に検索，表示することができる。

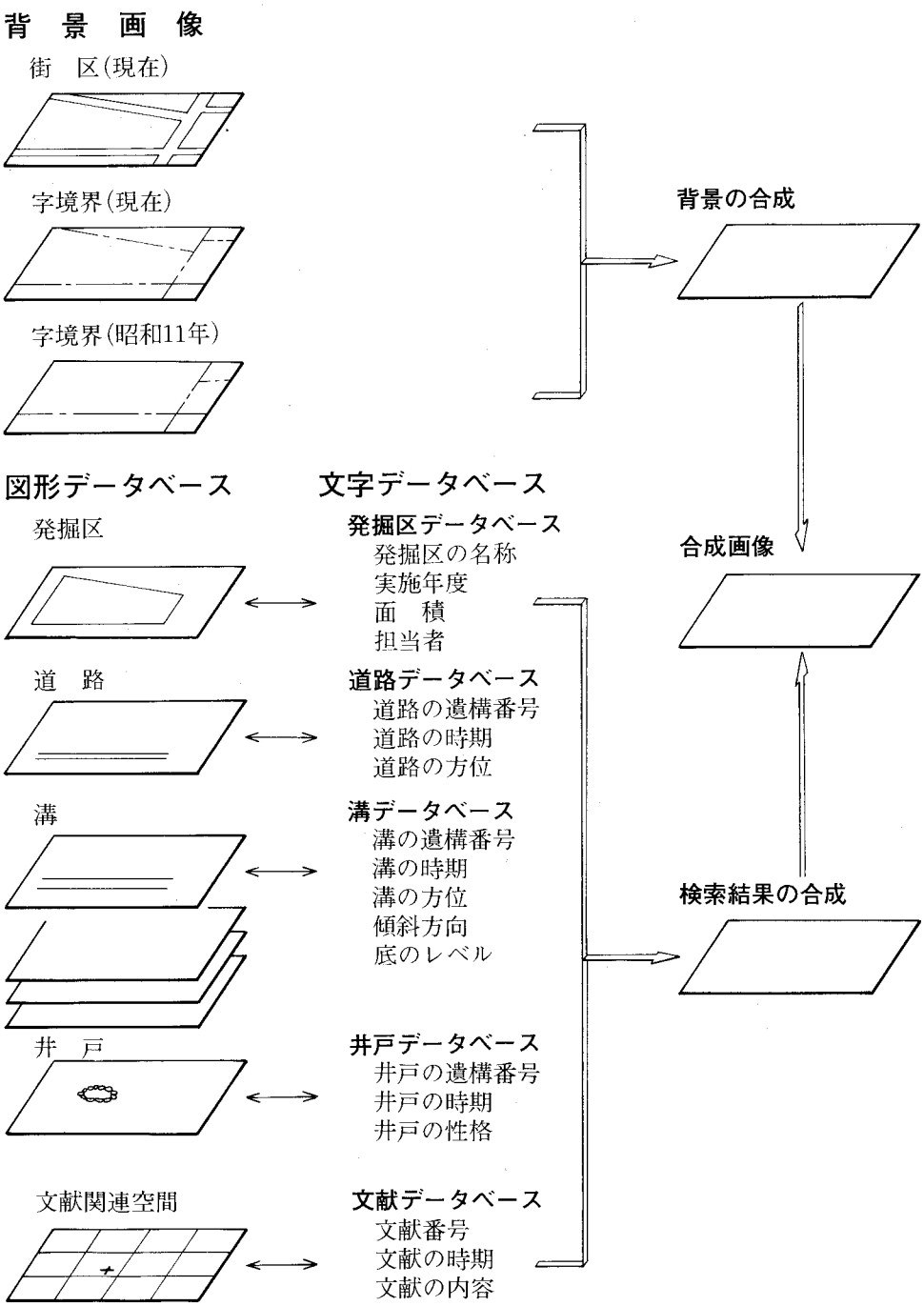


図31　遺跡データベースの概念図

図32　遺構データベースの背景画像

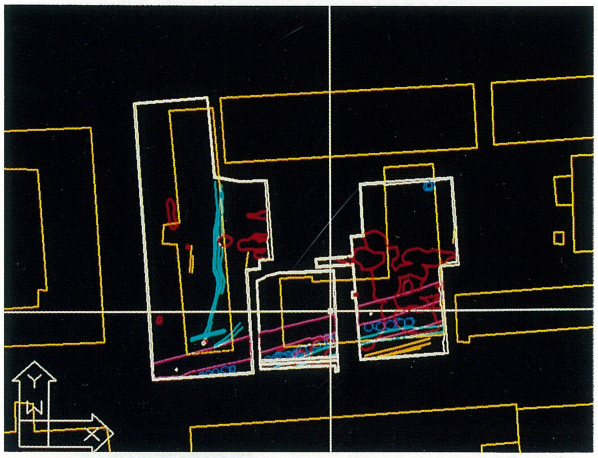


図33　本部構内AW28区周辺の遺構

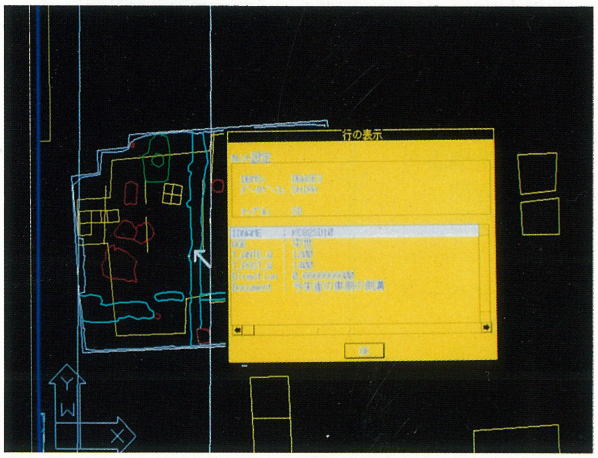


図34　発掘区の文字情報

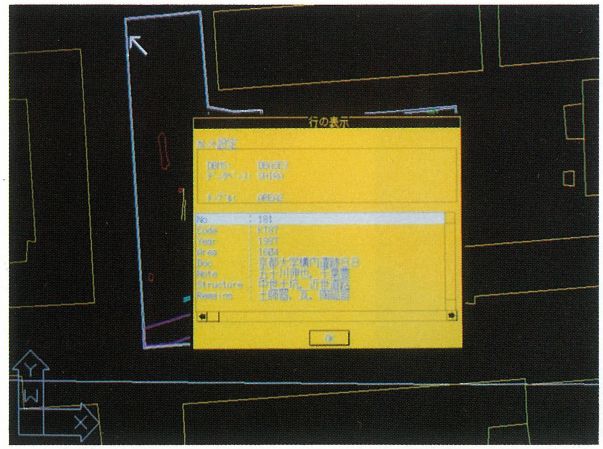


図35　教養部構内 AP22 区の遺構の文字情報

図36　検索結果を点線で表示

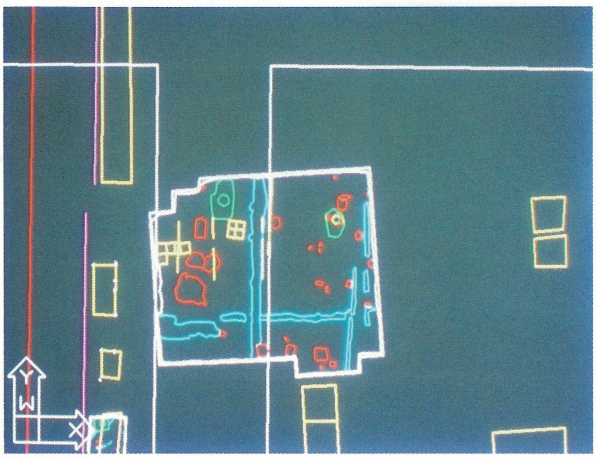


図37　溝 SD10 と推定築地中心線

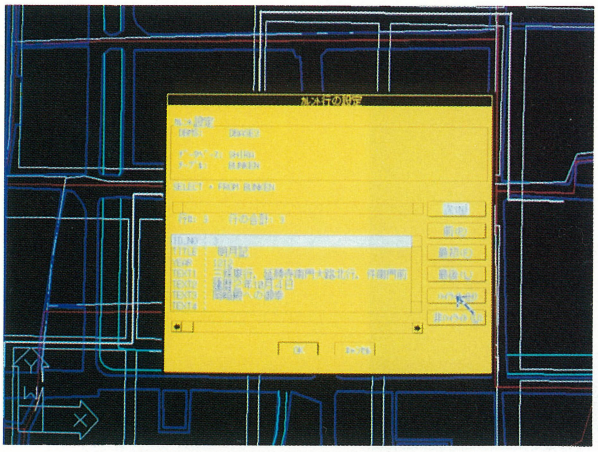


図38　街路に関する文献情報の表示

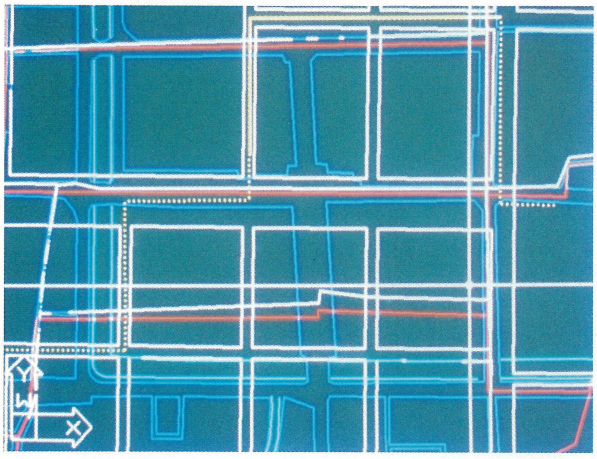


図39　検索結果を点線で表示

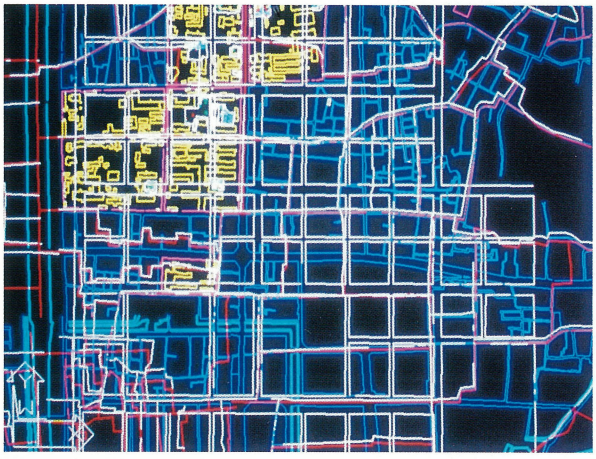


図40　白河の条坊地割復原図

この拡張機能 ASE は，具体的には，

(1) 従来の CAD では図形にともなう属性データが，その属性値を図形データと共に持つのに対し，ASE は連結情報のみを持ち，データは外部のデータベース・ファイルを参照する。このため属性数が多くなっても，CAD の応答性やデータ容量には影響ない。

(2) 文字情報や図形情報の修正は，各々，データベース・ソフトと CAD 上で単独に行える。さらに，図形情報と文字情報を連結した後でも，データベース・ソフトまたは CAD 上での編集結果を，データベースに反映させることができる。図形情報と文字情報は，どの時点でも連結しており，それぞれの編集は即座に双方向に伝えられる。

などの特徴をもつ。こうした特徴を利用して，白河の条坊地割の遺構データベースを作成し，地理情報システムの有効性を検証した。具体的には，

(1) 図形情報として Auto CAD に入力した現在の街区や字境界，そして区画整理や字の統合が進められていない昭和初期の字境界を，画層を分けて管理し，背景画像として必要に応じて表示できるようにした（図32）。

(2) 文字情報データベースと図形情報データベースとを，Auto CAD の拡張機能 ASE を用いて，連結した。データベースの連結は，遺構番号をキー項目として定義し，このキー項目を介しておこなった。これより条件の一致する遺構だけを図示したり，図の中で指示した図形の文字情報を表示するなど，図形情報とその属性である文字情報の間を双方向の検索が可能となった（図34～36）。

5　遺構データベースを用いた条坊地割の復原

次に，地理情報システムを用いて作成した白河の条坊地割に関連する遺構データベースを用いて，条坊地割の復原を試みた。遺構データベースをもとに，遺構の時期，種類，方位などを条件として検索した結果を図示し，さらに条坊地割の展開過程や廃絶過程，条坊地割の方位や造営尺などを，CAD で表示した図から読み取れるか否かを検証した。背景画像の現在の画層や，新旧の字境界の消去と表示を試行し，重量表示した検索やシミュレーション結果を見ながら，遺構に関連する文字情報を利用した各種の検索を実行し，このシステムの有効性を検証した（図34～39）。

さらに，CAD 拡大，縮少，画層の重ね合わせ機能などを用いて，条坊の復原案を作成し，コンピュータの画面の中で重ね合わせて，復原案の方位や造営尺を検証し，復原を試みた。細部については，プロッターで拡大して作図し，検討をおこなった（図40）。

以上のような作業を試験的に進めながら，遺構データベースのあり方を模索した。時間的制約もあり，白河の条坊地割りに関連する遺構をすべて入力することはできなかったが，こうしたシステムが遺跡データベースとして，情報を共有したり，検索の手段として，情報管理に利用できるだけでなく，遺跡の復原や，視覚化にも有効であることが判明した。

遺跡のデータベース以外にも，既存の実測図面の実測範囲や，写真の撮影範囲や位置などを入力し，実測図や写真のデータベースを構築するなど，広い範囲に応用できる可能性をもつ。

また，CAD に連結するレンダリング・ソフトやマッピング・ソフト，そして2次元画像処理ソフトを用いれば，より写実的な復原も可能であり，遺跡の復原に様々な可能性が生まれる。こうした復原の表現方法について，今後の課題としたい。

なお，本稿は文部省科学研究費　一般研究（C）補助金（課題番号：04805062，課題：「地理情報システムを用いた白河の条坊地割の復原的研究」）の交付を受け，研究活動を行った成果の一部である。本稿をまとめるにあたっては，㈱パスコ技術開発室の長谷川博幸氏，Projections Mapping Group Inc. の William Mckenzie 氏には技術情報を提供頂いた。心より感謝申し上げる次第である。

〔注〕

（1）　八重樫純樹ほか『歴史研究支援情報処理の研究　―画像データを中心にして―』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第30集），1991年。

（2）　八重樫純樹ほか『土偶とその情報』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集），1992年。

（3）　田鎖壽夫「遺跡データベースの構築について」『紀要ⅩⅡ』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）1992年，「全国文化財データベースについて」『埋蔵文化財ニュース』75，（奈良国立文化財研究所），1992年。

（4）「マイクロコンピュータと遺跡調査　―光波タキオメータとマイクロコンピュータによる遺物分布図の作成―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』，1984年。

（5）「京都大学北部構内 BE33 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』，1986年，「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』，1987年，東北大学文学部考古学研究室編『荒屋遺跡　―第2・3次発掘調査概報―』，1990年。

（6）　杉田繁治・洪政図・山本泰規『民族学情報有効利用のためのコンピューター応用手法についての基礎研究』（『国立民族学博物館研究報告別冊』第17号），1992年。

（7）　地理情報システムはその名称が示すように，本来は地理的な現象を数値化して，空間的，地理的に捉えるシステムであった。しかし，最近では，都市施設の管理や建築設計など，各種の空間データの解析にも利用されており，その名称と用途に乖離が見られるものの，文字情報と図形情

報を同時にあつかうシステムの一般名称として，この名称を用いる。

なお，図形情報システムに関しては，野上道男・杉浦芳夫『パソコンによる数理地理学演習』，1986年，K. WESTLAND 編『パソコン・マッピング入門—地図の図形処理—』，1987年，碓井照子「地理的空間の分析と地理情報システム」『人文地理』第43巻第5号，1991年を参照した。

(8) 代表的な研究として，福山敏男「六勝寺の位置について」(上),(下)『美術史学』81,82，1943年や，杉山信三『院の御所と御堂』(『奈良国立文化財研究所学報』第11冊)，1962年がある。

(9) 岡田保良「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，1979年は発掘調査の成果をもとに，条坊地割を復原した少ない例のひとつである。

(10) 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』1991年，pp. 47-60，「京都白河における平安時代後期の条坊地割の復原」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第31号，1991年，pp. 949-952。

(11) 「全国文化財データベースについて」『埋蔵文化財ニュース』75，(奈良国立文化財研究所)，1992年。

(12) ASE に関しては，『AUTODESK CLUB』No. 1，1992年，『AUTOCAD 製品概要』，1992年，『ASE-SQL』，1992年（いずれもオートデスク株式会社発行）を参照した。

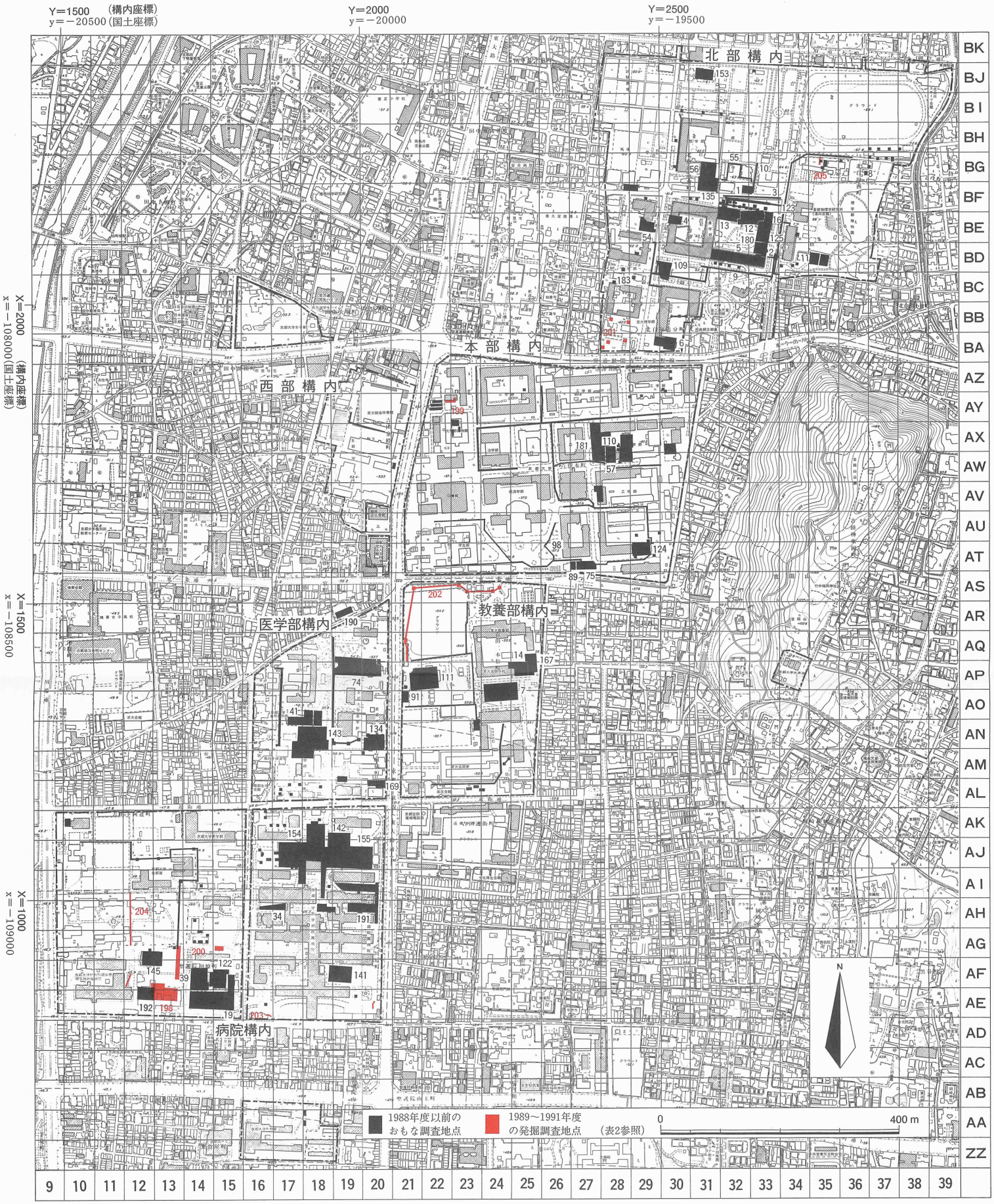
京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度

図　　版

1　　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

2～12　京都大学病院構内AH19区の発掘調査

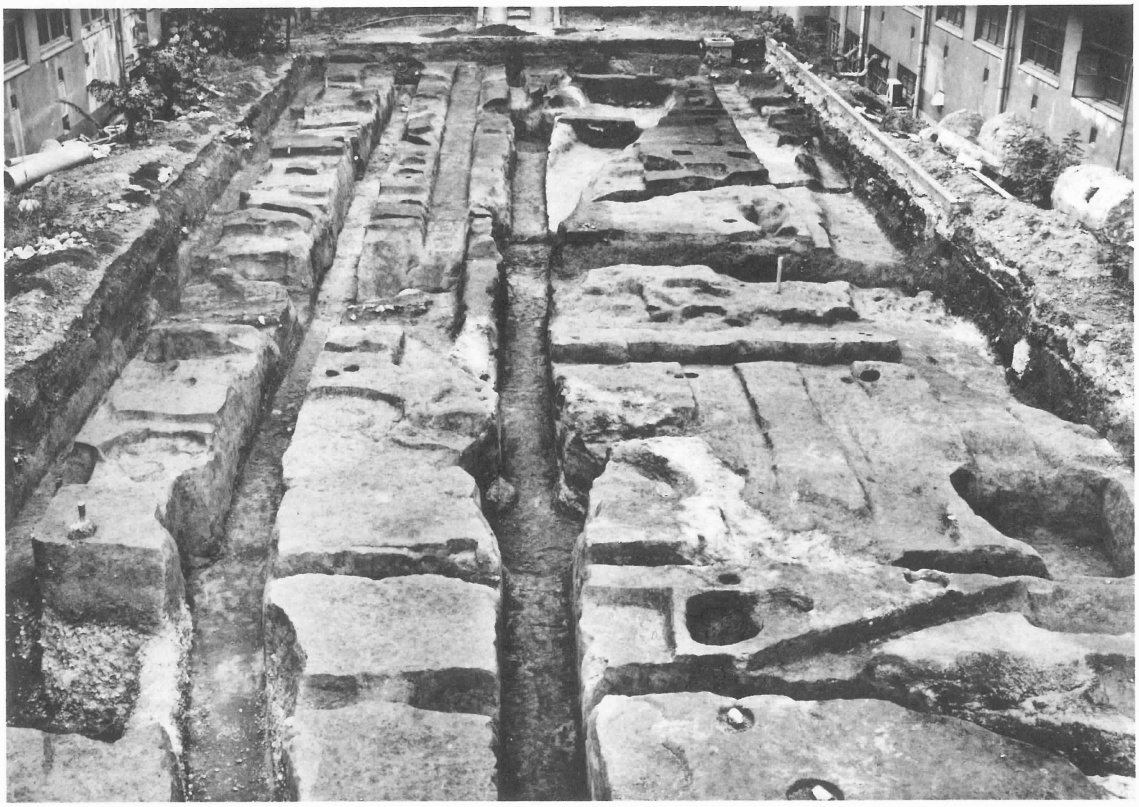
13～16　京都大学病院構内AE12・AE13区の発掘調査



図版1 京都大学吉田キャンパスの地区別調査地点

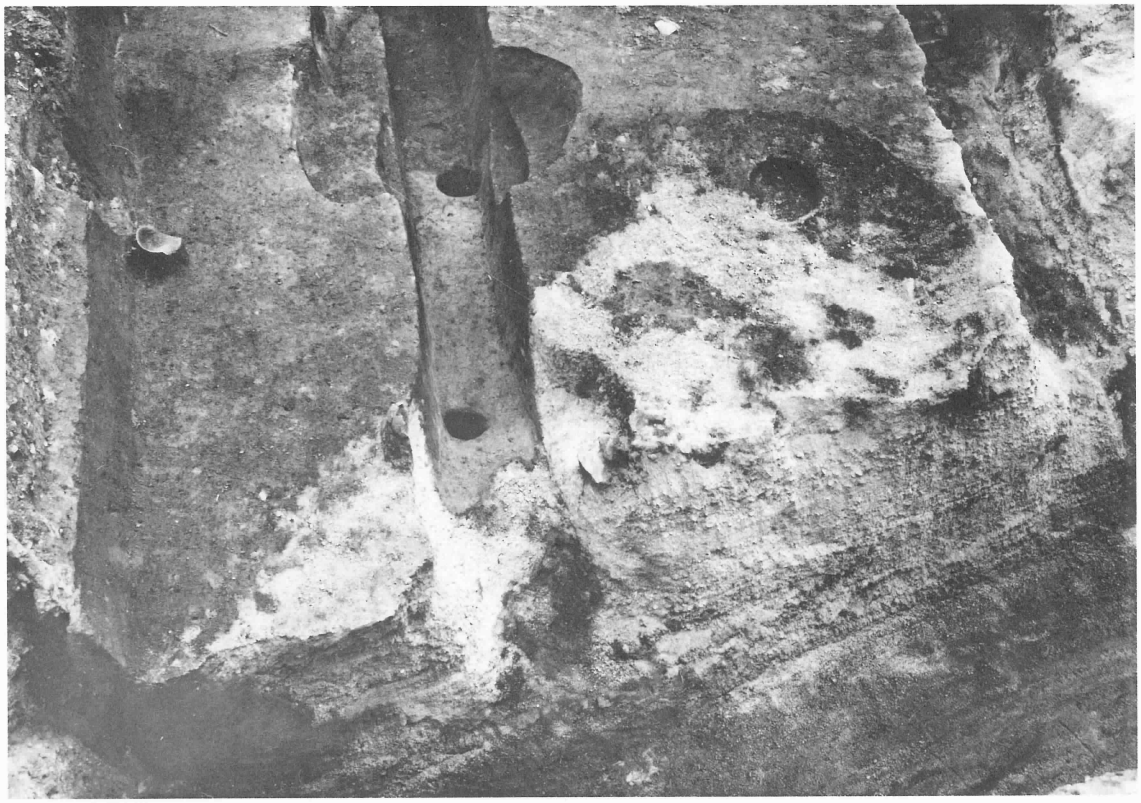
図版二　京都大学病院構内ＡＨ19区

1　調査区北部全景（東から）

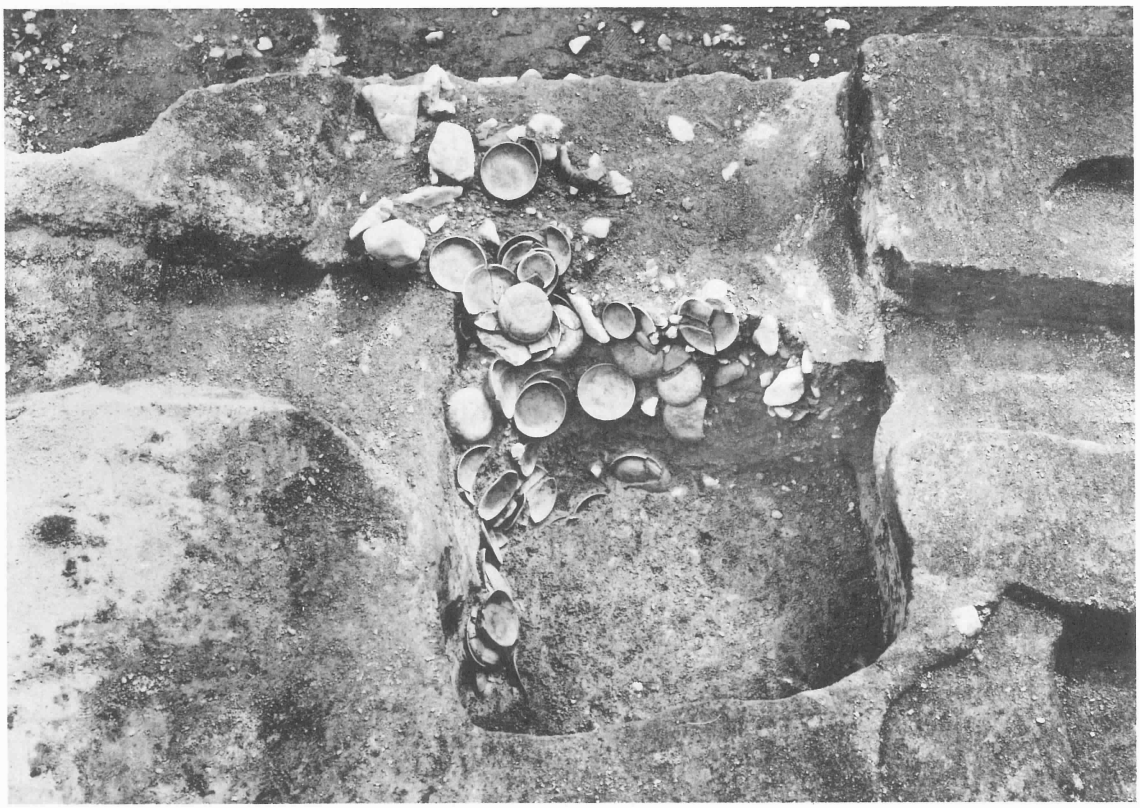


2　調査区南部全景（東から）

図版三　京都大学病院構内AH19区



1　土坑SK22（北から）



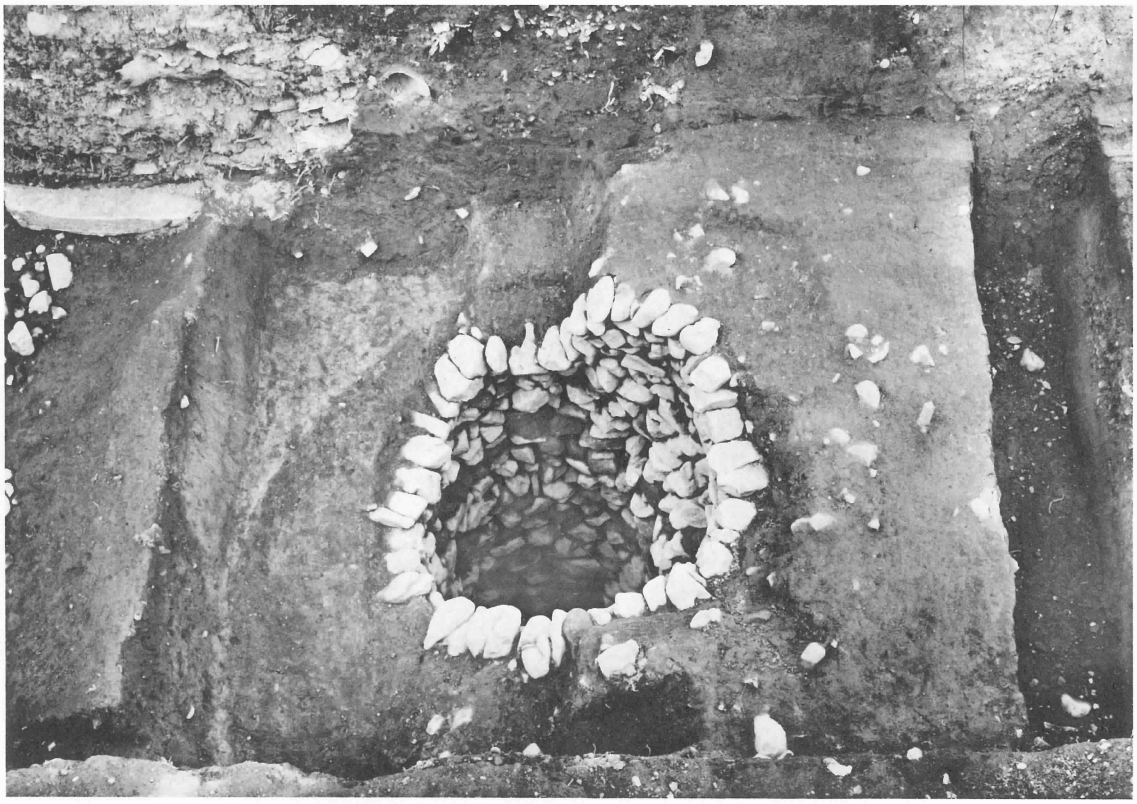
2　土坑SK３遺物出土状況（北から）

1　土坑SK６遺物出土状況（南から）

2　溝SD５（東から）

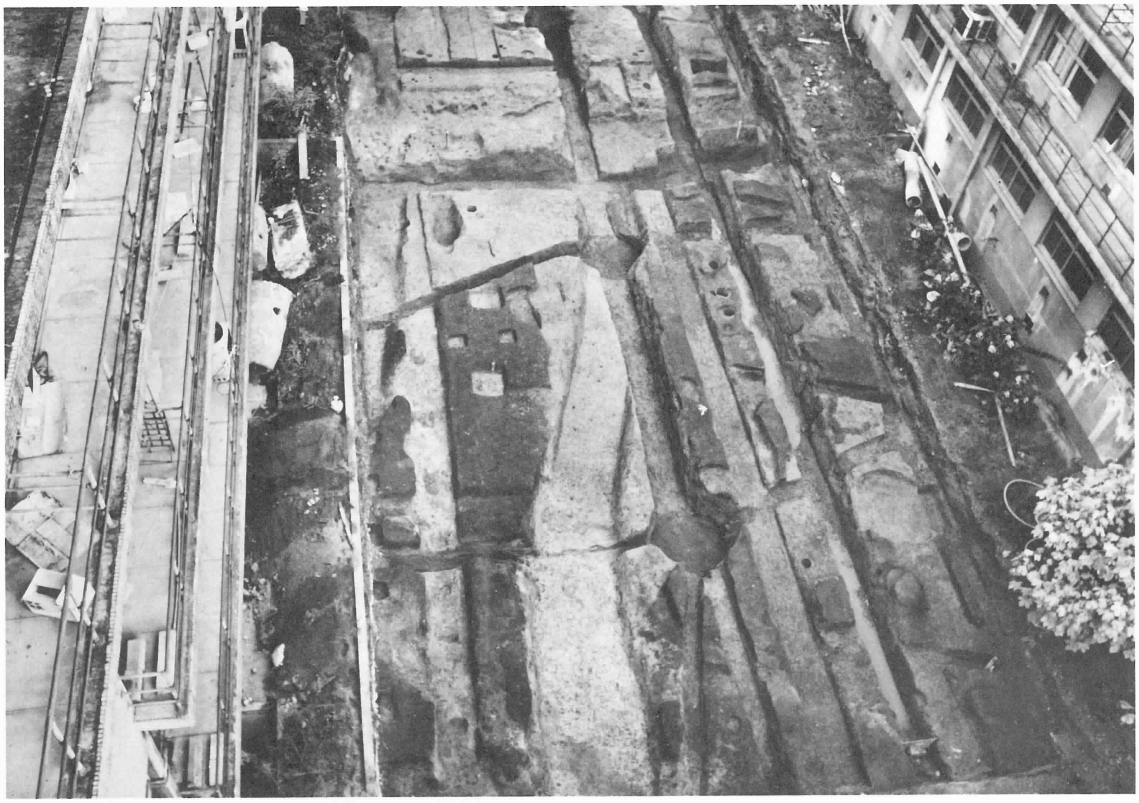
図版五　京都大学病院構内ＡＨ19区

1　井戸ＳＥ１（北から）



2　井戸ＳＥ２（東から）

図版六　京都大学病院構内ＡＨ19区

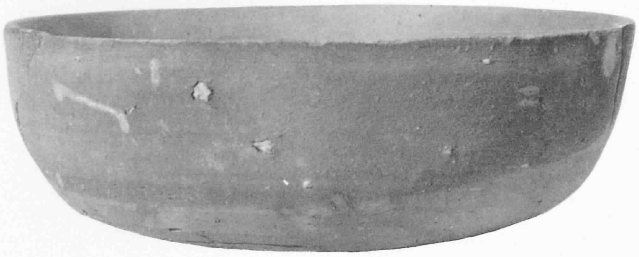


1　溝SD20～SD23（西から）

2　溝SD20埋積状況（東から）

Ⅱ5

Ⅱ13



Ⅱ7

Ⅱ14

Ⅱ17

Ⅱ15

Ⅱ18

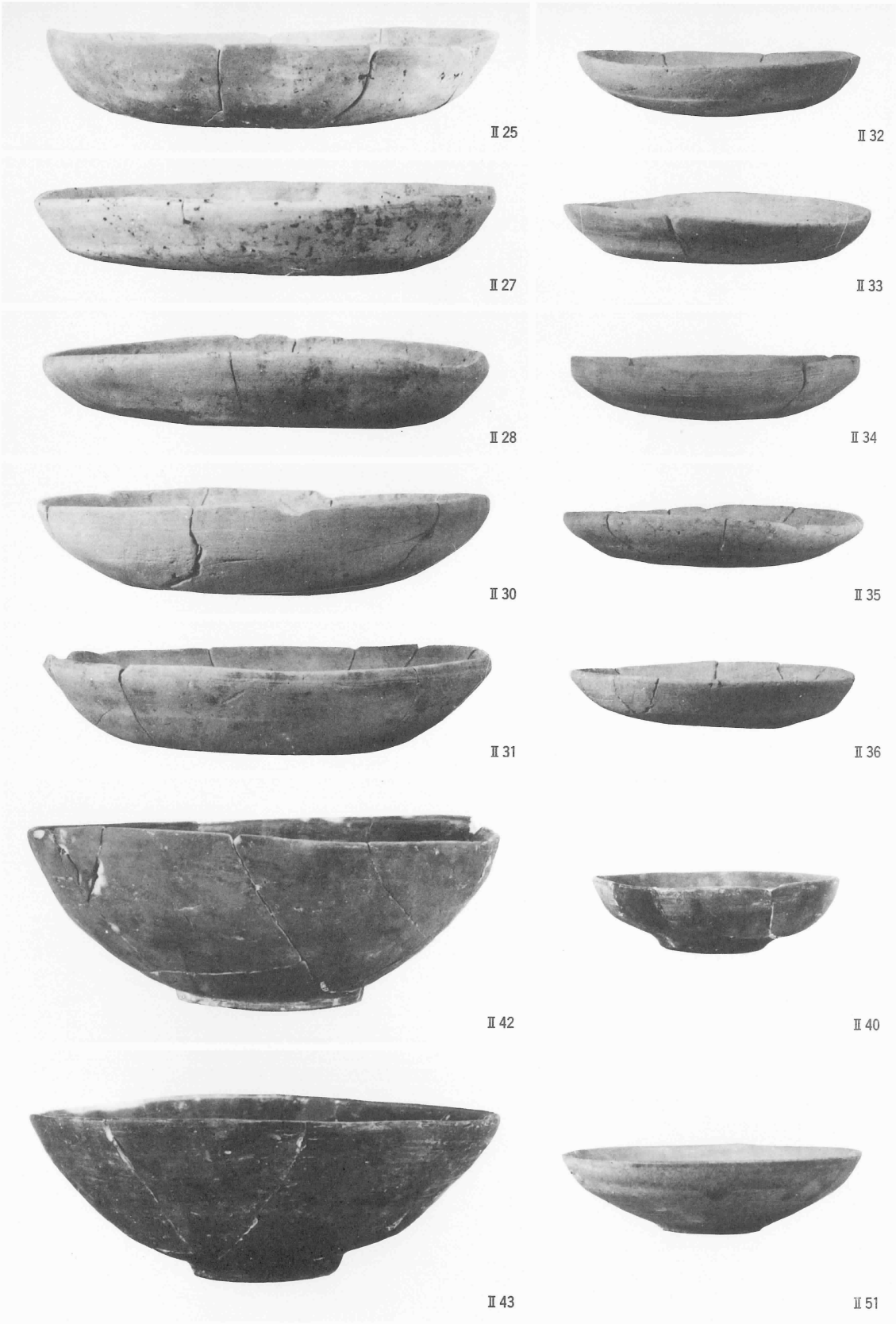
Ⅱ20

Ⅱ22

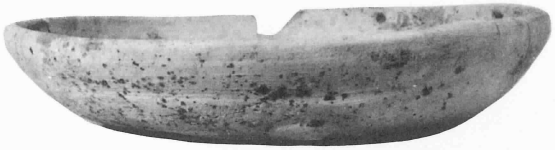
Ⅱ21

Ⅱ23

SK22出土遺物(Ⅱ5・Ⅱ7須恵器)，SK3出土遺物(Ⅱ14・Ⅱ15・Ⅱ17・Ⅱ18・Ⅱ20・Ⅱ21土師器，Ⅱ22・Ⅱ23瓦器)，SR2出土遺物(Ⅱ13須恵器)

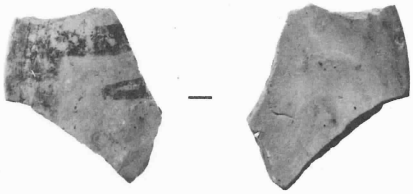


SK 6 出土遺物(Ⅱ25・Ⅱ27・Ⅱ28・Ⅱ30・Ⅱ31～Ⅱ36土師器，Ⅱ40・Ⅱ42・Ⅱ43瓦器，Ⅱ51白磁)

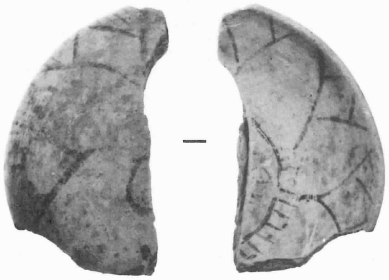


Ⅱ55

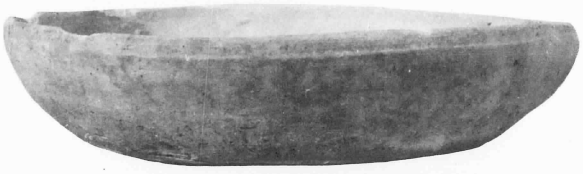
Ⅱ58



Ⅱ57



Ⅱ56



Ⅱ59

Ⅱ61

Ⅱ60

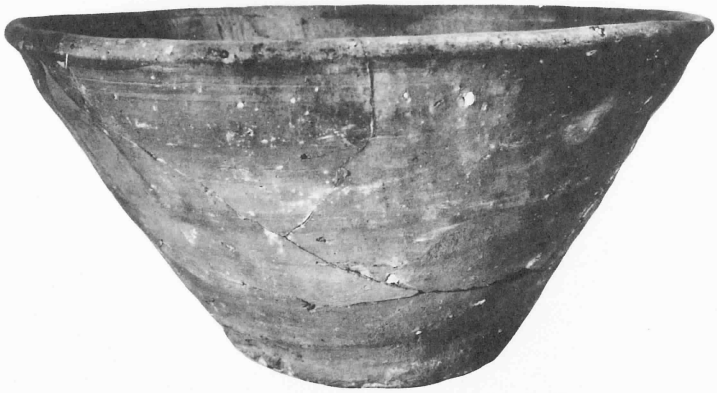
Ⅱ62

墨書土器(Ⅱ55SK３，Ⅱ56～Ⅱ58SK６)，SK23出土遺物(Ⅱ59～Ⅱ62土師器)

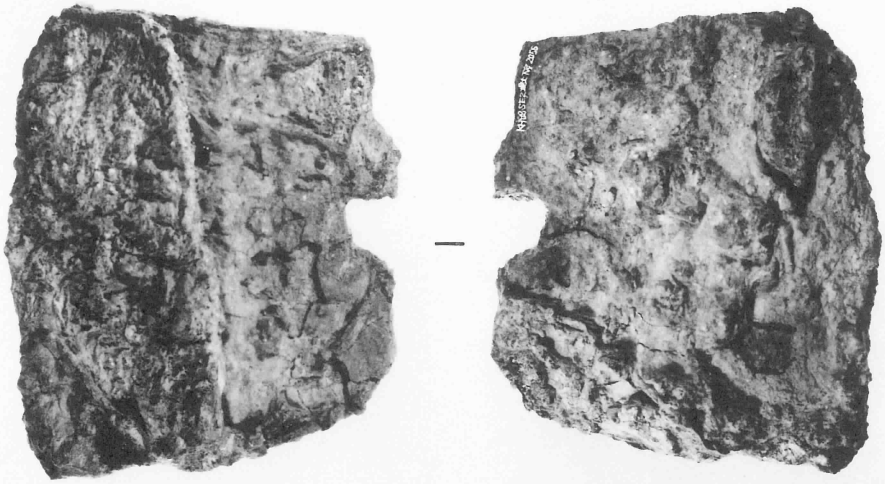
Ⅱ67

Ⅱ70

1/3　Ⅱ68

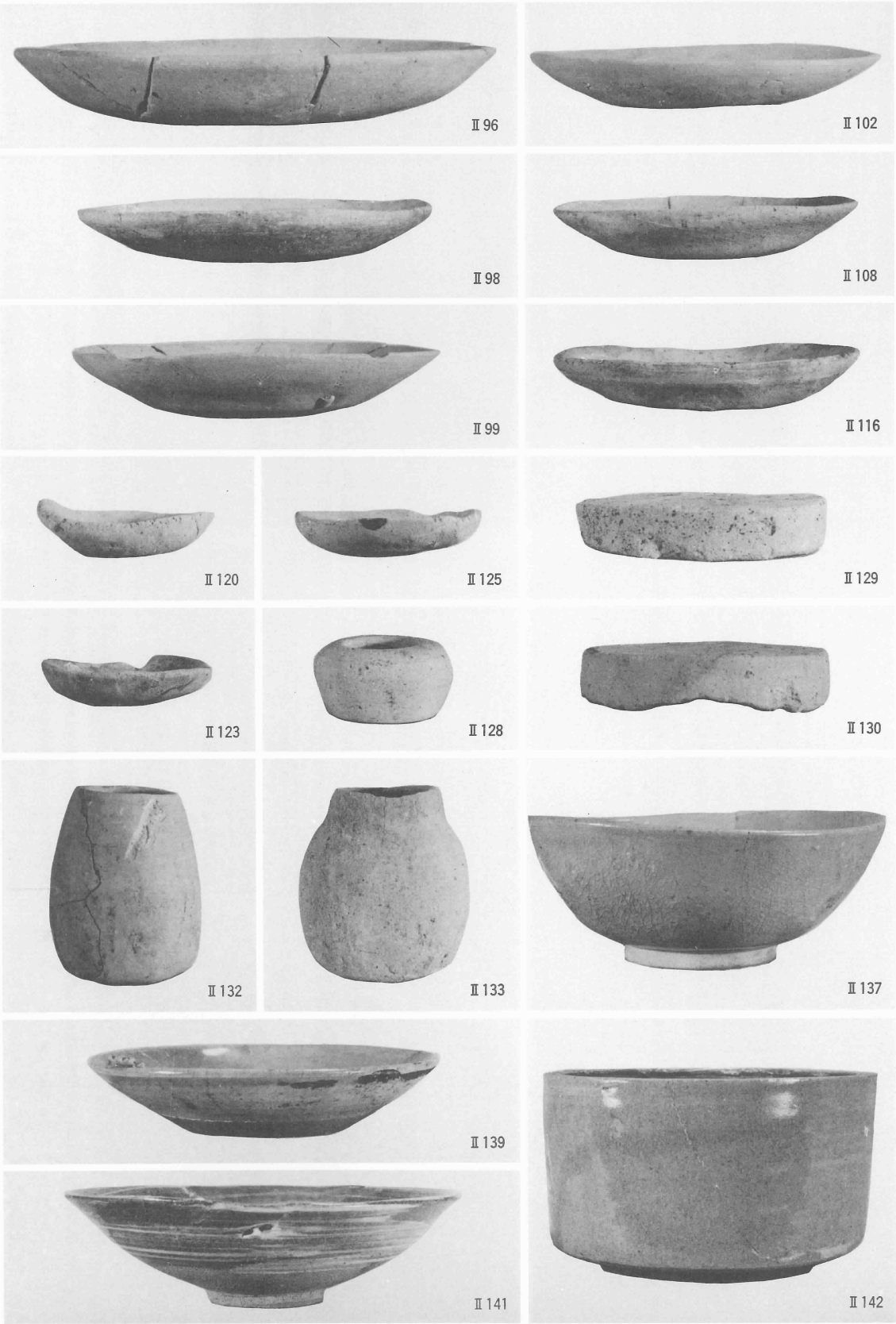


1/3　Ⅱ87

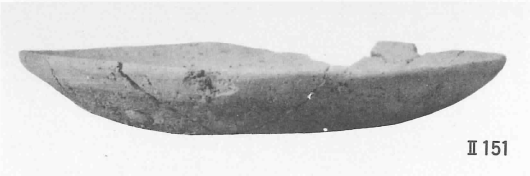


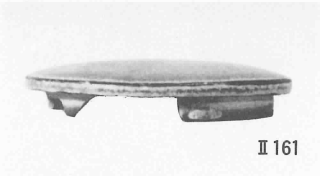
Ⅱ94

SK43出土遺物(Ⅱ67青磁，Ⅱ68瓦器)，SK20出土遺物(Ⅱ70土師器)，
SD５出土遺物(Ⅱ87陶器)，SR２出土遺物(Ⅱ94鉄製犁先)

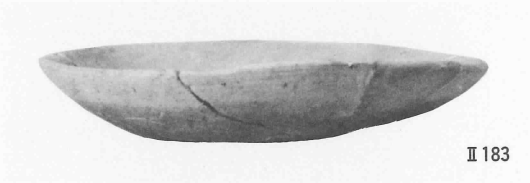


SD22出土遺物(Ⅱ96・Ⅱ98・Ⅱ99・Ⅱ102・Ⅱ108・Ⅱ116・Ⅱ120・Ⅱ123・Ⅱ125・Ⅱ128土師器,
Ⅱ129・Ⅱ130・Ⅱ132・Ⅱ133焼塩壺, Ⅱ137・Ⅱ139・Ⅱ141・Ⅱ142陶器)


Ⅱ151


Ⅱ161

Ⅱ159


Ⅱ183

Ⅱ185

Ⅱ145

Ⅱ174

Ⅱ146

Ⅱ175

Ⅱ148

Ⅱ176

Ⅱ173

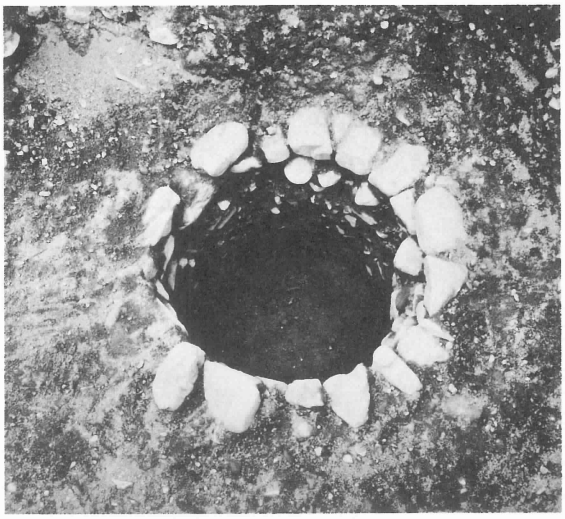
Ⅱ179

SD22出土遺物(Ⅱ145・Ⅱ146・Ⅱ148染付)，SD23出土遺物(Ⅱ151土師器，Ⅱ159焼塩壷，Ⅱ161陶器，Ⅱ173～Ⅱ176・Ⅱ179染付)，SD24出土遺物(Ⅱ183・Ⅱ185土師器)

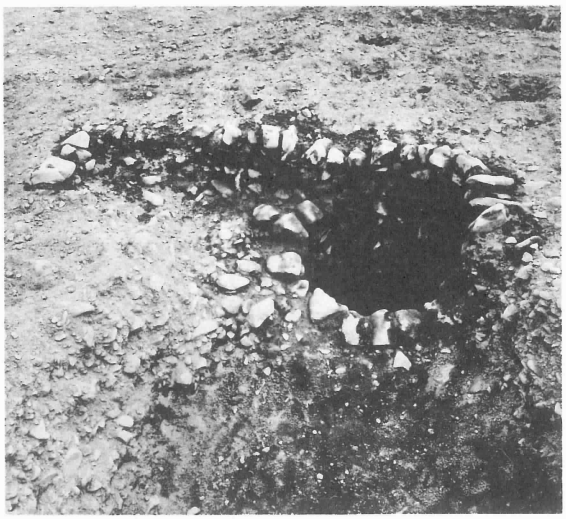
図版一三　京都大学病院構内AE12・AE13区

1　AE12区西半の遺構（南から）

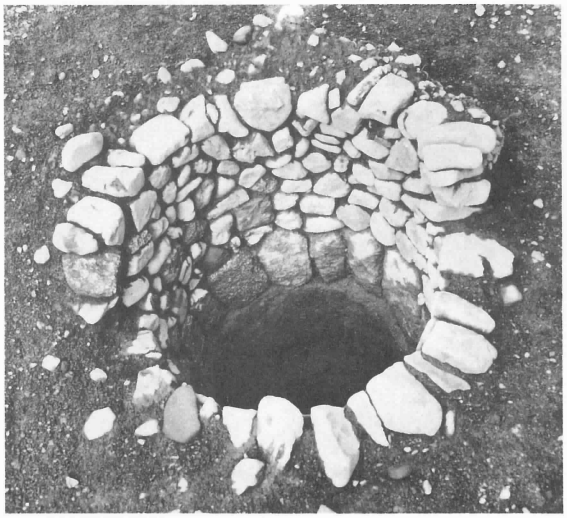
2　AE13区西半の遺構（北から）



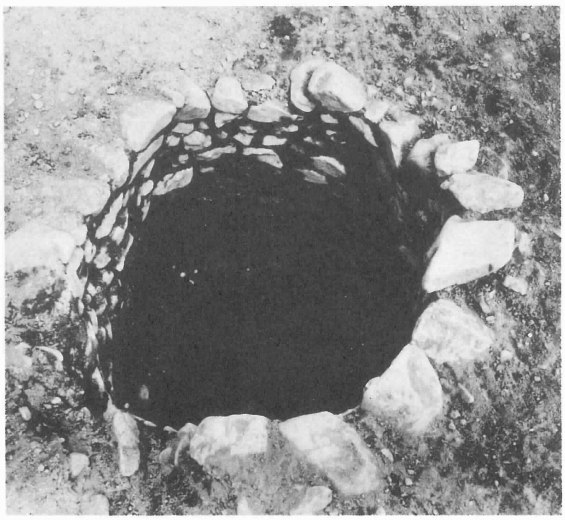
1　井戸SE25（東から）



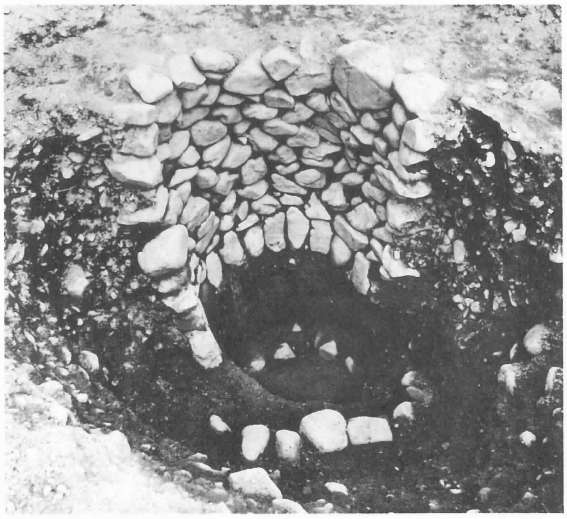
2　井戸SE18（西から）



3　井戸SE11（南から）

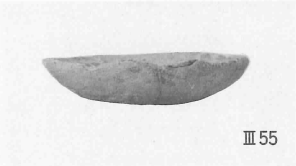


4　井戸SE21（南から）

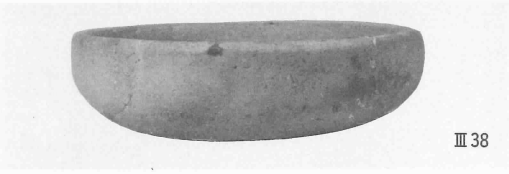


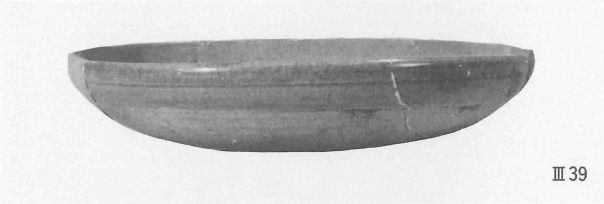
5　井戸SE22（南から）

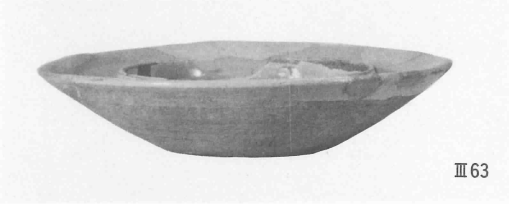
6　井戸SE８（南から）

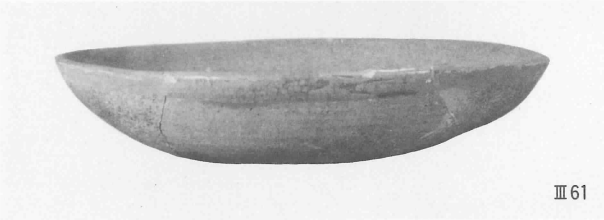

Ⅲ55

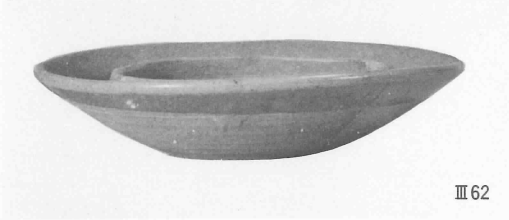
Ⅲ56


Ⅲ38

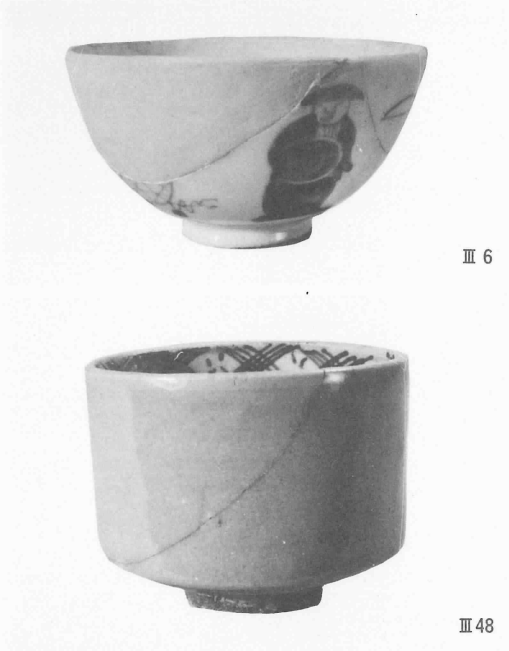

Ⅲ39


Ⅲ63


Ⅲ61


Ⅲ62

Ⅲ67

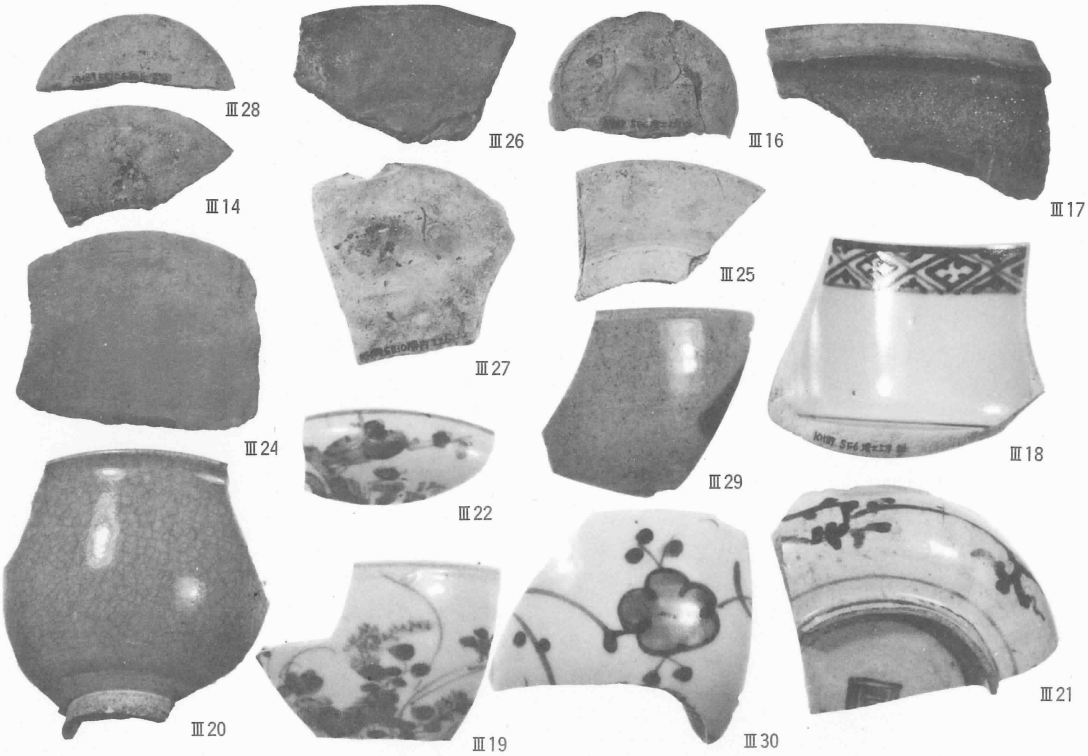

Ⅲ6

Ⅲ48

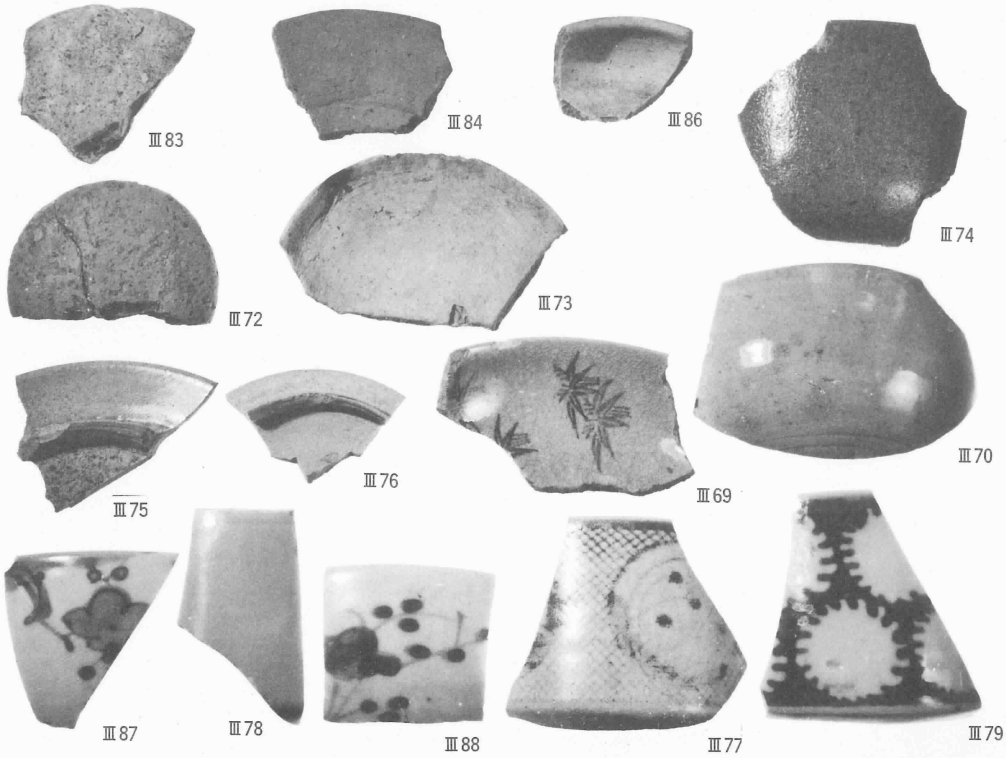
Ⅲ43

Ⅲ42

SE２出土遺物(Ⅲ６染付)，SE４出土遺物(Ⅲ38土師器，Ⅲ39陶器，Ⅲ42・Ⅲ43染付)，
SE15出土遺物(Ⅲ48染付)，SE16出土遺物(Ⅲ55・Ⅲ56土師器，Ⅲ61～Ⅲ63陶器，Ⅲ67染付)



1　SE１出土遺物(Ⅲ14・Ⅲ16・Ⅲ17土師器，Ⅲ18陶器，Ⅲ19～Ⅲ22染付)，
SE５出土遺物(Ⅲ24～Ⅲ28土師器，Ⅲ29陶器，Ⅲ30染付)



2　SE26出土遺物(Ⅲ69・Ⅲ70陶器)，SE24出土遺物(Ⅲ72・Ⅲ73土師器，Ⅲ74～Ⅲ76陶器，
Ⅲ77～Ⅲ79染付)，SE27出土遺物(Ⅲ83・Ⅲ84・Ⅲ86土師器，Ⅲ87・Ⅲ88染付)

1993年 5 月 31 日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
1989～1991年度

編集
発行　京都大学埋蔵文化財研究センター
京都市左京区吉田本町

印刷
製本　山代印刷株式会社
京都市上京区寺之内小川西入